

－南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XII－

(鹿児島西 IC～伊集院 IC)

山下堀頭遺跡

日置郡松元町 (現 鹿児島市)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西IC～伊集院IC間）建設に伴い、平成6年度に実施した山下堀頭遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって、縄文時代前期から中世にかけての遺構・遺物が数多く発見されました。

なかでも、弥生時代・古墳時代の住居跡の検出と絵画土器・鉄剣の出土や古代の方形周溝墓の検出は、各時期における南九州の文化の一端を明らかにする上で貴重な資料を提供することになりました。

この調査の成果が、地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発・普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御協力頂いた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や松元町教育委員会ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

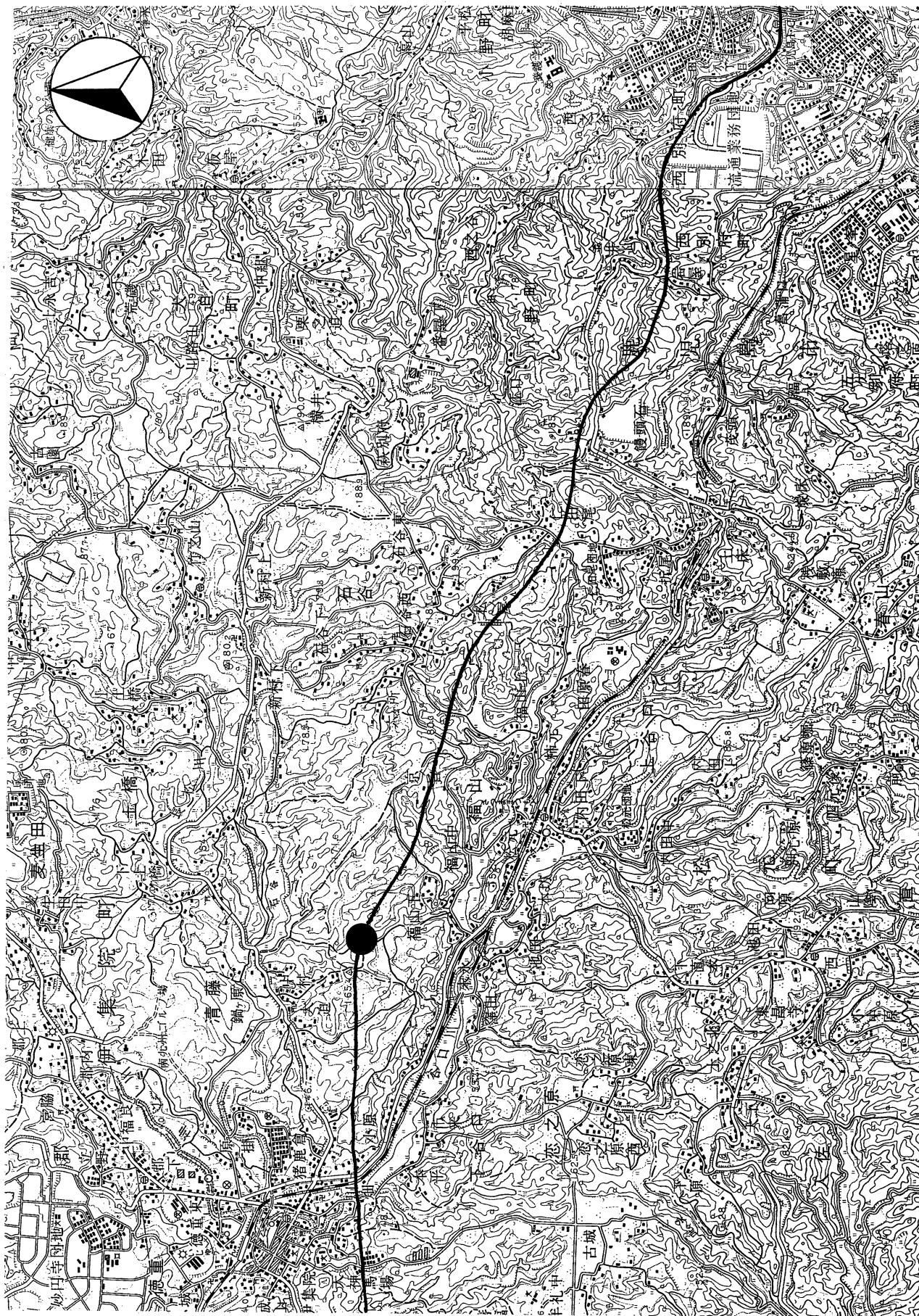
平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な	やましたぼりかしら							
書 名	山下堀頭遺跡							
副 書 名	南九州西回り自動車道（鹿児島道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	XII							
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	92							
編 著 者 名	西園 勝彦，東 和幸							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地－ 1							
発行年月日	2005年 3 月25日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
やましたぼりかしらいせき 山下堀頭遺跡	ひおきぐんまつもとちょう 日置郡松元町 ふくやまあざやましたぼりかしら 福山字山下堀頭	463647	31－17	31° 36′ 58″	130° 25′ 36″	平成 6 年 6 月20日 ） 平成 6 年 10月28日	4,800	南九州西 回り自動 車道（鹿 児 島 道 路）建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項
山下堀頭遺跡	散布地	中世・近世 古代 古墳時代 弥生（後期） 縄文時代 晩期 後期 前期		溝状遺構 1 条 方形周溝墓 1 基 住居跡 3 基 土坑 1 基		青磁・陶器 土師器，須恵器 成川式土器，鉄剣 中津野式土器 市来式土器，指宿式 土器，曾畑式土器 石鏃，磨石，石皿 出土総数 約9000点 出土箱数 約50箱		軽石製石製品 } 絵画土器 鉄剣



第1図 山下掘頭遺跡遺跡位置図 (1/ 50,000)

例 言

- 1 本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う，山下堀頭遺跡の発掘調査布告書である。
- 2 発掘調査は，建設省鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成6年6月20日から平成6年10月28日にかけて実施し，整理作業及び報告書作成は平成16年度に実施した。
- 4 遺物番号は通し番号とし，本文挿図図版の番号は一致する。
- 5 挿図の縮尺は，各図面に示した。
- 6 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 7 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は調査担当者が行った。
- 8 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。出土遺物の写真撮影は，西園勝彦が担当した。科学分析は，永濱功治，西園勝彦が行った。
- 9 本書の執筆は，西園，東和幸が担当し，編集は西園が行った。
- 10 出土した遺物に注記は，山下堀〇－〇区〇層〇〇〇（遺物No.）と記した。
- 11 出土遺物実測図写真などは鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用する予定である。

目 次

目 次
序 文
報告書抄録
例 言

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	6
1 調査の経緯	6
2 調査の組織	6
3 日誌抄	7
第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境	10
第1節 遺跡の位置及び自然環境	10
第2節 遺跡周辺の史的環境	10
第Ⅳ章 発掘調査の概要	13
第1節 調査の方法	13
第2節 基本的層序	16
第3節 縄文時代の発掘調査	18
1 遺物	19
(1) 土器	19
(2) 石器	21
第4節 弥生時代・古墳時代の調査	24
1 遺構	26
2 遺物	33
(1) 土器	34
(2) 鉄器	53
第5節 古代以降の調査	59
1 遺構	61
2 遺物	63
(1) 土師器	63
(2) 須恵器	63
(3) 陶磁器	65
(4) 古銭	66
(5) 軽石	66
第6節 山下堀頭遺跡の残存範囲	68
第Ⅴ章 科学分析	69
第Ⅵ章 発掘調査のまとめ	70

挿 図 目 次

第1図	山下堀頭遺跡置図
第2図	南九州西回り自動車道鹿児島道路 (鹿児島西IC～伊集院IC間)遺跡位置図
第3図	山下堀頭遺跡周辺遺跡
第4図	山下堀頭遺跡周辺地形
第5図	グリッド図及び確認トレンチ配置図
第6図	土層断面図
第7図	縄文時代の遺物出土状況図
第8図	縄文土器 I 類～V 類
第9図	縄文時代の石器
第10図	縄文時代の石器
第11図	弥生時代・古墳時代の遺構
第12図	弥生時代・古墳時代の遺物出土状況
第13図	1号竪穴住居跡・出土遺物
第14図	2号竪穴住居跡出土遺物
第15図	2号竪穴住居跡遺物出土状況図
第16図	2号竪穴住居跡
第17図	3号竪穴住居跡・出土遺物
第18図	1号土坑・出土遺物
第19図	甕形土器分類概念図
第20図	甕形土器 I 類
第21図	甕形土器 I 類
第22図	甕形土器 II 類
第23図	甕形土器 II 類
第24図	甕形土器 II 類・甕形土器胴部
第25図	甕形土器底部
第26図	壺形土器分類概念図
第27図	壺形土器 I 類
第28図	壺形土器 I 類
第29図	壺形土器 II 類・その他の壺形土器
第30図	壺形土器・肩部・胴部
第31図	壺形土器・胴部・底部
第32図	絵画土器
第33図	その他の土器
第34図	鉄剣
第35図	古代以降の遺構
第36図	古代以降の遺物出土状況
第37図	方形周溝墓・出土遺物
第38図	甕形土器
第39図	古代以降の遺物
第40図	土師器琿赤色顔料スペクトル
第41図	古銭

第42図	軽石出土状況図
第43図	山下堀頭遺跡残存範囲
第44図	粘土痕
第45図	遺構間接合遺物・絵画土器・ジョッキ形土 器・高坏形土器・埴形土器・出土位置図

表 目 次

第1表	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（鹿 児島西IC～伊集院IC）
第2表	周辺遺跡地名表
第3表	縄文土器観察表
第4表	縄文時代の石器観察表
第5表	弥生時代・古墳時代の土器観察表
第6表	古代以降の遺物観察表

図版目次

図版1	遺跡近景
図版2	竪穴住居跡
図版3	竪穴住居跡
図版4	竪穴住居跡
図版5	竪穴住居跡・土坑
図版6	方形周溝墓
図版7	縄文土器
図版8	縄文時代の石器
図版9	甕形土器
図版10	甕形土器
図版11	甕形土器
図版12	甕形土器・胴部・底部
図版13	壺形土器
図版14	壺形土器
図版15	壺形土器・胴部・底部
図版16	絵画土器
図版17	その他の土器
図版18	高坏形土器
図版19	鉄剣
図版20	古代以降の遺物
図版21	軽石製石製品
図版22	軽石

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成2年8月に鹿児島西ⅠC～伊集院ⅠC間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成3年度から平成14年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内（鹿児島西ⅠC～伊集院ⅠC）の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 山ノ中 鹿児島市西別府町山ノ中に所在し、標高100～133mの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で、縄文時代後期前の竪穴住居跡17基が検出された。出土土器は、指宿式土器に先行する土器が主体となり南福寺式や磨消縄文、それに指宿式土器が少量出土した。また、高知県で見られる松ノ木式土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他、弥生時代の磨製石鏃や古墳時代の成川式土器、平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中世では古道跡が検出され、陶磁器や古銭も出土した。
- 2 宮尾 松元町石谷字宮尾に所在し、仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200mの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック1か所、縄文時代では早期の集石4基と平椀式・塞ノ神式・条痕文土器、石鏃・石匙・石皿などが出土したほか、後期と推定される落とし穴を主とする土坑101基が検出された。その他、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡1棟が焼土域7か所や土師器とともに検出された。
- 3 仁田尾 松元町石谷字仁田尾・高塚に所在し、標高約190mのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期～晩期）、平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43か所のブロック、56基の礫群と2万点を越える遺物が出土している。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・搔器・削器・彫

器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位から68か所のブロック、6基の礫群、16基の落とし穴と9万点を上回る遺物が出土した。縄文時代では、遺構が集石10基（早期4，前～後期6），土坑11基（早期7，晚期4），落とし穴2基（晚期）が検出され、また、アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曾畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式・市来式土器，（晚期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

- 4 西ノ原B 松元町石谷字西ノ原に所在し、仁田尾遺跡の隣接地で、小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約190mの痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は1,300㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群1基と14か所のブロックが検出され、ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は成川式土器であった。
- 5 前山 松元町石谷字前山に所在し、標高約200mの台地北側に立地する。調査面積は9,600㎡である。遺跡は、A・B地区に分かれ、旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の二時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し、上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し、2基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が4基の礫群とともに出土した。縄文時代では、早期の吉田式土器と集石、前期の轟式土器が出土し、古墳時代では成川式土器が出土した。
- 6 栢堀 松元町石谷字栢堀に所在し、標高約195mのシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は2,700㎡である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが19か所検出され、遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石、晩期の土坑と溝状遺構が検出され、遺物は岩本式・前平式・平楯式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し、石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また、古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。
- 7 前原 松元町福山字前原・鬼ヶ迫上に所在し、標高は約180mの舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は19,400㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが、主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構はA・B・Cの三地区に分けられる。（A）12基の竪穴住居跡が2支群に分かれ、連穴土坑を含む土坑約130基と集石14基が、前平式・石坂式土器と検出された。（B）竪穴住居跡13基、連穴

土坑35，土坑45，集石 4，祭祀遺構 1 と幅1.5～2 mの道路跡 2 条が前平式・吉田式・石坂式土器と検出された。(C) 竪穴住居跡 3 基，土坑131，落とし穴 1 基が吉田式・石坂式土器と検出された。石器は，石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・軽石製品・剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では，塞ノ神式土器が落とし穴 2 基，溝 1 条と出土し，押型文土器・手向山式土器も出土した。また，縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に，少量の曾畑式土器も出土した。

- 8 フミカキ 松元町福山字フミカキに所在し，標高約170mのシラス台地上に立地する。調査面積は5,400㎡で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑 2 基・集石10基が検出され，早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曾畑式・轟式，晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また，弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。
- 9 山下堀頭 松元町福山字山下堀頭に所在し，シラス台地に囲まれた開析谷の標高約133mの台地裾部に立地する。調査面積は4,800㎡で，縄文時代前期の曾畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居が 3 基検出され，遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し，周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が 1 基検出され，主体部からはなにも出土しなかったが，周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

※ 刊行報告書

「朽堀遺跡・西ノ原 B 遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (30) 2002. 3

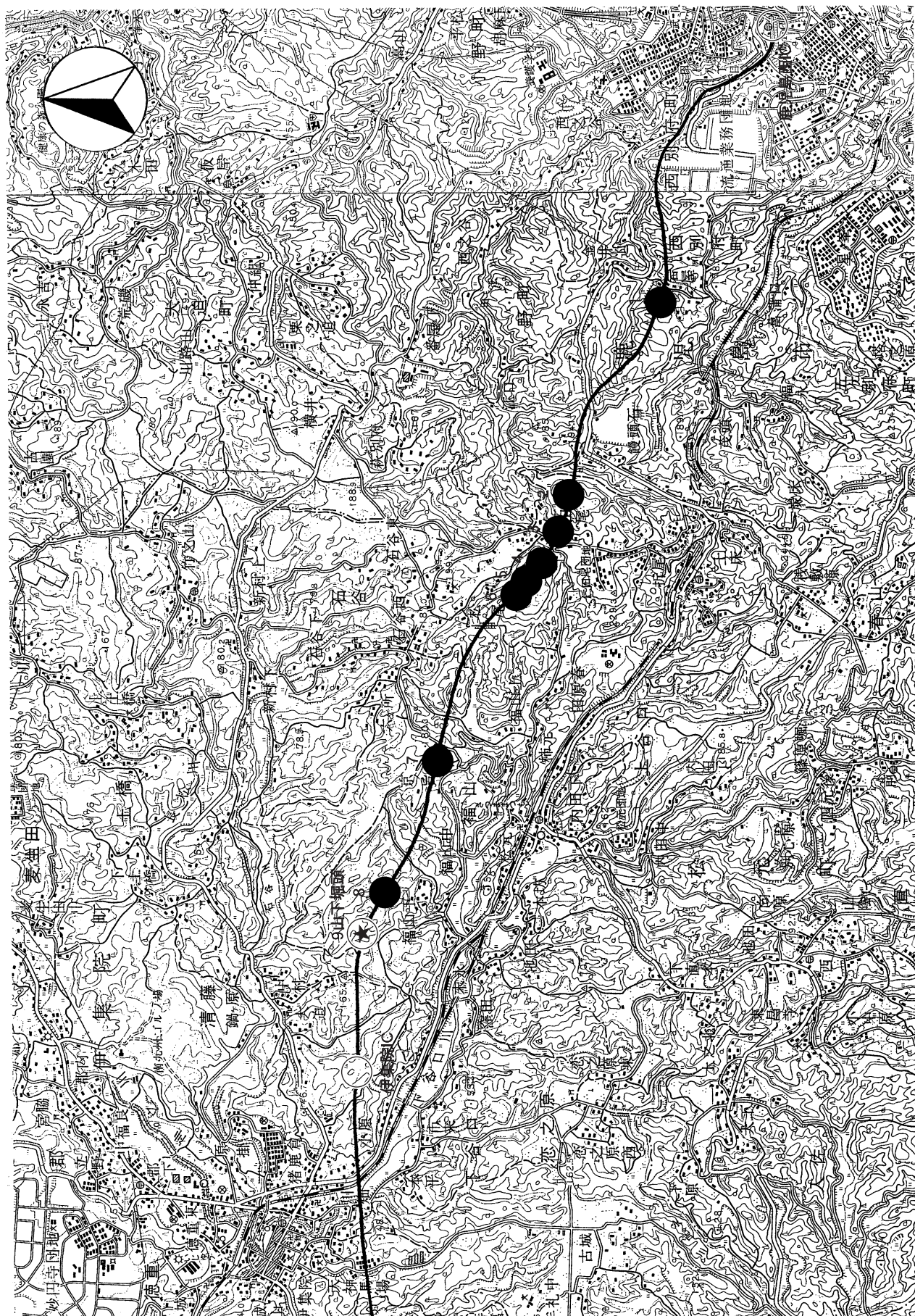
「宮尾遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (73) 2004. 3

「フミカキ遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (74) 2004. 3

「山下堀頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (92) 2005. 3

第1表 南九州西回り自動車道鹿兒島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（鹿兒島西IC～伊集院IC）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	調査員	時代	概 要
1	山ノ中	鹿兒島市西別府町	12,000	H6.5～6 H7.5～H8.3	東・菅牟田・西園	縄文 古墳 平安	住居跡、指宿式・中原式・松ノ木式土器・石皿・磨石 成川式土器 土坑、須恵器・土師器
②	宮尾	鹿兒島市石谷町	8,400	H5.12～H6.3 H8.4～9	牛ノ濱・東・繁昌・三垣	旧石器 縄文 奈良・平安	剥片・碎片 集石、落とし穴、土坑、条痕文・塞ノ神式土器 掘立柱建物跡、須恵器・土師器 県埋文センター報告書73 2004刊行
3	仁田尾	鹿兒島市石谷町	34,500	H5.4～H6.3 H6.4～H7.3 H7.7～H8.3	池畑・宮田・今村・寺原・園田・前村・牛ノ濱・常田・繁昌・三垣	旧石器 縄文	礫群、落とし穴、ブロック ナイフ・尖頭器・台形石器・MC・MB 掘立柱建物跡、溝、集石・落とし穴・土坑 前平式・吉田式・礪式・管煙式・市来式・黒川式土器 掘立柱建物跡、溝、須恵器・土師器
④	西ノ原B	鹿兒島市石谷町	1,300	H6.10～11	牛ノ濱・園田	旧石器 古墳	礫群、ナイフ・三稜尖頭器・MC・MB 成川式土器 県埋文センター報告書30 2002刊行
5	前山	鹿兒島市石谷町	9,600	H7.5～H8.3 H8.4～9	鶴田・桑波田・橋口・元田	旧石器 縄文 古墳	台形様石器・ナイフ・剥片尖頭器・MC 前平式・礪式土器 成川式土器
⑥	枳堀	鹿兒島市石谷町	11,000	H4.12～H5.3 H5.4～6	牛ノ濱・新町・元田	旧石器 縄文 平安	MC・MB 溝、前平式・平格式・礪式・黒川式土器・石槍・砥石 青磁・須恵器・土師器・石鍋 県埋文センター報告書30 2002刊行
7	前原	鹿兒島市福山町	53,500	H3.10～H5.11 H6.1～H8.10	牛ノ濱・新町・前迫・前村・元田・東・園田・菅牟田	旧石器 縄文	礫群、台形石器・三稜尖頭器・MC・MB 住居跡、道跡、連穴土坑、土坑、集石 前平式・吉田式・石坂式・押型文・岩崎式・黒川式土器 石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧
⑧	フミカキ	鹿兒島市福山町	7,200	H6.10～H7.3 H7.5～6	東・菅牟田・西園	縄文 平安	集石、連穴土坑、石坂式・押型文・黒川式土器 須恵器 県埋文センター報告書74 2004刊行
⑨	山下堀頭	鹿兒島市福山町	5,500	H6.6～10	東・菅牟田	縄文 弥生 平安	曾畑式土器 住居跡、鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓、須恵器 県埋文センター報告書92 2005刊行



第2図 南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西IC～伊集院IC間）遺跡位置図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

1 調査の経過

建設省九州建設局（現国土交通省九州建設局）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路建設を計画した。工事区間内の埋蔵文化財取り扱いについて建設省鹿児島国道工事事務所（国土交通省鹿児島国道工事事務所）は、鹿児島県教育委員会との協議に基づき鹿児島県知事と委託規約を結び、工事前に埋蔵文化財の分布調査、確認調査及び本調査を実施することにした。調査は、委託事業として鹿児島県教育庁文化課（現文化財課）が行った。

平成2年8月に鹿児島インターチェンジと伊集院インターチェンジ間の分布調査が行われ、松元町字山下堀頭で、遺物の散布が確認された。これに伴い建設省九州建設局は、文化課と埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行った。協議の結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。確認調査は、調査主体者である県文化課が実施し、平成3年9月19日から10月4日まで調査した。

その結果、4,800㎡にわたり弥生時代後期、古墳時代の遺物包含層が確認された。

県文化課と県立埋蔵文化財センターは（平成4年度設立）、確認調査の結果を踏まえ、建設省九州建設局と協議を行い、本調査を実施することとなった。

本調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが主体となり、平成6年6月20日～10月28日に実施した。発掘調査総面積は4,800㎡である。

発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成6年の発掘調査時においても、遺物の水洗・注記・図面整理等の作業を平行して行っていたが、本格的な作業を平成16年度に実施した。

2 調査の組織

確認調査（平成3年度）

事業主体者： 建設省鹿児島国道工事事務所

調査主体者： 鹿児島県教育委員会

企画・調整： 鹿児島県教育庁文化課

調査責任者：	〃	課 長	向山 勝貞
調査企画者：	〃	課 長 補 佐	濱松 巖
	〃	参 事	立園 多賀生
	〃	主 幹	田村 洋一
	〃	主任文化財研究員 埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調 査 担 当：	〃	主 査	牛ノ濱 修
	〃	文化財調査員	新町 正
事務担当者：	〃	主幹兼企画助成 係 長	濱崎 琢也
	〃	主 査	枇杷 雄二
	〃	主 事	新屋敷由美子

本調査の組織（平成6年度）

事業主体者：	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者：	鹿児島県教育委員会		
企画・調整：	鹿児島県教育庁文化課（現文化財課）		
調査責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	内村 正弘
調査企画者：	〃	次長兼総務課長	川原 信義
	〃	主任文化財主事 兼 調 査 課 長	戸崎 勝洋
	〃	主任文化財主事	新東 晃一
調 査 担 当：	〃	文化財研究員	東 和幸
	〃	文化財調査員	菅牟田 勉
事務担当者：	〃	主 査	成尾 雅明
	〃	主 事	中村 和代

報告書作成

事業主体：	国土交通省鹿児島国道工事事務所		
報告書作成事業主体：	鹿児島県教育委員会		
報告書作成責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木原 俊孝
報告書作成企画者：	〃	次長兼総務課長	賞雅 彰
	〃	調 査 課 長	新東 晃一
	〃	調査課長補佐	立神 次郎
	〃	主任文化財主事 兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成担当者：	〃	文化財主事	東 和幸
	〃	文化財研究員	西園 勝彦
事務担当者：	〃	総 務 係 長	平野 浩二
	〃	主 査	脇田 清幸

報告書作成検討委員会 平成16年12月27日 所長ほか 11名

報告書作成指導委員会 平成16年12月20日 調査課長ほか 4名

企 画 担 当 者 中村 耕治・川口 雅之

3 日誌抄

調査の経過は日誌抄により以下略述する。

確認調査

月 日	調 査 の 経 過
9 / 19～20	駐車場整備，伐採， STA140とSTA141を基準に10m×10mのグリッドを設定し，グリッドに合わせて2 m×30mのトレンチを1本，2 m×15mのトレンチを1本の合計2本のトレンチを設定し掘り下げを開始した。
9 / 23～27	トレンチからの遺物の出土無し。トレンチⅢ層から弥生時代・古墳時代の遺物が出土。トレンチⅣ層以下からの遺物の出土無し。
9 / 30 ～10 / 4	掘り下げ終了トレンチ側土層断面図実測。遺物平板実測。埋め戻し作業

本調査（平成6年度）

月 日	調 査 の 経 過
6 / 20～24	プレハブ設置，道具搬入，電気・水道・ガス敷設，基準杭打ち， 重機による表土剥ぎ，表土剥ぎ後の精査によりI－19区に掘り込みを確認し掘り下げを行う， 表土下がアカホヤ火山灰層（Ⅲ層）の箇所あり
6 / 28 ～7 / 1	重機による表土剥ぎ，表土剥ぎ後の精査，I－19区掘り込み掘り下げ， E－18・19区，F－18区…Ⅲ層掘り下げ
7 / 4～8	E－18・19区 F－18・19・20区 G－19・20区…Ⅲ層掘り下げ，I－19区掘り込み断面 の写真撮影・実測，重機による表土剥ぎ
7 / 11～15	重機による表土剥ぎ，グリッド杭打ち，G・H・I－17・18区…Ⅱ層掘り下げ， F－16区に方形周溝状遺構を検出・検出状況写真撮影
7 / 18～22	重機による表土剥ぎ，G・H・I－16区 H－17区…Ⅱ層掘り下げ，E－14区に近代の溝 状遺構を検出・掘り下げ，方形周溝状遺構の検出時点での平面実測を行う 台風7号
7 / 25～29	H－17・18，I－18区…Ⅱ層Ⅲ層遺物取り上げ，G・H・I－17・18区 コンタ図作成 I－18区にⅢ層の土器集中箇所を確認する
8 / 2～5	H－17区 Ⅲ層上部から鉄剣出土 G・H・I－16・17区 Ⅱ層Ⅲ層掘り下げ・コンタ図作成 I－18区 土器集中箇所遺物実測・遺物取り上げ
8 / 8～12	F・G・H－17区Ⅱ層Ⅲ層掘り下げ，F～I－18区 Ⅲ層上面でのコンタ図作成 I－18区 土器集中箇所遺物実測・遺物取り上げ 河口貞徳氏現地指導 台風14号
8 / 17～19	H・I－14・15区 I層掘り下げ
8 / 22～26	F～I－13・14区 I層掘り下げ・遺構を検出する H・I－14区Ⅲ層上面でのコンタ図作成， F－13区遺構掘り下げ 黒色埋土 F－12～15区へ延びる
8 / 30 ～9 / 2	G・H・I－12区 I～Ⅱ層掘り下げ， F・G・H・U・I－13区 Ⅲ層上面でのコンタ図作成 I－12区 掘り込みを検出，半裁し掘り下げを行う
9 / 5～9	H－12区 I・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ H－15区 掘り込み掘り下げ1号土坑とする H・I・J－12区 Ⅲ層上面でのコンタ図作成， G－16区Ⅲ層の土器集中箇所を確認し実測を行う 方形周溝状遺構の周溝部掘り下げ，軽石製石製品出土
9 / 12～16	F・G・H－16・17区Ⅲ層掘り下げ I－18区 掘り込み清掃写真撮影断面実測を行う 方形周溝状遺構の主体部掘り下げ 14・15日 岩崎卓也先生現地指導

9 / 19～23	G-15・16, F・G・H・I-17区 Ⅲ層掘り下げ F-13・14区 溝状遺構検出 写真撮影 方形周溝状遺構 主体部掘り下げ 実測, 周溝部遺物出土状況写真撮影・実測・遺物取り上げ 土壌サンプリング I-13～17区 断面実測 F-12～15区 溝状遺構掘り下げ I-18区 土器集中箇所断面実測, 1号竪穴住居とする
9 / 27～29	F・G・H-17区 遺構検出 F・G-16区 Ⅲ層掘り下げ 1号住居断面実測 I-12区, G-12・13区, H-12区 断面実測
10 / 3～7	F-17区の掘り込みを2号土坑とする 断面実測 遺物出土状況実測・遺物取り上げを行う 順次掘り下げ F・G・H-16区Ⅲ層掘り下げ I-14・15, F-13区 断面実測, G-16区土器集中箇所遺物出土状況実測・遺物取り上げ 方形周溝状遺構 完掘写真撮影 実測 3号土坑掘り下げ
10 / 9～14	2号土坑・3号土坑掘り下げ・遺物出土状況実測・遺物取り上げ・掘り下げ 2号土坑・3号土坑周辺に若干色調の異なる土を確認し掘り下げを行う・遺物出土フミカキ遺跡へプレハブ等の移転・道具類の搬入を行う
10 / 17～21	フミカキ遺跡の発掘調査と平行して遺構掘り下げ・実測等を行う 2号土坑・3号土坑周辺の掘り下げと遺物出土状況写真撮影・実測・遺物取り上げを順次行う。共に土坑内・周辺にpitを確認, 特に2号土坑は土坑周辺の掘り下げを行った箇所より焼土跡も検出。そのため2号土坑・3号土坑をそれぞれ2号竪穴住居・3号竪穴住居とする。
10 / 24～28	遺構完掘写真撮影・実測 調査終了

報告書作成（平成15年度）

4月	遺物分類・土器接合・遺物復元
5月	土器接合・遺物復元・原稿作成
6月	土器接合・遺物復元・土器分類・原稿作成
7月	土器接合・遺物復元
8月	土器接合・遺物復元
9月	遺物実測・遺物復元
10月	遺物実測・遺物復元・原稿作成
11月	遺物復元・遺物トレース・レイアウト・原稿作成
12月	遺物復元レイアウト・写真撮影・原稿作成
1月	遺物整理・収蔵・原稿校正
2月	遺物整理・収蔵・図面整理・原稿校正
3月	遺物整理・収蔵・図面整理・原稿校正

第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境

第1節 遺跡の位置及び自然環境

山下堀頭遺跡の所在する松元町は、北緯30° 36′ 58″ 東経130° 25′ 36″ のところにあり、薩摩半島のほぼ中央に位置している。県庁所在地である鹿児島市に隣接し、南は吹上・日吉両町、西は伊集院町に接する。平成16年11月に鹿児島市を含む1市5町と合併した。

地形的には、東西7.4km、南北11kmのほぼ三角形の形をし、概ね標高150mから200mのシラス台地が点在している。南部は標高300m級の山岳と溪谷から成る。全体が丘陵と沢や溪谷から成り立った地勢であり、沢や溪谷を流れる小流は、水田の形成を促している。

山下堀頭遺跡は松元町福山に位置し、松元町役場のある町の中心部から北西へ約1.5km離れる。シラス台地の浸食により形成された谷の段丘上に位置し、前面と後背に標高約130mのシラス台地を臨み、東シナ海へ注ぐ石谷川・下谷口川が近くを流れている。近世から現在に至るまで畑地・水田として利用されていたようであり、水には事欠かない場所で遺跡の立地条件としては良好な場所である。また、東方にフミカキ遺跡を見上げ、フミカキ遺跡を通り続いてくる古道が調査区付近を走っている。

第2節 遺跡周辺の史的環境

松元町には、旧石器時代から近世まで長期にわたる多くの遺跡が存在している。

1 旧石器時代

本報告書関連事業の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査や県道の整備に伴う発掘調査などで近年松元町において遺跡の発掘調査事例が増加していることに伴い、旧石器時代の遺跡の調査例も増えてきている。前山遺跡からは、シラスの腐食土層下位から台形様石器、ナイフ形石器、スクレイパー等が出土し、仁田尾遺跡ではナイフ形石器文化から細石刃文化に至るまでの遺物がナイフ形石器文化の時期の礫群や、細石刃文化の時期の落とし穴状遺構等の遺構と共に出土した。

2 縄文時代

縄文時代の遺跡は草創期から晩期まで存在するが、近年の調査で遺跡数も多くなってきている。山下堀頭遺跡にほど近い前原遺跡では、早期の前平式土器、吉田式土器、石坂式土器と磨石や石皿等の石器、それぞれの時期に伴う遺構が確認された。中でも石坂式土器の時期の住居跡が12軒、前平式土器に伴う住居跡10軒が集石遺構や連穴土坑等多くの遺構と共に検出され、縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られた遺跡である。その他にも山下堀頭遺跡に近接し政所式土器と吉田式土器の関係が示唆的なフミカキ遺跡、宮尾遺跡、仁田尾遺跡、小松迫遺跡など多数ある。また、松元町に隣接する伊集院町永迫平遺跡でも縄文時代早期前葉の竪穴住居跡や集石遺構、連穴土坑などの遺構が検出された。縄文時代前期では、仁田尾遺跡で多くの調査成果が上がっており、小松迫遺跡、東昌寺遺跡なども挙げられる。縄文時代中期は、仁田尾遺跡など数遺跡を挙げる程度である。縄文時代後期では鹿児島市との境にある木ヶ暮遺跡で指宿式土器、市来式土器などの土器や石器が出土している。台地から谷への傾斜面に形成された遺跡である。宮尾遺跡では落とし穴状遺構を含む土坑が101基検出されており、その他少量でも遺物の出土する遺跡も多い。縄文時代晩期

では松元町との町境に近い吹上町の黒川洞穴がある。その他少量でも遺物の出土する遺跡も多く、仁田尾遺跡からは縄文時代晩期の掘立柱建物跡が検出されている。

3 弥生時代・古墳時代

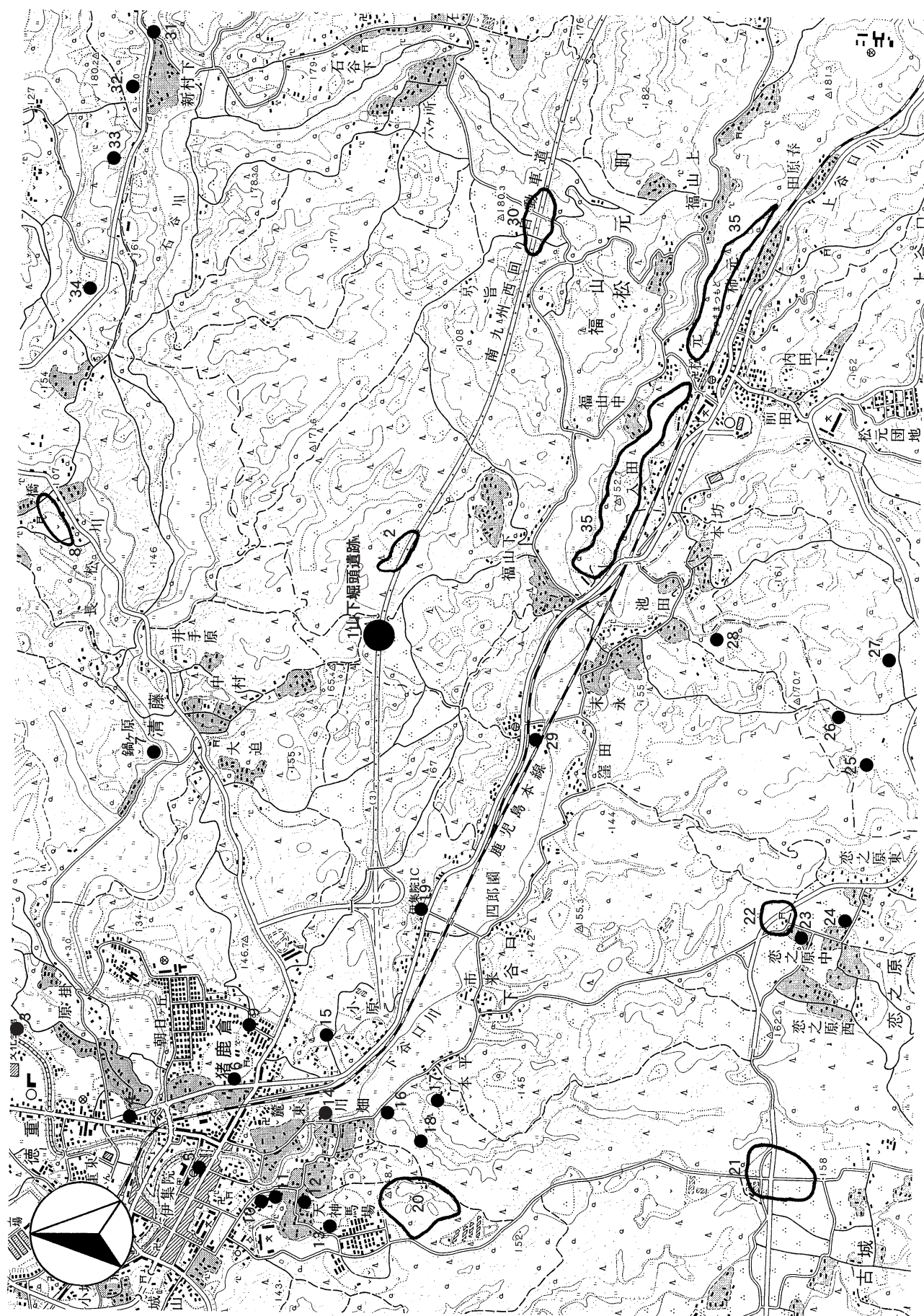
弥生時代の遺跡は少なく鹿児島県において発掘により弥生前期の土器を出土した最初の遺跡で高橋Ⅰ式、夜臼式土器などが出土している東昌寺遺跡など数遺跡が挙げられる程度である。古墳時代になると遺跡数が急増するが、台地状に位置する遺跡で住居跡や土坑などの遺構が検出されている遺跡や鉄製品が出土した遺跡は少ない。山下堀頭遺跡は、段丘上に位置し、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が3基検出され、鉄剣・絵画土器が出土している。また、近接するフミカキ遺跡ではこの頃と思われる円形の刻目突帯が施された壺形土器片も出土しており、近辺と様相の異なる遺跡である。

4 古代

山下堀頭遺跡では、古代の円形周溝墓が1基検出されたが、近辺で円形周溝状遺構を検出した例は見られない。その他の遺構を見ると仁田尾遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑などが、宮尾遺跡で掘立柱建物跡や焼土域・土坑などが多くの遺物と共に検出されている。遺物の出土があったのみの遺跡は多く、中でも赤色土器の出土している遺跡が多い。山下堀頭遺跡・近接するフミカキ遺跡からも小片が数点ではあるが赤色土器が出土している。山下堀頭遺跡から約2.5km離れた横井竹ノ山遺跡からは、赤色土器や墨書土器が出土し、なかでも「肥之道里」とかかれた土器や「☆」が書かれた土器の出土が目を引く。赤色土器や墨書土器について古代の主要道である伝路や官衙・郡衙・郡院・郡倉などの要地との関連を見る意見が出されており、それによると山下堀頭遺跡・フミカキ遺跡は薩摩半島の横断道が推定されている付近に位置する。

第2表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	主な時代	遺構・遺物等	備考
1	山下堀頭	松元町福山	台地	弥生・平安	中津野式・住居跡	本報告書
2	フミカキ	松元町福山	台地	縄文・弥生・平安	石坂式・吉田式・黒川式	H6発掘調査
3	黒木田	伊集院町郡字黒木田	台地	奈良・平安	土器片	H1発掘調査
4	荘厳寺墓地	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・石地藏	
5	永平寺記念碑	伊集院町上谷口	川岸	近世	西郷南州による記念碑	
6	薬師堂跡	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
7	鍋倉	伊集院町清藤鍋倉	台地	縄文	角形土器（前平式？）	
8	碓ノ谷	伊集院町下土橋字碓ノ谷	台地	古代		H7分布調査
9	猪鹿倉	伊集院町猪鹿倉141-1	平地		磨製石斧（大小石斧）	
10	円通墓地	伊集院町城山	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
11	竜泉寺跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
12	下谷口	伊集院町下谷口松田氏宅	平地	中・近世	五輪塔	
13	未穂寺境内	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	無縫塔	
14	磨崖佛	伊集院町麓東山下氏宅	山腹	中・近世	磨崖佛・五輪塔	
15	破鞋墓地	伊集院町向江	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
16	一ノ谷	伊集院町下谷口字一ノ谷	丘陵	中・近世	掘立柱建物跡・陶磁器	H8発掘調査
17	本平	伊集院町本平浜田宅裏	平地	中・近世	五輪塔	
18	本平	伊集院町本平福留氏山林	山地	中・近世	五輪塔	
19	梅岳寺墓地	伊集院町四朗圓	台地	中・近世	五輪塔・宝塔	
20	永迫平	伊集院町下谷口永迫平	台地	縄文早期		H8～10発掘調査
21	七反畠	伊集院町古城字七反畠	台地	古墳		H10分布調査
22	上稲荷原	伊集院町恋之原字上稲荷原	台地	古墳・古代		H7分布調査
23	稲荷原	伊集院町恋之原字稲荷原	台地	縄文早期	石器・土器片	H8発掘調査
24	恋之原	伊集院町恋之原集落東端	台地		壺形土器	
25	火ノ宇都	松元町上谷口	台地	弥生～古墳		
26	大仏	松元町上谷口	台地	縄文早期		
27	喜次郎岡	松元町上谷口	台地	古墳～平安		
28	末永	松元町末永八幡神社横	山地	中・近世	五輪塔・宝塔	
29	末永	松元町窪田郵便局前	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
30	前原	松元町福山	台地	旧石器・縄文	細石刃・前平式・石坂式	H6～8発掘調査
31	小松迫	松元町石谷	台地	縄文	石坂式土器	
32	長崎城跡	伊集院町竹ノ山	山地			
33	竹ノ山A	伊集院町竹ノ山	台地	縄文・弥生・古墳	土器片	H10発掘調査
34	竹ノ山B	伊集院町竹ノ山	台地	旧石器	落とし穴・石器	H10発掘調査
35	梅口城					



第Ⅳ章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法

1 確認調査

平成2年8月に行われた分布調査の結果に基づき、平成3年9・10月に確認調査を行った。調査は2m×30mのトレンチを1本、2m×15mのトレンチを1本の合計2本のトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、2m×15mのトレンチから弥生時代後期、古墳時代の遺物が出土したため、4,800㎡の範囲を本調査対象地とした。

2 本調査

平成3年度に行われた確認調査の結果に基づき、平成6年6月20日から平成6年10月28日まで全面発掘調査を実施した。

調査は、道路センター杭№140と№141を結ぶ線を基準に10m×10mのグリッドを設定して実施した。調査区域の東側から始まって西側へA・B・C…、北側から南側へ1・2・3…とし、D－3区、H－17区など并表示した。発掘調査の表面積は、4,800㎡である。

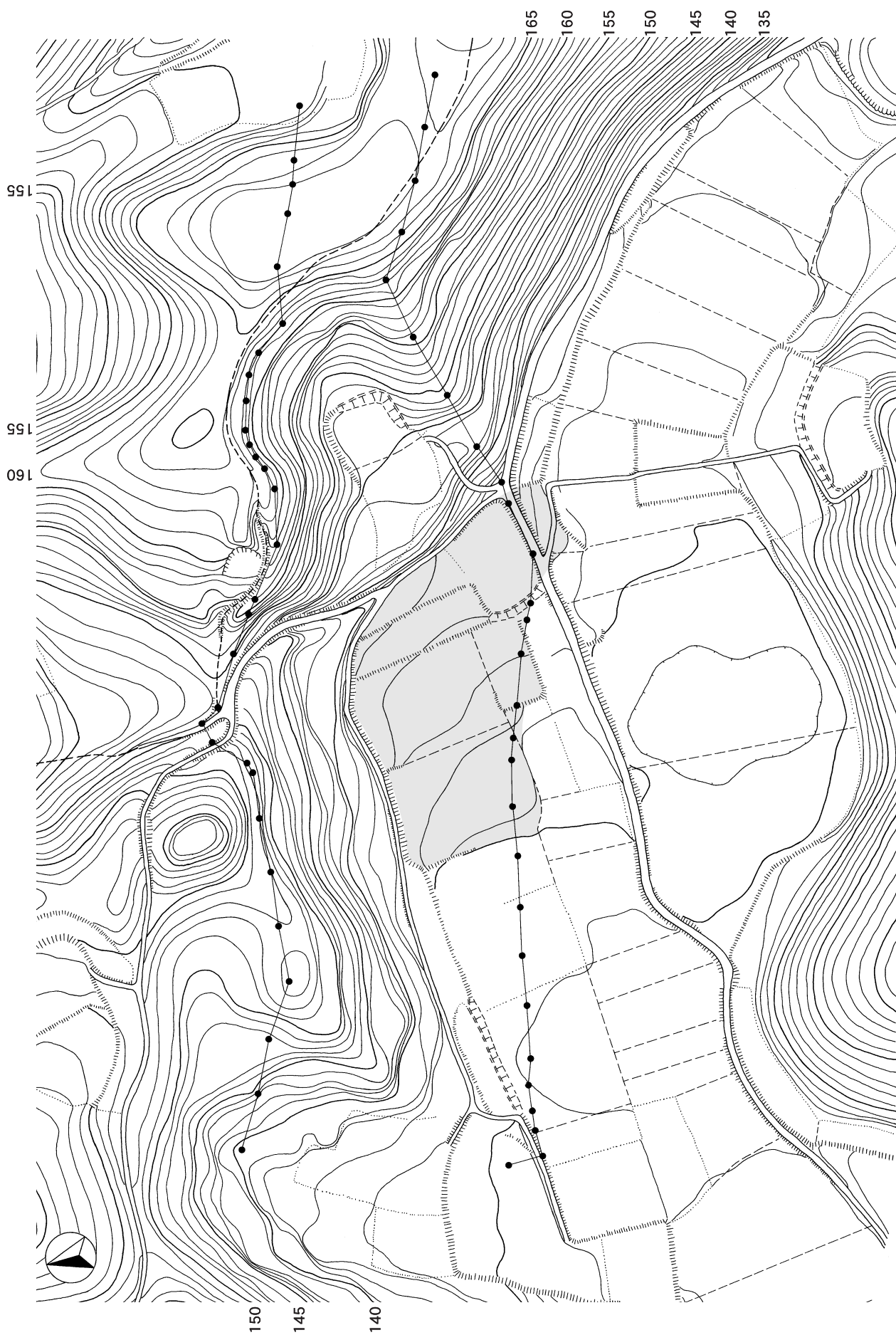
調査は該当層の掘り下げを順次行い、遺物・遺構の検出、写真撮影、実測、遺物の取り上げと作業を進めた。遺物総数は約9,000点である。

調査の結果、縄文時代では縄文時代前期の曾畑式土器、縄文時代後期の指宿式土器、西平式土器、石鏃・磨石等の石器が少量ずつ出土したが、遺構は検出されなかった。

弥生時代から古墳時代では、3基の竪穴住居跡と土坑1基が多量の遺物と共に検出された。検出順に1から3号竪穴住居跡、1号土坑として調査した。また、包含層より出土した土器の中には絵画土器が1個体あり、鉄剣1本も出土した。しかし、いずれも包含層からの出土であるため時期の確定が難しい。出土状況から見ると絵画土器が弥生時代終末期、鉄剣が古墳時代前期くらいのものである可能性が高い。

竪穴住居跡の調査は、1号から3号竪穴住居跡のいずれも近現代の耕作などにより上部の大半を欠損し、若干の掘り込みと一段掘り窪められた掘り込みが残存している程度であり、全体の形状を完全に把握することはできなかった。そのため、はじめ1号竪穴住居跡を「土器集中箇所」、2号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡を一段掘り窪められた掘り込み部分だけを土坑としてそれぞれ「2号土坑」・「3号土坑」と取り扱っていたが、「I－18区土器集中箇所（1号竪穴住居跡）」の調査途中に焼土跡を検出し、1号竪穴住居跡とした。更に、「2号土坑」・「3号土坑」の土坑の周りに周囲よりも若干色調の異なる土が広がることを確認したため掘り下げを行ったところ、「2号土坑」が一边の中央から内側に広がる方形に掘り下がり、焼土や柱穴等が確認されたため、住居跡とした。3号住居跡も形状や位置関係などを考え住居跡とした。

古代から中世にかけては、少量の土師器と須恵器・青磁が出土し、中心部に長楕円形の土坑を一つ持つ方形周溝状遺構が1基検出された。方形周溝状遺構の周溝埋土からは弥生時代から古墳時代の土器片や軽石製の石製品が1点出土したが、埋土より古代から中世に属するものとした。詳細な時期については不明である。



第4図 山下堀頭遺跡周辺地形 (1/ 2,000)



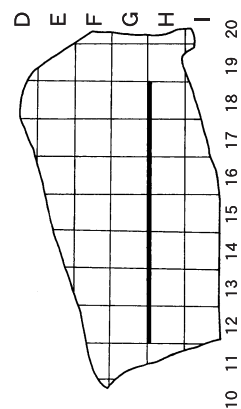
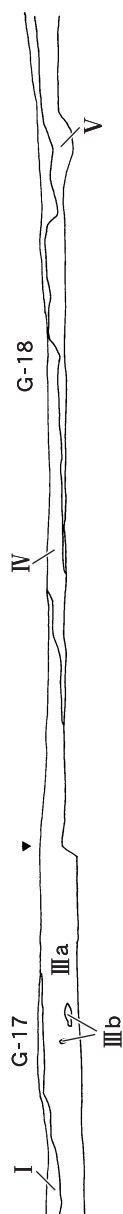
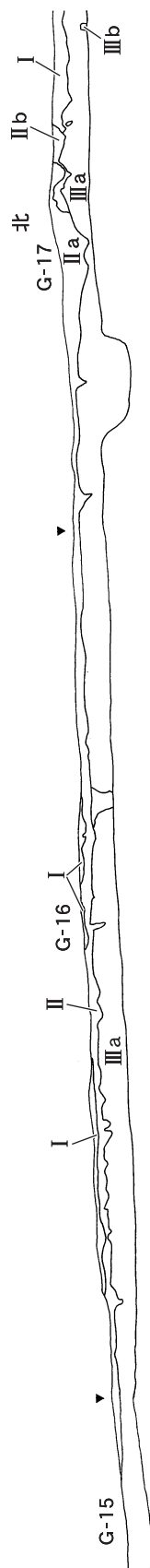
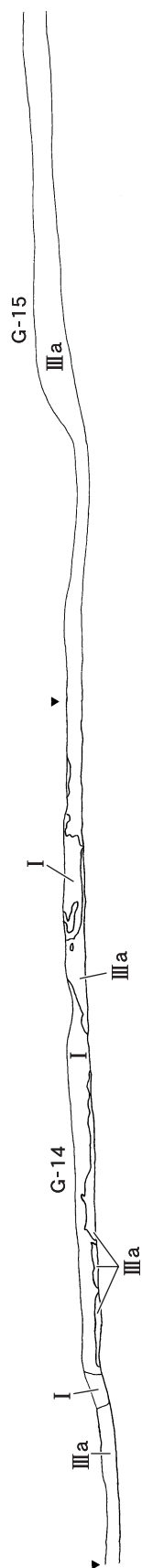
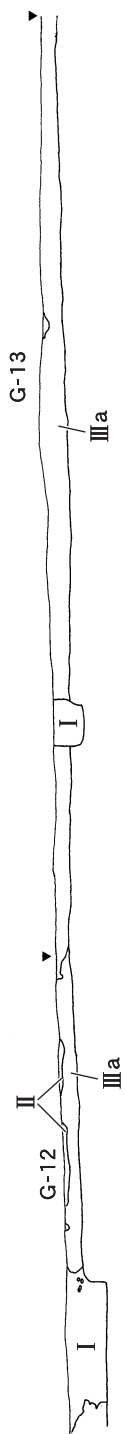
第5図 山下堀頭遺跡グリッド図及び確認トレンチ配置図 (1/ 1,000)

第2節 基本的層序

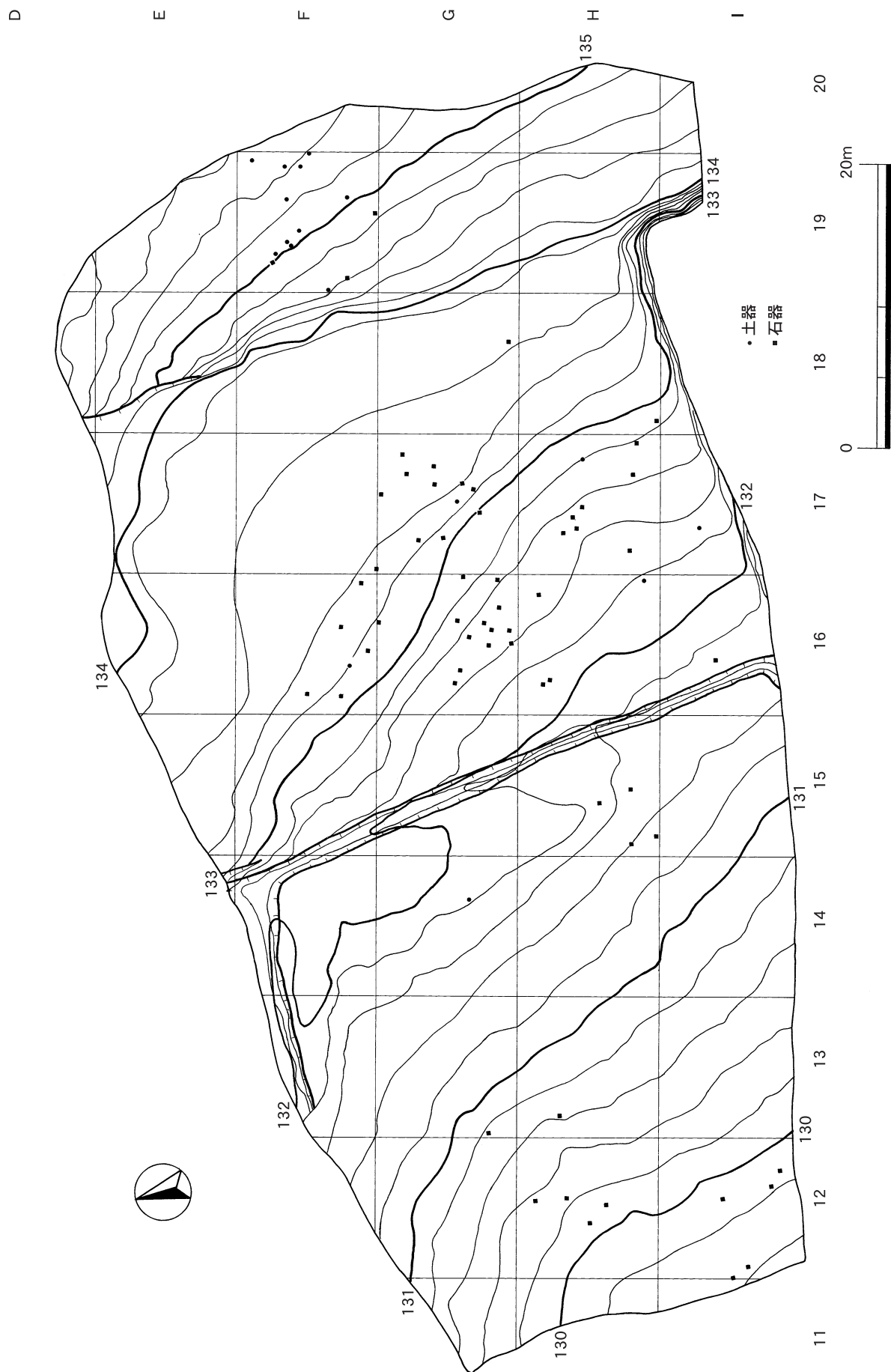
山下堀頭遺跡は水田・畑地として利用されていたため耕作などにより地形や地層が大きく変更され、包含層が少量しか存在しない箇所や、遺構の大半が欠損する箇所もあった。また、シラスの開析により形成された段丘上に位置するため、堆積状況が地点により異なっていた。そのため層順は、地層の残りのよかった箇所と前原遺跡や仁田尾遺跡などの層順を参考に分層した。またⅦ層より下位はシラスであった。場所により多少相違があるが、基本的には下のように分けられる。

I 層	：褐色耕作土。色調によって2～3層に区分できる。	I
II 層	：黒色腐食土。削平されている箇所が多く、部分的にしか見られない。古代から中世の遺物を含む。	II
III a 層	：黄褐色火山灰土。下部のアカホヤ火山灰に有機質が混在したもので、粘質が弱く、径2mm前後の軽石を含む。弥生時代から古墳時代・縄文時代晩期・後期・前期の遺物を含む。	III a
III b 層	：黄橙色軽石。約6,300年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（幸屋 火砕流）に対比される。	III b
IV 層	：暗褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で比較的細粒である。	IV
V 層	：黒褐色火山灰土。濃い黒色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。	V
VI 層	：黄褐色火山灰。約11,500年前の薩摩火山灰に対比される。	VI
VII 層	：茶褐色粘質土。非常に粘質が強く、乾燥すると大きくクラックが生じる。	VII
VIII 層	：シラス	VIII

山下堀頭遺跡標準層位



第6図 土層断面図



第7図 縄文時代の遺物出土状況図 (1/ 400)

第3節 縄文時代の発掘調査

縄文時代の調査では散在的に少量の遺物が出土したのみで、土坑や石器製作跡などの遺構は検出されなかった。出土遺物の時期は縄文時代前期・後期・晩期と数時期ある。出土した遺物が少量である原因として、山下堀頭遺跡での生活期間が短くキャンプ的で少しの作業しか行っていないこと、遺物が調査区外へ流出したこと、縄文時代の出土遺物のほとんどがすぐ隣に位置するフミカキ遺跡からの流入であることなどいくつかの可能性が考えられる。

1 遺物

(1) 土器（第8図 1～10）

縄文土器は、出土総数が20点程と少なく実測可能なもの全てを記載した。5類に分類したが、出土数が少ないため全体の形状が分かるものはなかった。

I 類土器（第8図 1～4）

I 類土器は、胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形である。器厚が全体に5mm程度で口唇部を平坦におさめ、口唇部、口縁部内外面・胴部外面に棒状の工具で沈線・刺突を施したものである。

1・2・3は、深鉢形土器の口縁部である。口縁部外面に棒状工具による3条の沈線を巡らし、その下位に綾杉状の沈線を施している。口縁部内面にも2条の沈線を巡らしている。2は、器体の弯曲が強く、口縁部内面に施される沈線の長さが短い。また内外面共に弯曲の頂部で沈線に隙間を開けていることから口縁部が波状を呈するか隅丸状の形状を呈するものである可能性がある。

4は、深鉢形土器の胴部片である。4は外面に棒状工具による綾杉状の沈線を施し、棒状工具による刺突が施された横位の貼付文を付している。さらに4の貼付文の左側には、孔があいていたものと思われる痕跡が見られる。貼付文を付す際に棒状のものを当て、その上から貼付文を付したのち斜位に引き抜いたものと思われる。作りは粗めである。器面調整は全て外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は荒いナデ調整が施されている。

また、1～5は胎土や調整がよく似ており、同一個体である可能性もある。

I 類土器は、曾畑式土器と思われる。

II 類土器（第8図 5～7）

II 類土器は、肥厚させた口唇部と強く外反する口縁部に棒状工具により沈線を施すものである。

5・6・7の3点出土した。全て深鉢形土器の口縁部である。

5・6は、胎土や調整がよく似ており同一個体の可能性がある。5は、口唇部が山形を呈する波状口縁であることが推測される。5の外面には横位の沈線が施され、6の外面には、「つ」の字状の沈線が施されている。内面外面共に丁寧にナデ調整が施され、外面にはケズリの痕跡が見られ、内面には指頭圧の調整痕も見られる。

7は、6同様に深鉢形土器の波状口縁の端部と思われる。口縁部外面に斜位の沈線を施している。小片ながら口唇部の沈線と断面形状からII類に含めた。

II 類土器は、出水式土器の中に包括される一群と思われる。

Ⅲ類土器（第8図 8）

Ⅲ類土器は、8の1点のみの出土である。深鉢形土器で強く外反し断面の形状が三角形を呈する口縁部外面に棒状工具による沈線を2ないし3条巡らすものである。内面外面共に丁寧なナデ調整が施され、外面には貝殻条痕と思われる痕跡が見られる。

Ⅲ類土器は、西平式土器と思われる。

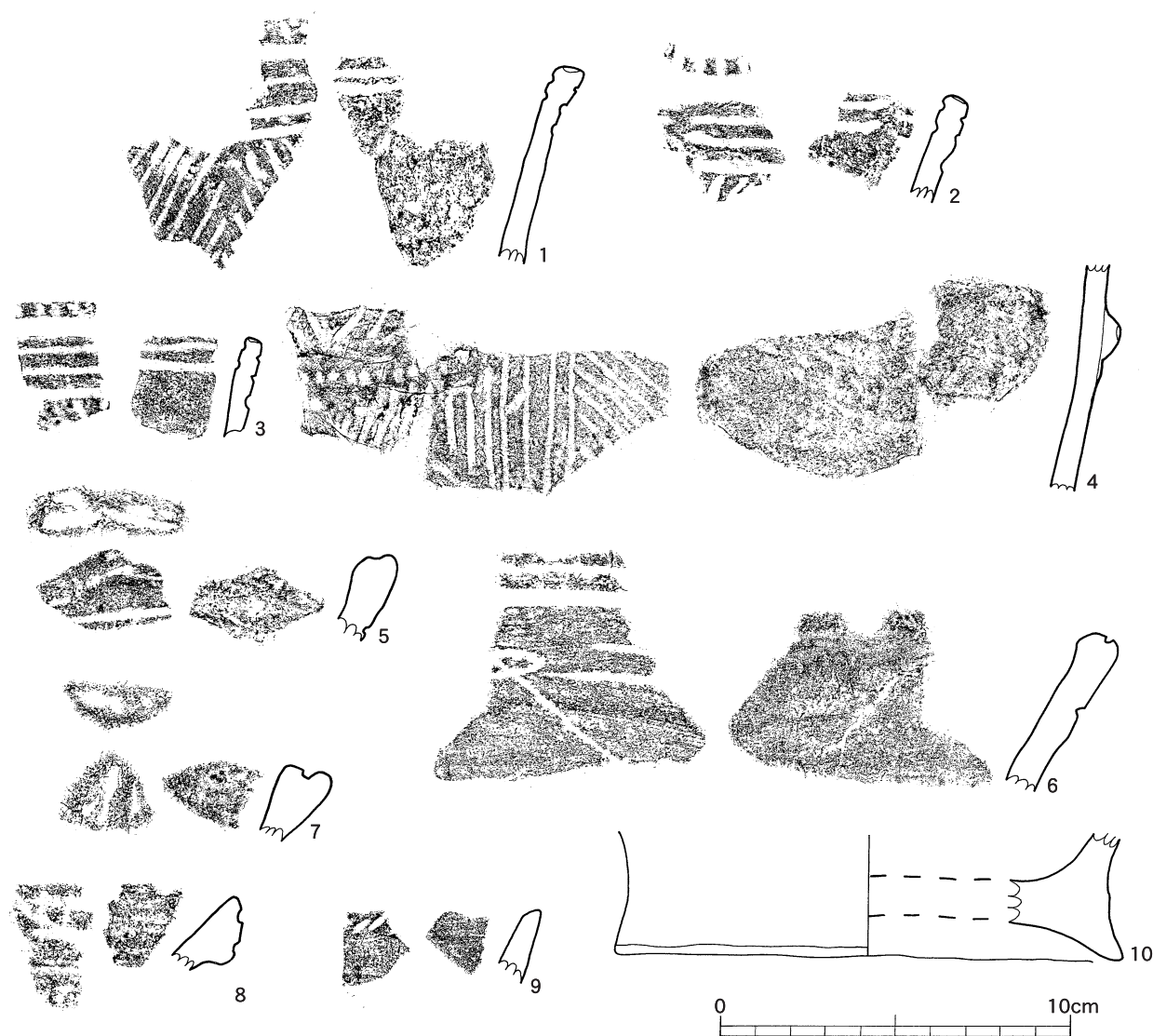
Ⅳ類土器（第8図 9）

Ⅳ類土器は、9の1点のみの出土である。深鉢形土器の口縁部であり、口縁端部に爪によると思われる斜位の刺突が1条巡らされる。小片で傾きなど不明であるが図化した。

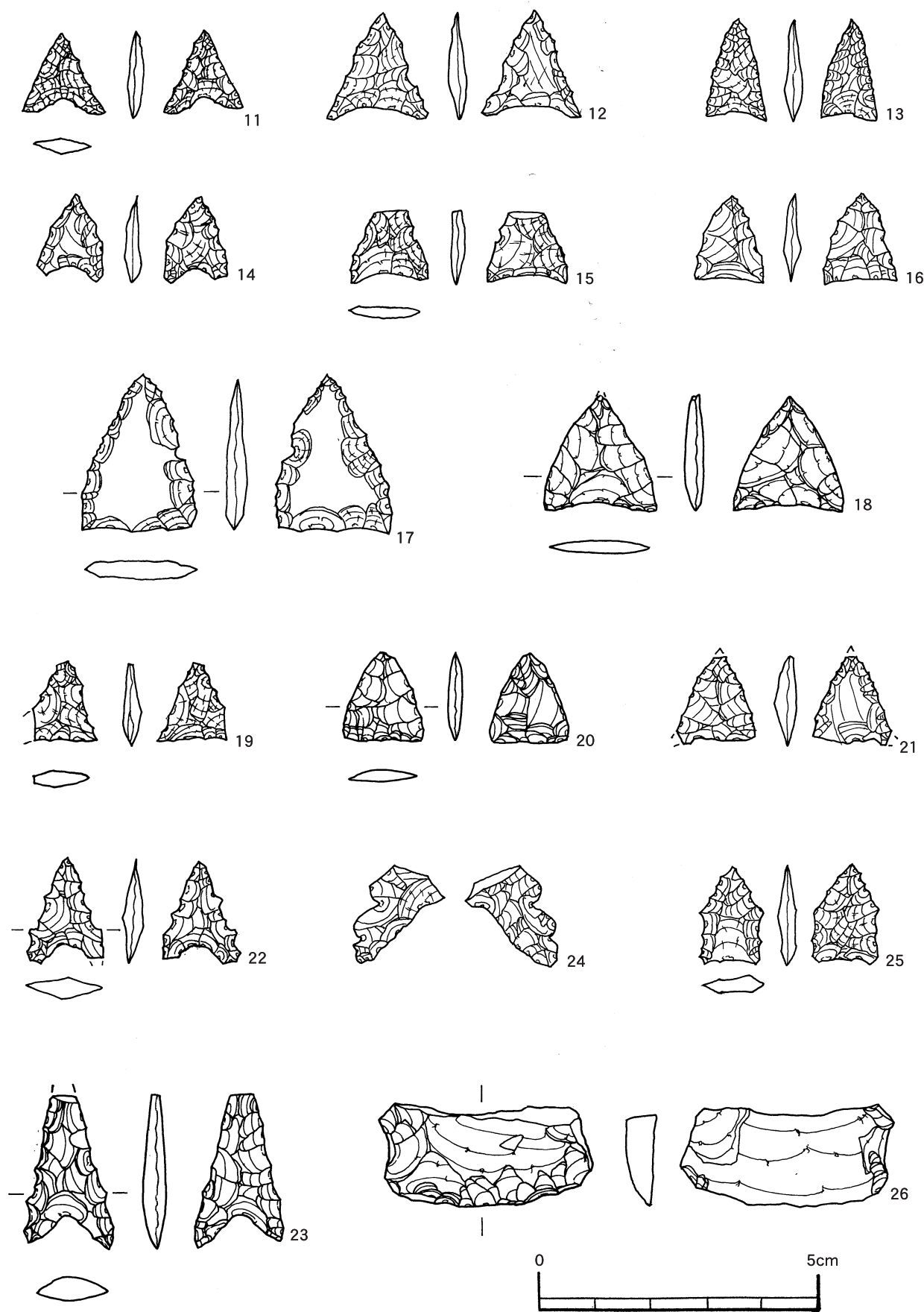
Ⅴ類土器（第8図 10）

Ⅴ類土器は、上げ底の底部である。10の1点のみの出土である。復元底径14.3cmを測り、上げ底の高さは推定で1.2cmを測る。内面はナデ調整が施され、外面・底面はナデ調整が施されるが貝殻条痕の痕跡を残している。

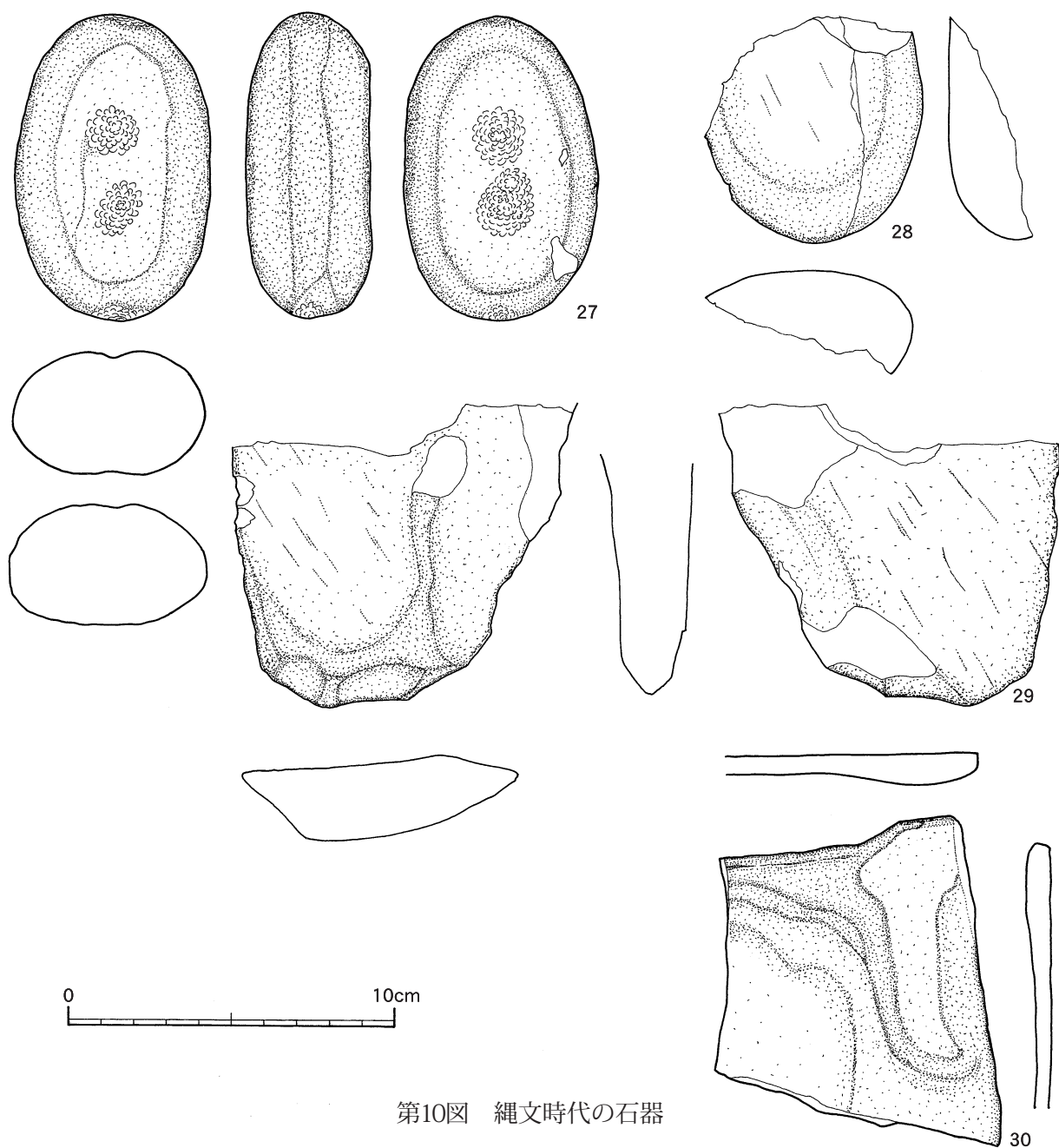
Ⅴ類土器は、後期から晩期の土器の底部と思われる。



第8図 縄文土器 I類～V類



第9図 縄文時代の石器



第10図 縄文時代の石器

(2) 石器 (第9・10図 11~30)

縄文時代の石器は、石鏃17点、スクレイパー1点、磨石2点、石皿1点と少量剥片が出土した。石器製作跡と思われるような出土状況は見られなかった。

石鏃 (第9図 11~25)

形態が5つに分かれ大小様々であるが出土量が少なく、縄文時代の出土土器も少なく時代幅もあるため帰属時期は分からない。11~15・23が凹基の三角形鏃で11・12・14・15が正三角形に近く、13・23が長い二等辺三角形である。16~21は平基の三角形鏃、22・24が側縁が強い波状を呈する凹基の三角形鏃、25が平基の五角形鏃である。

スクレイパー (第9図 26)

26が1点出土したのみである。幅3.9cm×縦2.3cm、厚さ5.5mm、重量5.31gを測る。刃部と

両サイドの表面のみを剥離している。上部は欠損と切断の判別ができない。

凹石（第10図 27）

27の1点のみの出土である。楕円形を呈する。表裏両面に2箇所ずつ叩打による窪みがある。長軸の側沿にも叩打痕が見られる。全体を成形し、握ると収まりがよい大きさに整えられている。

磨石（第10図 28）

28と小片の2点のみの出土である。28だけを図下した。大半を欠損し表面の半分くらいが残っている程度である。よく擦られており、27同様に大きさの整えられたものであろう。

砥石（第10図 29）

29の1点のみの出土である。約半分程度が残存しているものと思われる。表裏両面ともよく擦られている。自然礫をそのまま利用している。

石皿（第10図 30）

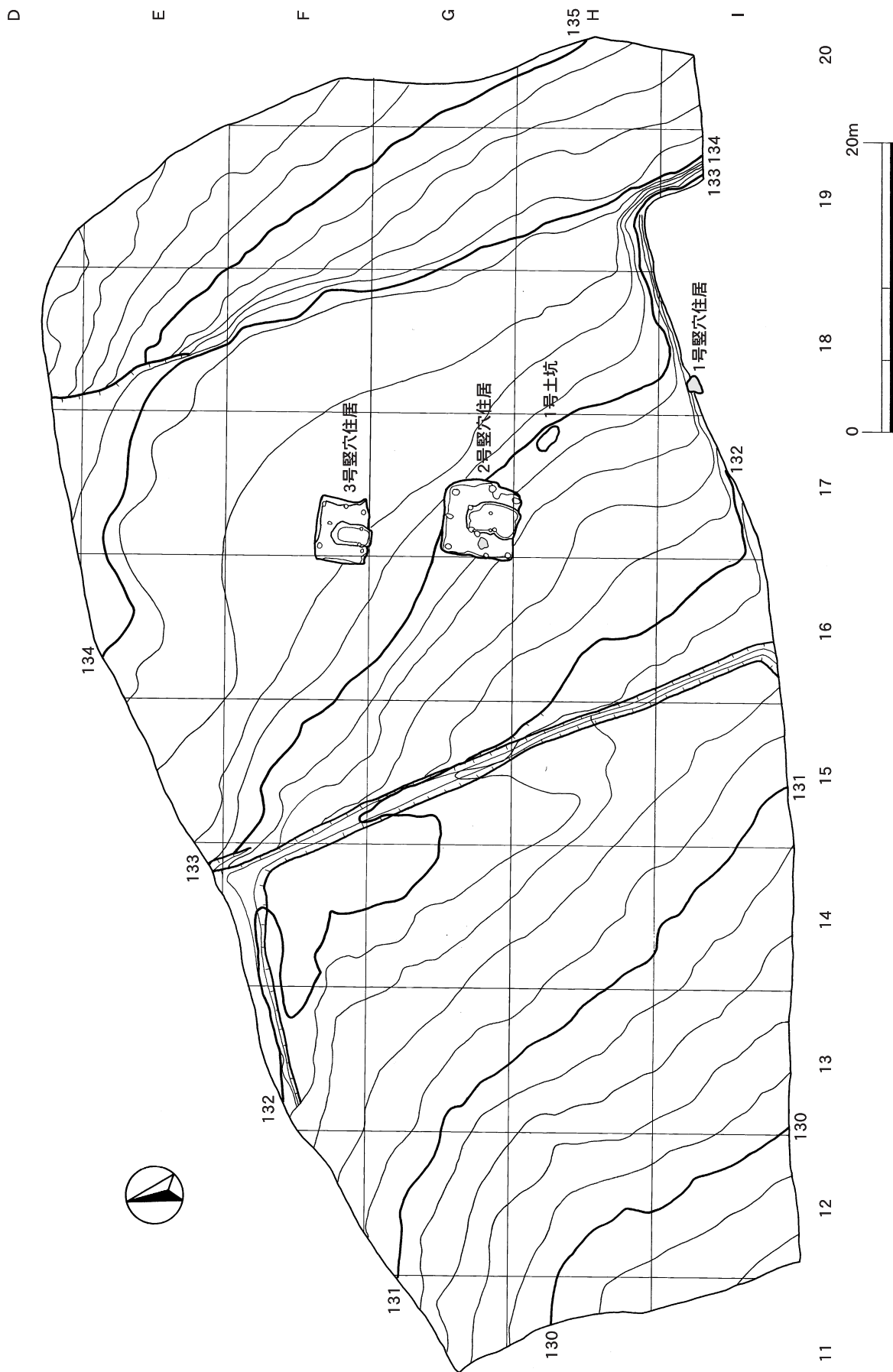
30の1点のみの出土である。大半を欠損し表面のどれくらいが残存しているのか不明である。よく擦られており、図右側には掻き出し口とおもわれる窪みがある。

第3表 縄文土器観察表

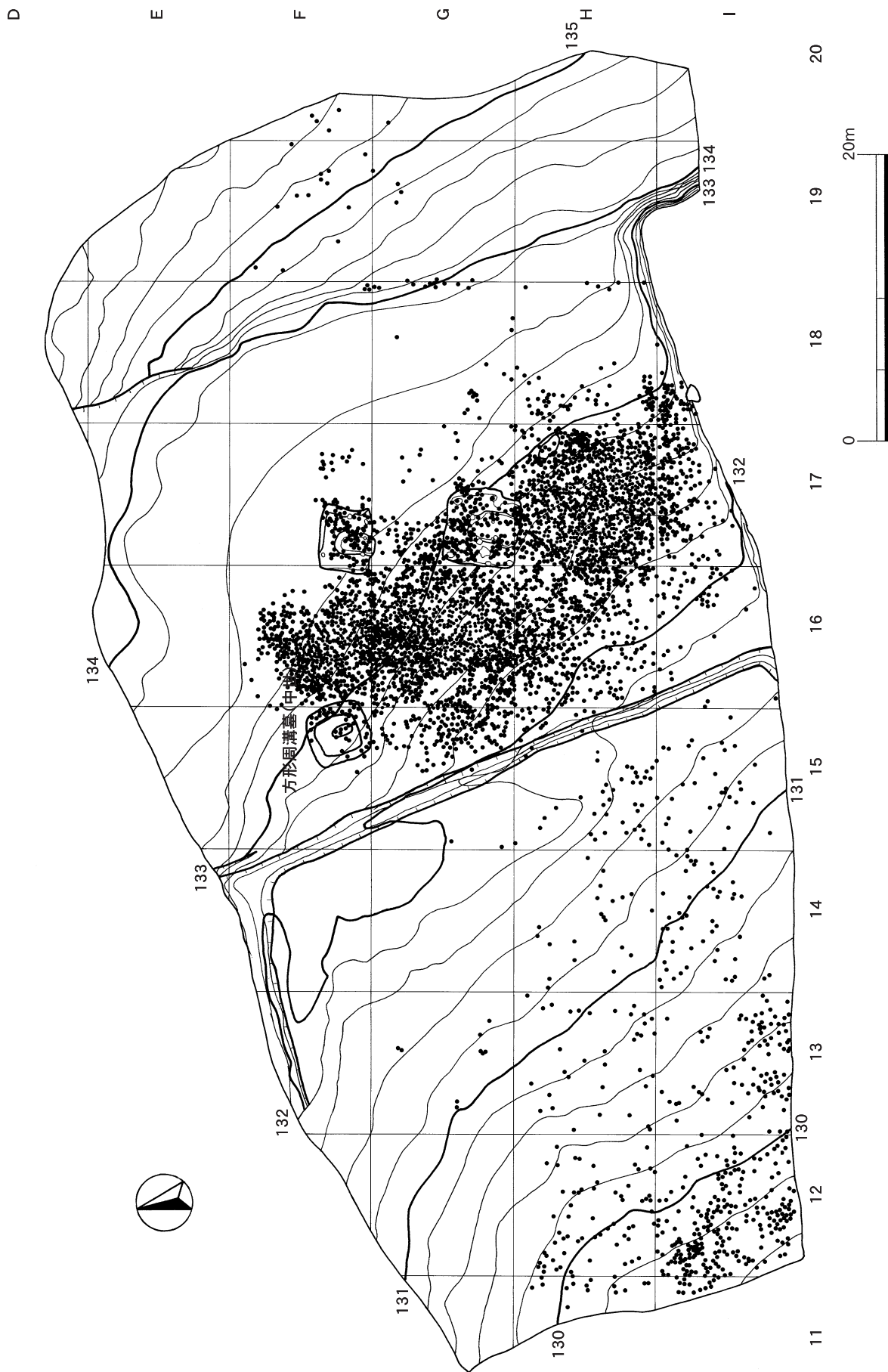
番号	遺物番号	類	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
1	248 1068	I	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、1mm以下の石粒、3mm以下の白色石粒	赤褐色～暗灰褐色	赤褐色	粗いナデ	丁寧なナデ	棒状工具による沈線	
2	239	I	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、1mm以下の石粒、3mm以下の白色石粒	赤褐色～暗灰褐色	赤褐色	粗いナデ	丁寧なナデ	棒状工具による沈線	
3	240	I	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、1mm以下の石粒、4mm以下の白色石粒	赤褐色～暗灰褐色	赤褐色	粗いナデ	丁寧なナデ	棒状工具による沈線	
4	241 245	I	胴部	良好	石英、長石、角閃石、1mm以下の石粒、5mm以下の白色石粒	赤褐色～暗灰褐色	赤褐色	粗いナデ	丁寧なナデ	棒状工具による沈線	
5	224	II	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	黄褐色	貝殻後ナデ	貝殻後ナデ	棒状工具による沈線	
6	234	II	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	明赤褐色	黄褐色	貝殻後ナデ	貝殻後ナデ	棒状工具による沈線	
7	4314	II	口縁部	やや不良	石英、長石、角閃石、3mm以下の石粒	黄褐色	黄褐色	不明	不明	棒状工具による沈線	
8	4146	III	口縁部	良好	石英、長石、角閃石、4mm以下の石粒	明赤褐色	暗灰黄褐色	貝殻後ナデ	貝殻後ナデ	棒状工具による沈線	
9	231	IV	口縁部	良好	石英、長石、角閃石	茶褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	爪による刺突	
10	3939 6753 6761	V	底部	良好	石英、長石、角閃石、3mm以下の石粒、5mm以下の安山岩粒	灰黄褐色	灰褐色	貝殻後ナデ	貝殻後ナデ	—	

第4表 縄文時代の石器観察表

番号	遺物番号	器種	石材	層	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
11	4230	石鏃	黒耀石	III a	0.30	1.45	1.45	0.24	
12	5779	石鏃	ハリ質安山岩	III a	0.63	1.88	1.78	0.31	
13	2267	石鏃	黒耀石	III a	0.42	1.81	1.06	0.29	
14	3993	石鏃	黒耀石（上牛鼻）	III a	0.50	1.56	—	0.31	
15	4437	石鏃	頁岩	III a	0.34	—	1.40	0.24	
16	5217	石鏃	ハリ質安山岩	III a	0.54	1.59	1.30	0.37	
17	3436	石鏃	ハリ質安山岩	III a	2.32	2.80	2.09	0.39	
18	8261	石鏃	ハリ質安山岩	III a	0.99	2.07	2.00	0.30	
19	4209	石鏃	頁岩	III a	0.49	—	0.34	—	
20	4226	石鏃	淡白石	III a	0.52	1.58	0.24	1.43	
21	810	石鏃	頁岩	III a	0.82	—	0.44	—	
22	1086	石鏃	黒耀石	III a	0.61	1.82	1.40	0.38	
23	219	石鏃	黒耀石	III a	1.28	—	1.62	0.44	
24	4215	石鏃	黒耀石（上牛鼻）	III a	0.55	—	—	—	
25	6743	石鏃	黒耀石（上牛鼻）	III a	0.65	1.73	1.14	0.33	
26	750	スクレイパー	黒耀石（日東）	III a	5.31	2.30	3.90	0.55	
27	237	凹石	安山岩	III a	329.82	—	—	—	
28	7301 4938	磨石	砂岩	III a	129.20	—	—	—	
29	4871	砥石	安山岩	III a	323.96	—	—	—	
30	6328	石皿	安山岩	III a	97.10	—	—	—	



第11図 弥生時代・古墳時代の遺構 (1/ 400)



第12図 弥生時代・古墳時代の遺物出土状況 (1/ 400)

第4節 弥生時代・古墳時代の調査

弥生時代から古墳時代の調査では、竪穴住居跡3基、土坑1基を多量の遺物と共に検出した。また、包含層より絵画土器、鉄剣も出土した。

1 遺構

1号竪穴住居跡から順に3号竪穴住居跡・1号土坑と掲載していくが、遺構内出土遺物と包含層内の出土遺物が接合し、遺構内出土遺物に偏り多く接合しているといいがたい面があり、住居跡の上部を欠損していることから本来はまだ住居跡埋土内部には多くの遺物があったことが推測されるため、1片でも遺構内出土遺物が接合したものについて、縮尺を大きくし、遺構内出土遺物ひとまとまりとしてここには掲載する。各遺物の下に（遺構内遺物破片数／接合破片総数）と記しておく。各遺物個々の詳細については、2遺物で記すことにする。ここでも接合資料のうち遺構内出土遺物を含むものについては（遺構内遺物破片数／接合破片総数）と遺構名を記しておく。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第13図）

H-18区に床面のみを検出した。土坑などの掘り込みが分からず、土器が集中して出土する箇所が見られたため、初め土器集中箇所として取り扱っていた。しかし、貼り床、柱穴は見られないものの土器が集中して出土する箇所のすぐ脇に焼土を検出し、焼土の検出されたレベルを住居跡の床面と考え、多くの土器が床面直上もしくは床面から少し浮いた状態での出土と考えられるような状況であることから住居跡とした。また、2号住居・3号住居との距離や位置関係・形状もその傍証とした。

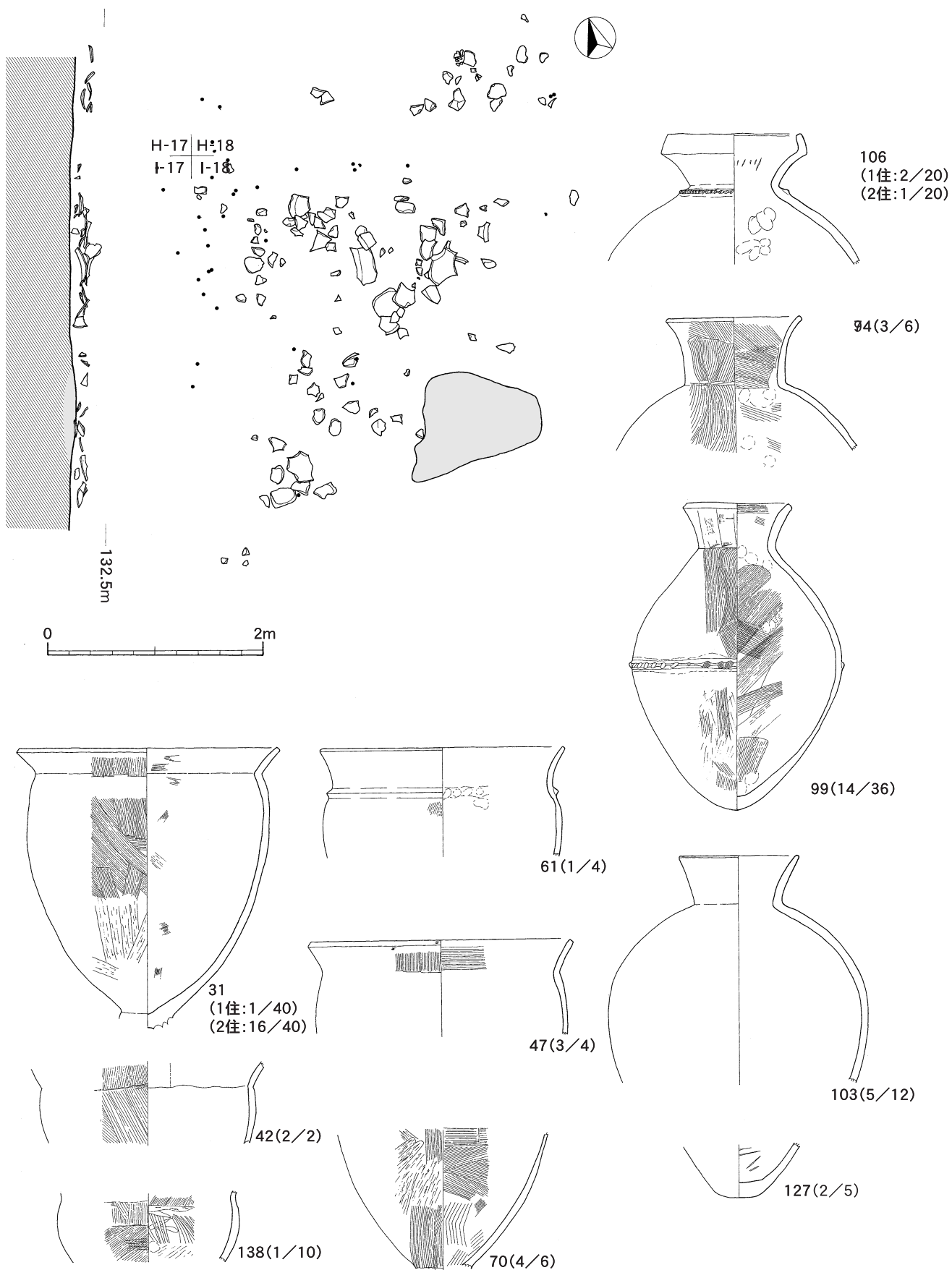
土器の集中して出土した範囲は、焼土を含め約1.5m×1.5mである。焼土の範囲は、底辺0.4m×上辺0.3m×高さ0.5mの台形状を呈し被熱により赤変したものと思われ赤褐色を呈する。床面は、Ⅲb層の途中まで掘り込んだところで作られ、2号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡のような住居内の土坑は見られなかった。

1号竪穴住居跡出土遺物（第13図）

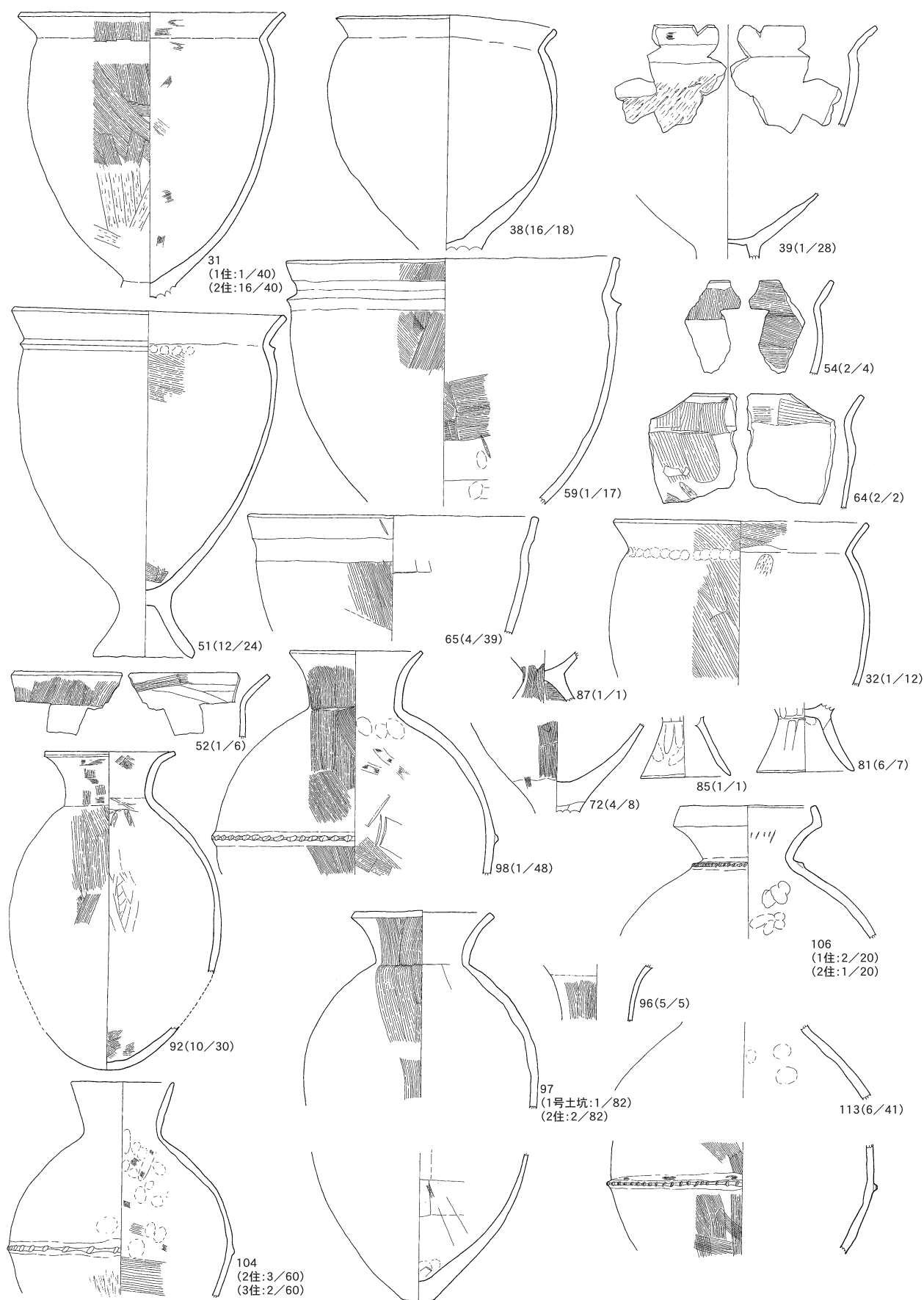
先述したが、出土した土器は全て床面直上もしくは少し浮いた状態での出土と判断した。

器種は、甕形土器・壺形土器のみである。甕形土器Ⅰ類（31・42）とⅡ類（47・61）が共に出土している。また、壺形土器も壺形土器Ⅰ類（99）とⅡ類（103）が共に出土し、山下堀頭遺跡で1個体の上半部分だけが出土した二重口縁壺（106）も出土している。また、31・106は2号住居跡からも接合資料の一部が出土し、周囲の包含層出土の遺物とも接合している。1号住居跡は、ほぼ床面直上からのみの検出であるため、本来はまだ多くの遺物が住居跡埋土内にはあったものと思われる。138は鉢形土器である。

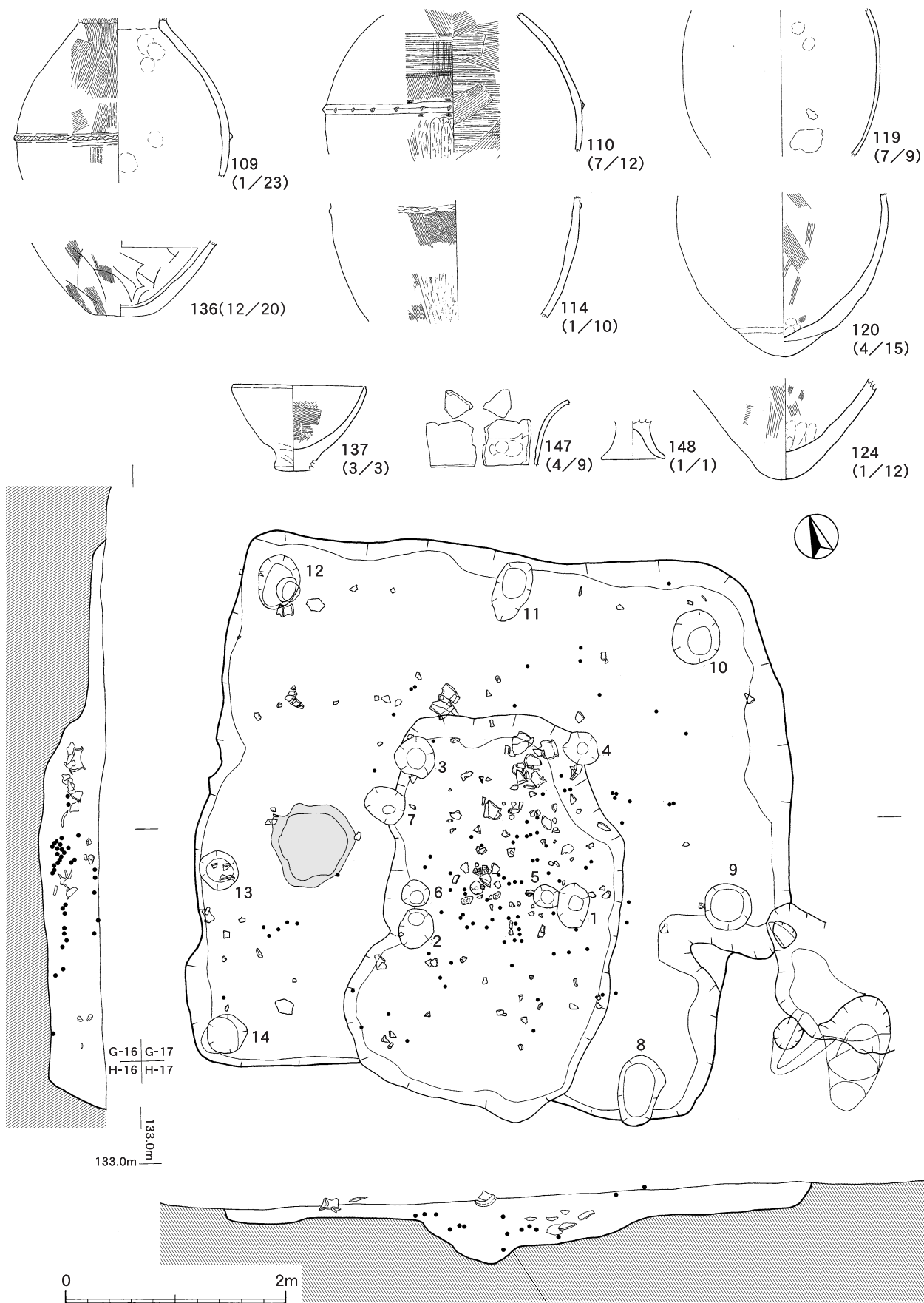
遺跡全体として高坏など小型の土器類の出土が少ないが1号住居跡からは全く出土しなかった。



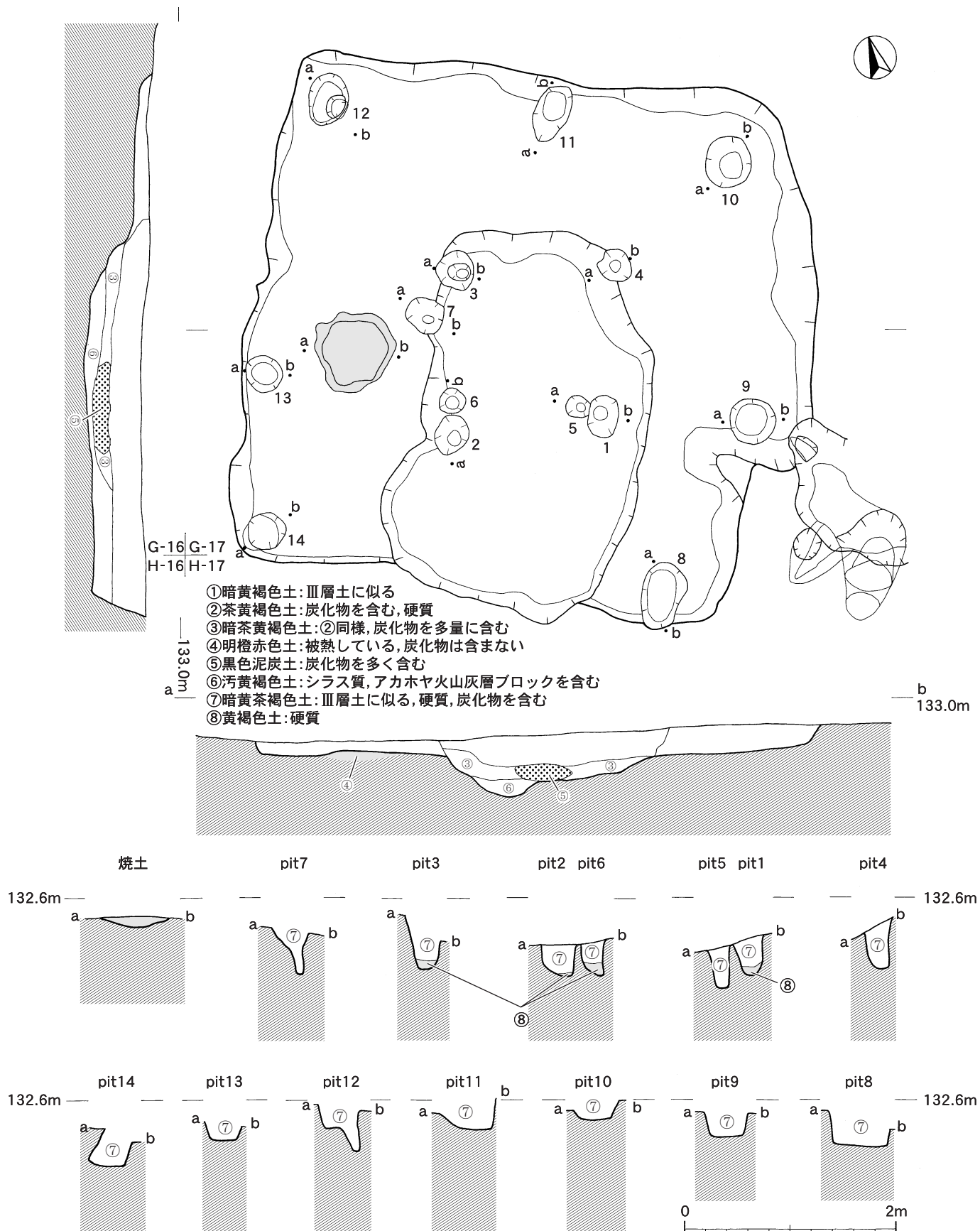
第13図 1号竪穴住居跡・出土遺物 (1/ 6)



第14図 2号竖穴住居跡出土遺物



第15図 2号竖穴住居跡遺物出土状況図



第16図 2号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（第16図）

2号竪穴住居跡は、はじめ住居内の土坑のみを精査により確認し、「2号土坑」として取り扱っていたが調査の過程でこの「2号土坑」としたものの周囲が検出面と若干色調が異なることに気づき、色調の異なっている部分の掘り下げを行った。その結果、方形に掘り下がり、焼土跡・柱穴を検出するに至った。そのため「2号土坑」を2号竪穴住居跡とした。

G-17区で検出した。約6.8m×約7mで東側のpit（柱穴）9付近が少し張り出した方形を呈する。南側壁中央から内側に直交して長軸4m×短軸2.4m、床面よりの深さ0.4mの楕円形の土坑を持ち、この土坑の長軸を通る線が北東を向く。柱穴は、合計14本検出された。四隅と住居内の土坑の長軸方向の2辺の中央より南側の壁際と土坑の反対側の中央壁際にそれぞれ1つずつ、土坑の北側・住居の中央となる箇所に6つある。9、(1・5)、(2・6)、13がほぼ直線状に並び、中心から南側にずれた位置にあり、(1・5)、(2・6)、4、(3・7)はほぼ正方形に並び住居の中心にある。また、柱穴1、2、3、6は底面に堅く締め固められたような土が見られた。この正方形に並んだ柱穴と柱穴13との中心からやや北側にずれた位置に焼土跡が見られる。焼土跡は、直径0.8mの略円形で被熱により中心部の直径0.6mが赤褐色を呈し、その周辺が茶褐色を呈している。床面は、IV層まで掘り込んだところで作られ、貼り床は見られない。

2号竪穴住居跡出土遺物（第14・15図）

器種は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・埴形土器がある。2号住居跡のみが多く、多くの遺物が接合し、絵画土器なども出土した。

甕形土器

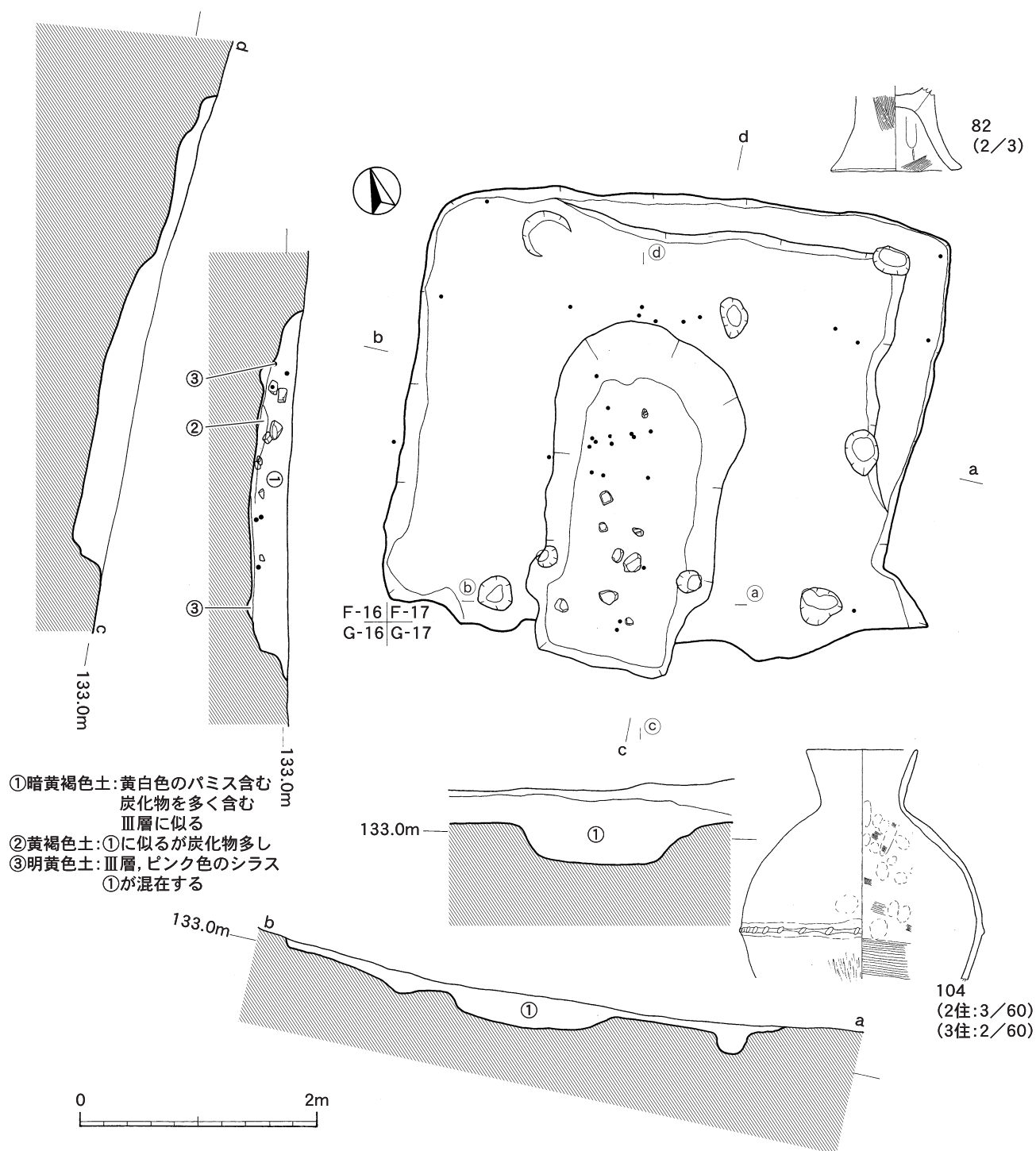
甕形土器Ⅰ類(31・32・38・39)・Ⅱ類(51・52・59・54・64・65)共に出土している。Ⅰ類は、突帯を持たないものであり、Ⅱ類は断面三角形の突帯が1条口縁部のくびれ部分に巡らされているものもある。51以外は底部を欠いている。底部は87・72・85・81が出土したのみである。口縁部形態をみると差が大きく複数の時期のものが含まれている。

壺形土器

92・97が壺形土器Ⅰ類であり、完全な形を推定復元できた。他はⅠ類の口縁部1個、Ⅱ類(104)と分類できない頸部胴部が出土している。また底部(120・124)も出土したが、口縁部数よりは少ない。106は二重口縁壺で、1号住居跡からも出土している。136は、絵画土器である。第32図に出土状況の詳細を記載したが、2号住居跡埋土内にあった遺物が流れ出たかのような接合の仕方をしている。これとは逆に104は多くの破片が接合し、2号住居跡・3号住居跡からも数片ずつ接合しているなかほとんどが住居外の遺物であり、なおH・I-11・12区からの出土遺物とも接合している。このことからすれば住居外からの流れ込みの可能性が強い。137は住居内からの出土遺物だけで完全品に接合した。その他の遺構の状況も合わせみると、1号土坑・1号竪穴住居跡・2号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡からの出土土器の接合関係からは、住居の廃棄時に住居内にあった遺物と住居がまだ完全に埋まりきらないうちに窪みに廃棄された遺物が流れ出ている可能性と周辺に廃棄された遺物が住居が埋まる過程で流れ込んでいく可能性の両方が推測される。

3号竪穴住居跡（第17図）

F-17区で検出した。2号竪穴住居跡同様住居内に土坑を持ち、東側コーナーに段を持った方形を呈する。南側を少し欠損しているが、住居内の土坑が完全に残存していることから約4m×4.5mの大きさが推測できる。南側壁中央から内側に直交してある楕円形の土坑は2.9m×1.5m、床面よりの深さ0.4mを測る。この土坑の長軸を通る線が北東を向く。柱穴は、合計8本検出された。東側には3本の柱穴が並び、うち2本の柱穴は一段下がった部分の壁際にある。



第17図 3号竪穴住居跡・出土遺物（1/ 6）

また、住居内の土坑の壁際にも2本の柱穴があり、東側の柱穴と直線に並ぶ。3号竪穴住居が作られた箇所はⅢ層下がすぐシラスであり、このシラスまで掘り込まれていた。貼り床、焼土跡は検出されなかった。

3号竪穴住居跡も2号竪穴住居跡同様住居内の土坑のみを「3号土坑」として取り扱っていたが、2号竪穴住居の例をふまえ「3号土坑」周囲の調査を行った。その結果、土坑周辺に若干色調の異なる土が広がり、掘り下げを行うと方形になった。焼土跡などは検出できなかったが、柱穴が検出されたこと、2号竪穴住居跡との形状が似ていることから住居跡とした。

3号竪穴住居跡出土遺物（第18図）

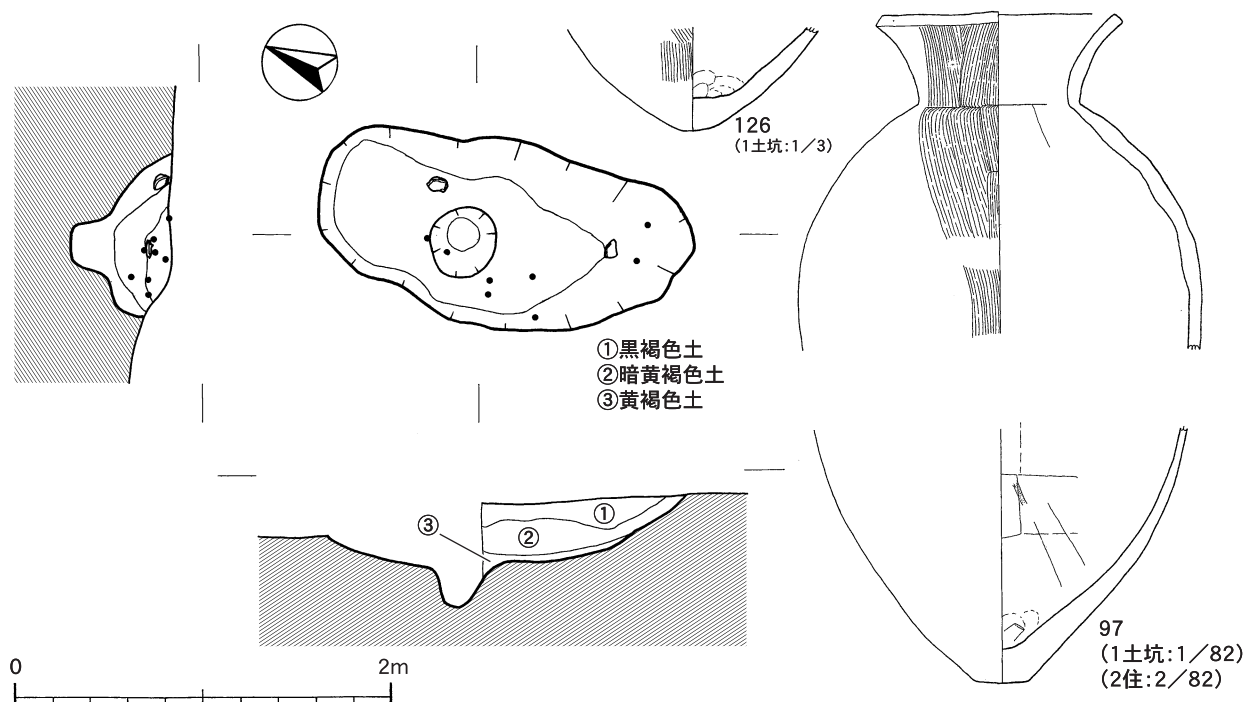
3号竪穴住居跡からは、2号竪穴住居跡からも出土した104と3号竪穴住居跡出土遺物と周辺の遺物が接合したが、これ以外は小片のみで図化できるものはなかった。

1号土坑

H-17区に検出した。長軸2m×短軸1mの楕円形を呈する。中央に径約0.4m×深さ約0.25mのpitを持つ。土坑の性格は不明だが、貯蔵穴や簡単なかけ小屋の柱穴などが考えられる。

1号土坑出土遺物

壺形土器Ⅱ類（97）と壺形土器の底部（126）が出土した。97は2号住居跡からも出土している。他は小片で図化できなかった。



第18図 1号土坑・出土遺物

2 遺物

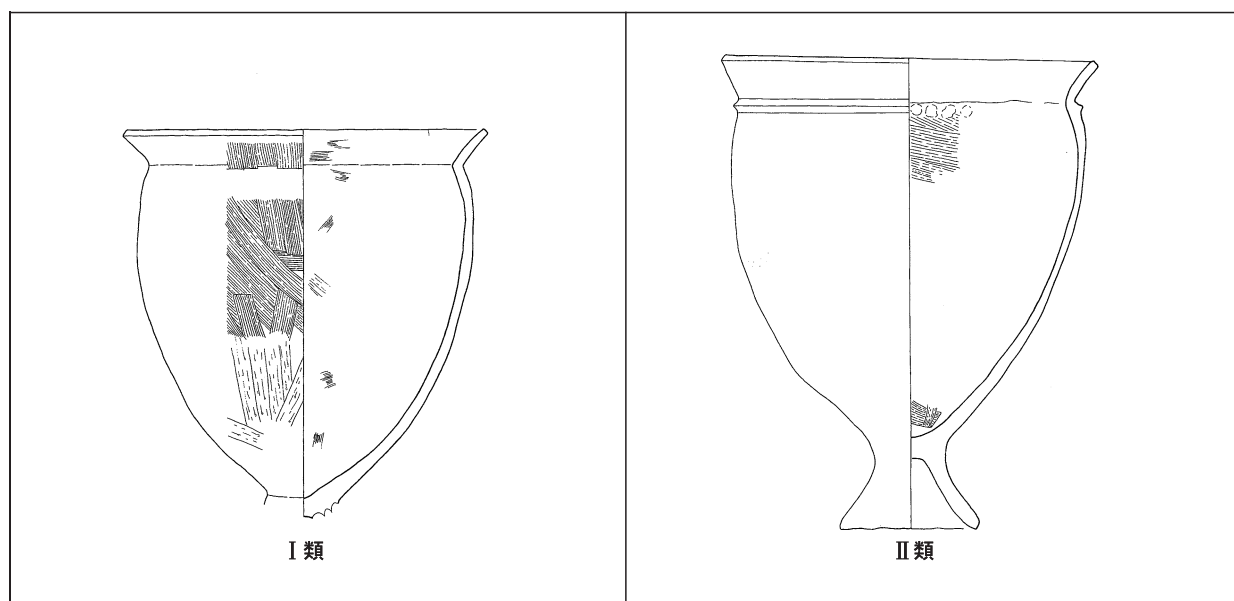
1遺構で述べたように3軒の竪穴住居跡と1つの土坑と共に甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・ジョッキ形土器・蓋形土器・埴形土器・鉄剣など多くの遺物が出土した。先述したが、遺構は出土層上部を欠いているため、本来は遺構内出土遺物と分けて記載すべきであるが、接合破

片数のほとんどが遺構内出土のものであるもの、全く遺構内出土遺物が接合しないもの、少量の遺構内出土遺物と包含層出土遺物が接合しているものなど様々であるため、1片でも遺構内出土遺物が接合したものについて、縮尺を大きくし、遺構内出土遺物ひとまとまりとして掲載し、各遺物の下に（遺構名：遺構内遺物破片点数／接合破片総数）と記しておく。

(1) 土器

甕形土器

出土遺物のうち最も数量の多かったのが甕形土器である。口縁部形態により大きく2類に分類した。口縁部断面が「く」の字状を呈し、胴部がすぼまり口縁部が立ち上がるくびれを持つところがシャープで外面・内面に明瞭な稜線を持ち、口縁がくびれ部から直線的にのびるものをⅠ類とした。（第20・21図31～43）。Ⅱ類は口縁部断面が「S」字状を呈し、口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部がすぼまり口縁部が立ち上がる箇所のくびれがシャープでなく、明瞭な稜線は持たない曲線的なものをⅡ類とした。なお、内面の調整によりくびれ部の内面に稜線がみられても断面形状を優先し、Ⅱ類に含めた。（第22～24図44～65）また、ススの付着部分に網をかけて表現する。



第19図 甕形土器分類概念図

甕形土器Ⅰ類（第20・21図 31～43）

31は、底部のみを欠く完全復元品である。口径28.0cm・胴部径26.4cmを測る。外面は胴部下半がケズリ、それ以外がハケとナデにより調整されている。口縁端部はくぼませている。

32は胴部下半からを欠き復元口径26.9cm・胴部径28.0cmを測り、胴部で最大径となる。外面は斜位のハケ目調整が施され、口縁端部のみをナデ調整する。内面は、口縁部付近を横位のハケ目調整・胴部をケズリに近いナデ調整を施している。くびれ部外面は連続して指頭押圧が施されている。

33は復元可能であったが器形全体に歪みが多くあえて復元しなかった。掲載した破片の他に

も同一個体と思われる破片が少量ある。胴部下半にケズリの痕跡があり、口縁部は下から上へ掻き上げられている。その他は斜位のハケ目調整である。

38は底部を欠く復元品である。胴部で最大径となり、口径23.1cm、胴部径24.5cmを測る。内面外面共に丁寧なナデ調整により仕上げられている。

34～37、42、43は、Ⅰ類の破片資料である。共に口縁部外面は掻き上げのハケ目調整が施され、内面はハケ目・ナデ調整により仕上げられている。40～42も同様であるが、くびれ部に横位のナデが施され特徴的である。底部のあるものは少なかったが、中空の脚以外の底部がないためⅠ類の底部も中空の脚である。突帯を持つものはなかった。

甕形土器Ⅱ類（第22～24図 44～65）

44は、底部から口縁部まで復元できた。全体に歪みが多く、口径20.4cm、胴部径21.2cmを測り、胴部で最大径となる。口縁部下から胴部下半までにケズリが施される。胴部下半から底部までは縦位のハケ目調整である。内面はハケ目調整が施されそこには指頭がみられる。

47は口径28.3cmを測り、口縁部付近は掻き上げのハケ目口縁部内面は横位のハケ目を施す。

51は、底部から口縁部まで復元できた。くびれ部に1条の断面三角突帯が巡らされる。外面はナデ調整であり、内面はハケ目とナデによる調整が施される。また、くびれ部内面には、連続した指頭押圧が施される。

53は、底部を欠いている。口径が最大径となり口径24.0cm、胴部径22.8cmを測る。口縁部は掻き上げられ、斜位のハケ目調整内面は口縁部が横位その他はナデ調整である。また口縁部下に靱圧痕がみられる。

58は、口径24.9cm、胴部径24.0cmを測る。口縁部径と胴部径がほぼ同じである。内外面共に丁寧なナデ調整が施される。

59は胴部下半からを欠く、口径と胴部径がほぼ同じであり、それぞれ35.1cm、34.8cmを測る。くびれ部に1条の断面三角突帯が巡らされる。口縁部は掻き上げの斜位のハケ目調整が施され、内面は斜位と横位のハケ目調整が施されている。

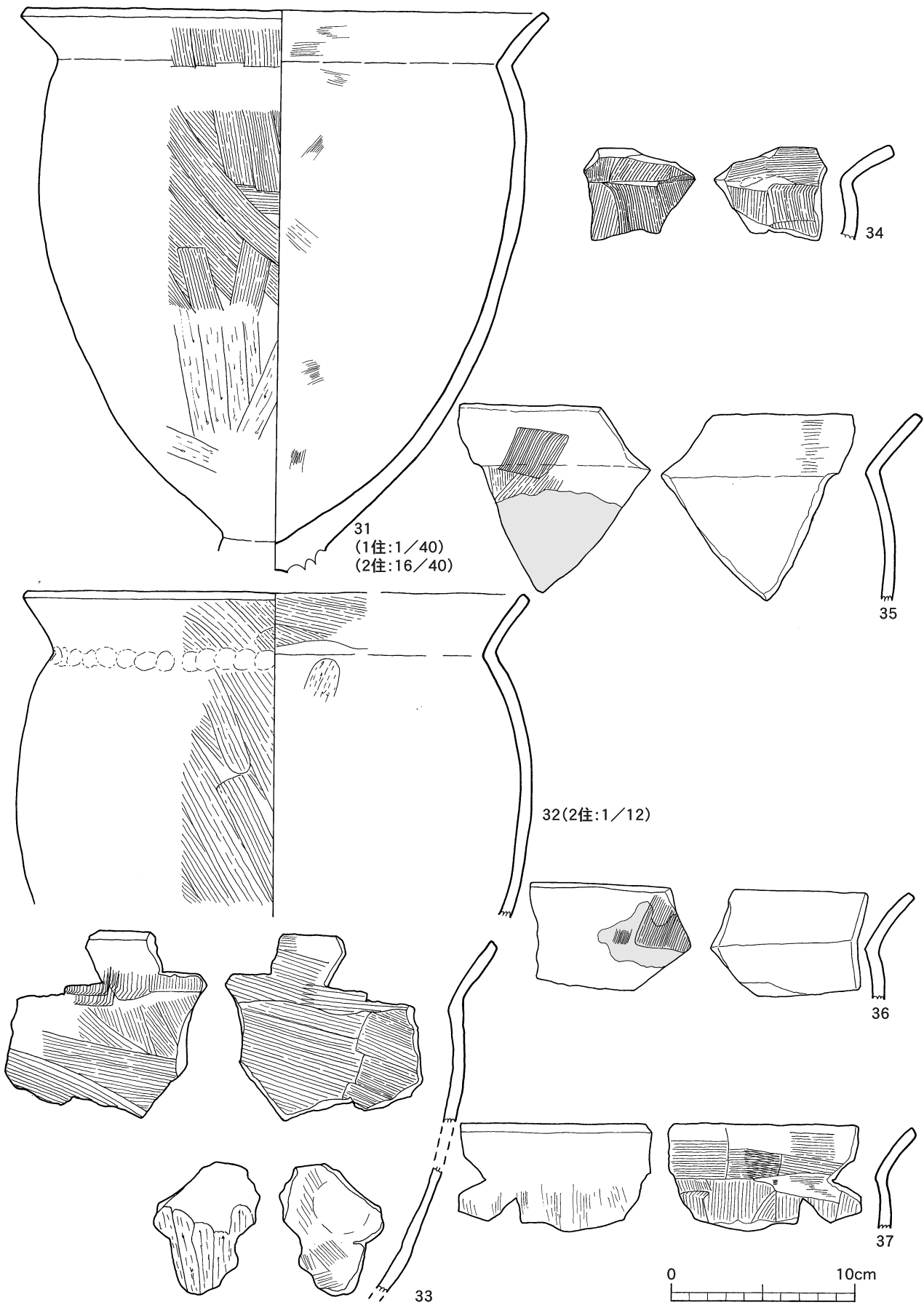
61と62は、よく似ている。同一個体の可能性もあるが、くびれ部内面の連続した指頭押圧の有無が少し異なっている。61は口径26.2cm、胴部径26.0cmを測り、外面がハケ目とナデ、内面がハケ目調整後丁寧なナデ調整を施している。

63も底部付近を欠いている。口径23.9cm、胴部径24.8cmとほぼ同じである。くびれ部に1条の三角突帯を巡らし、ハケ目原体による斜位の刻みを施している。外面調整は口縁部付近が掻き上げのハケ目、突帯下から斜位のハケ目、ケズリを施す。

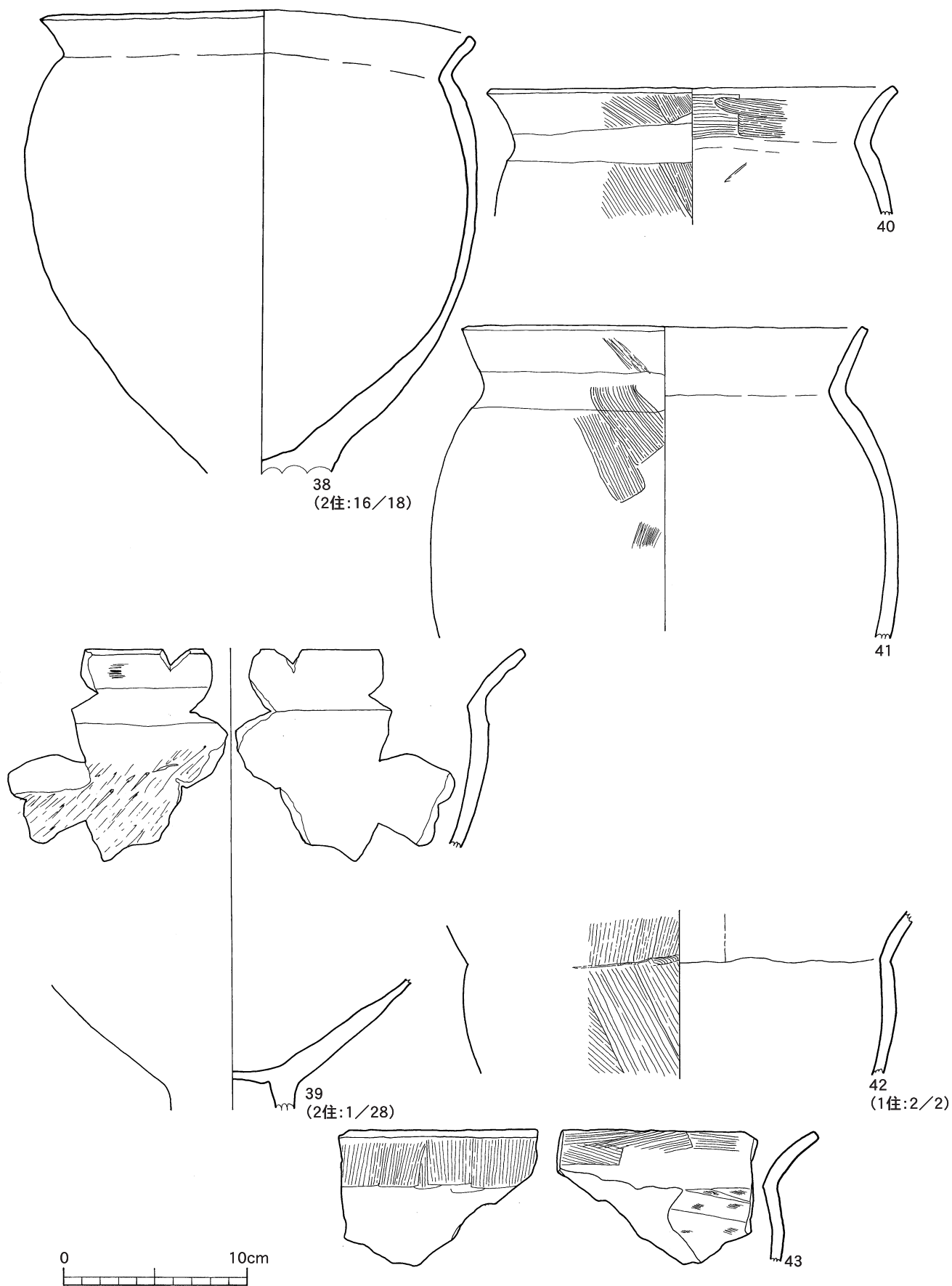
65も胴部下半を欠く。底部から緩やかに内弯しながら直線的に立ち上がる。Ⅲ類としてもよかったがこれ1点のためⅡ類に含めた。口縁部下に横位のナデを1条巡らしている。

66～78は胴部下半である。66～71は脚の付くくびれ部からはずれている。72～78は脚がはずれている。79・80・83・85・86は、脚部のみである。胴部につく箇所は粘土の継ぎ目からはずれている。81・82・86～91はくびれ部分と脚がしっかり残っている。

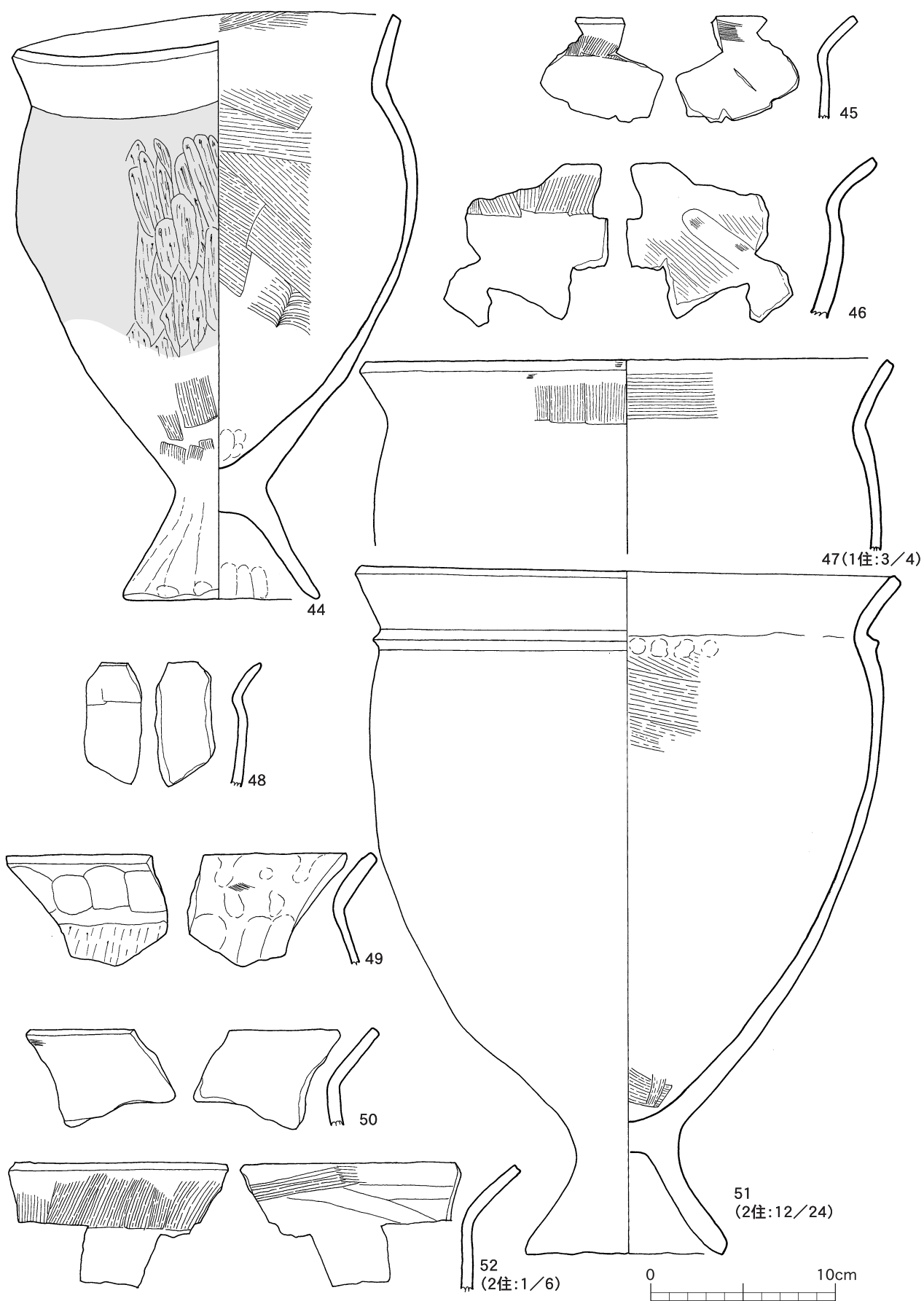
これらは制作時の粘土の付きの悪さを反映していることがうかがえる。また、これら底部の残在状況等から類推すると小さな円盤を作りそこから胴部を積み上げていった技法と甕のよう



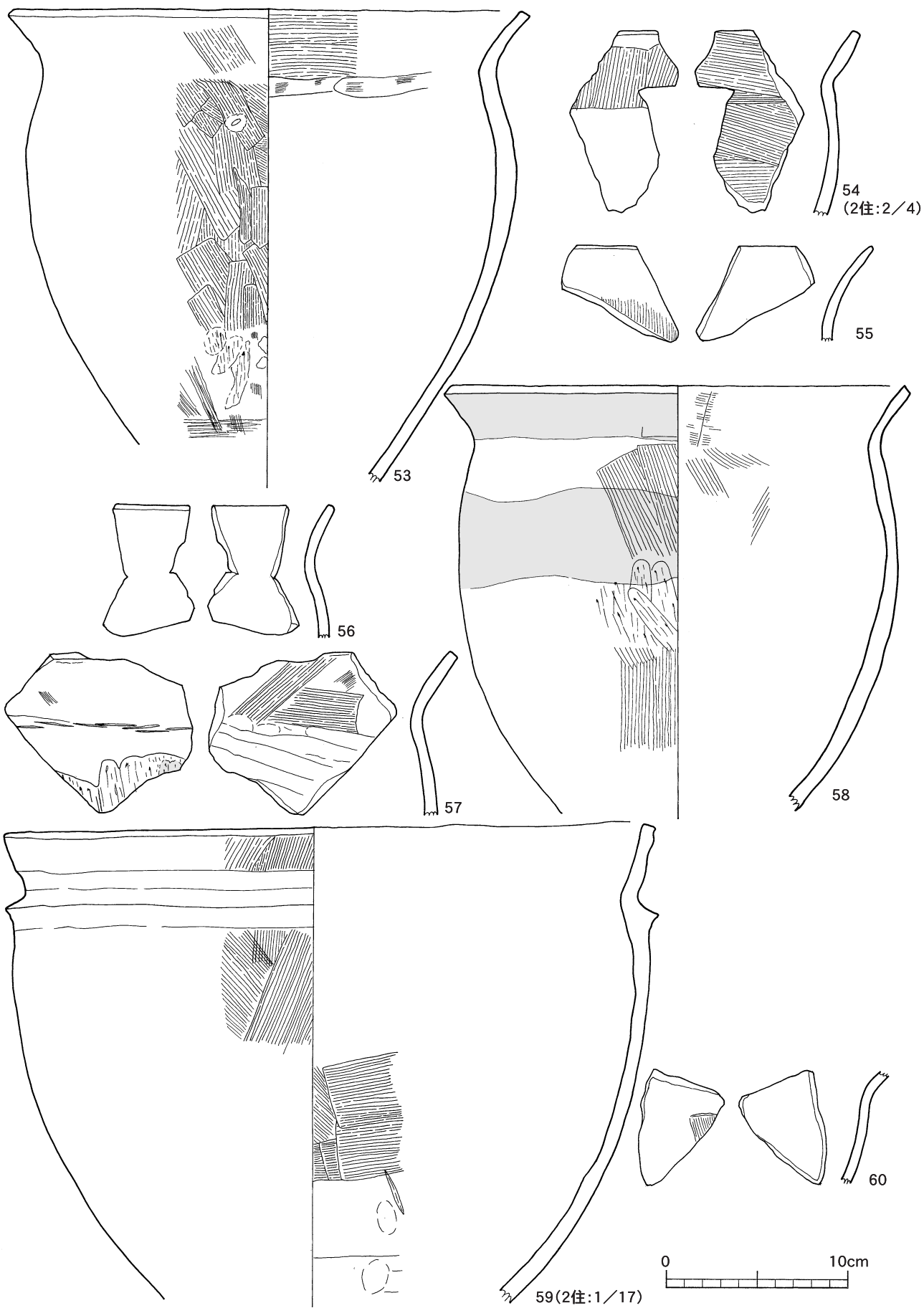
第20図 甕形土器Ⅰ類



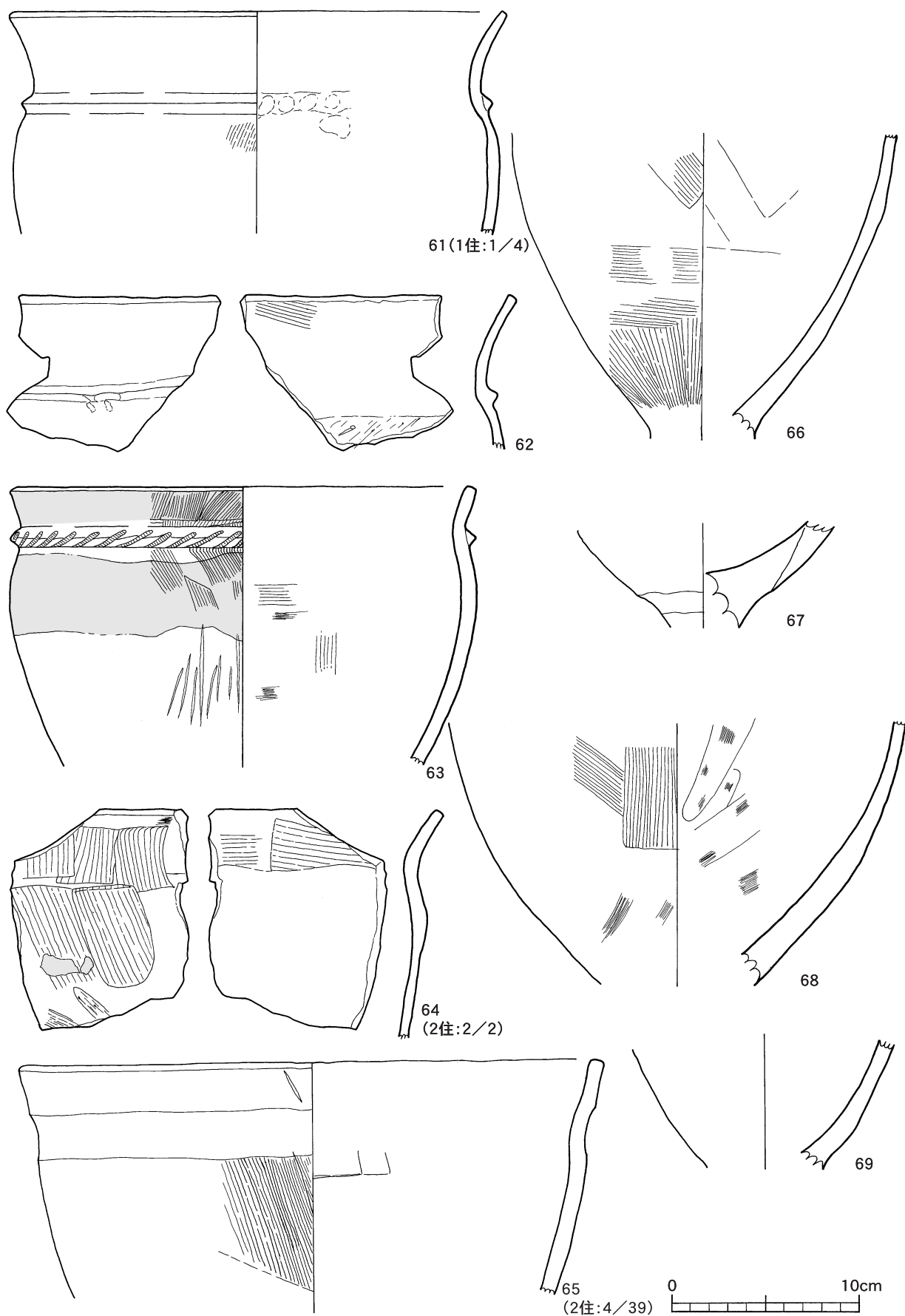
第21図 甕形土器Ⅰ類



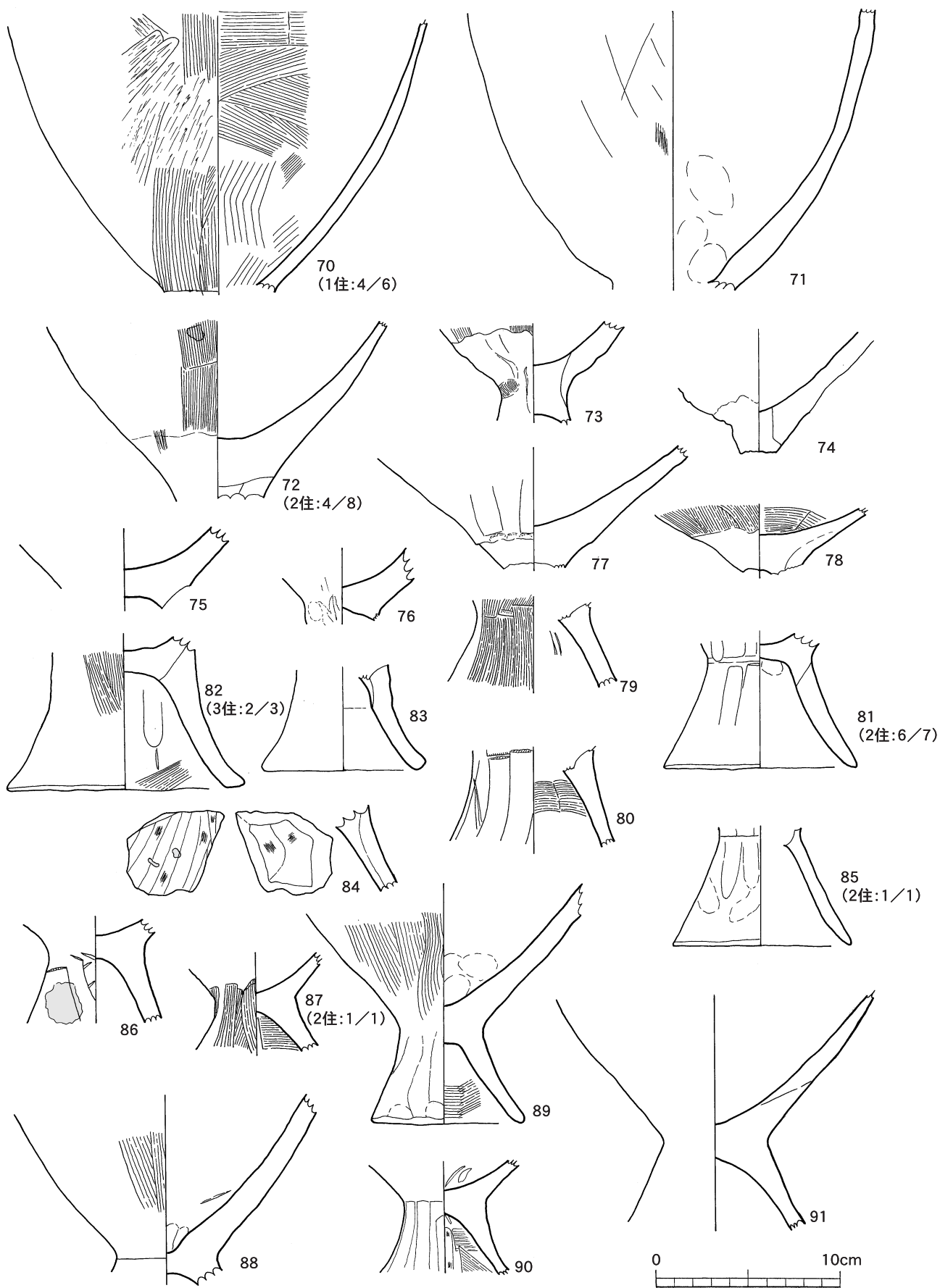
第22図 甕形土器Ⅱ類



第23図 甕形土器Ⅱ類



第24図 甕形土器Ⅱ類・甕形土器胴部



第25図 甕形土器底部

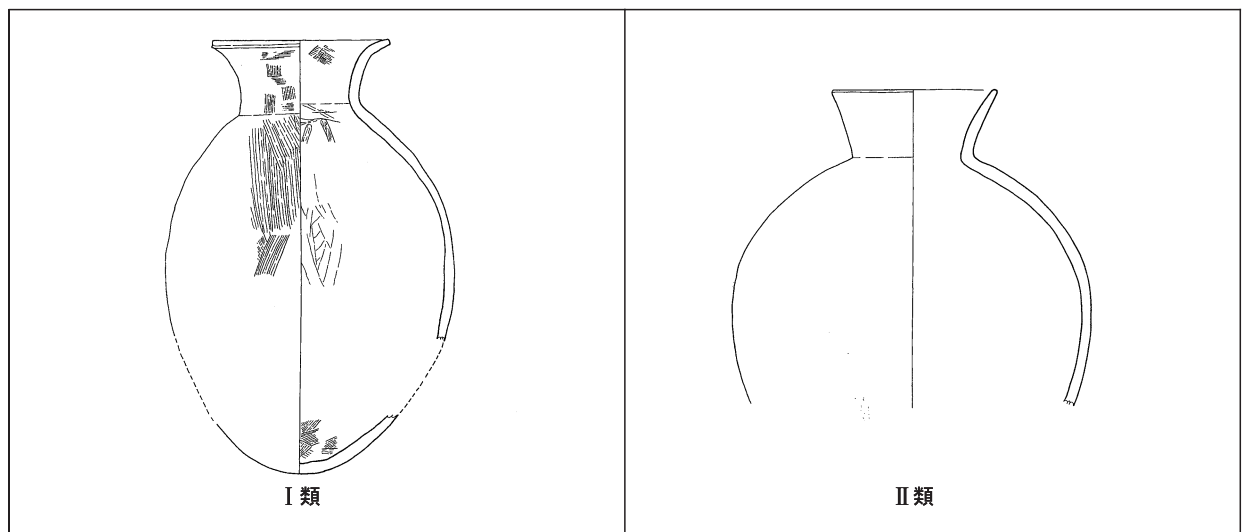
な状態を作り底に粘土を詰めた技法の2つが推測でき、その後脚を付けたことと脚を付けるときに胴部の空洞を埋めたことがうかがえる。これは高坏の作り方も同じである。

胴部の器面調整をみると先ずケズリを行い器壁を薄くし、次いでハケ目、この後突帯を付すものは付し、ナデ調整で仕上げているようである。胴部は、ハケ目調整を下向きで行うものが多い。ケズリのみられるものはハケ目調整を行わなかったため上部からケズリの痕跡が残っているものと思われる。外面のススの付着とこれを比べると、ススが付着したものは少ないが、胴部の上半のみしかみられず胴部下半のみの破片資料に皆無であることから胴部中位を特に薄く作り上げているものがあることと合うようである。口縁部の外面調整は掻き上げのハケ目調整とナデ調整が共通している。これに対し、底部付近と底部は縦位のハケ目調整がよく残り、底部と胴部のくびれまでと底部とに分けてハケ目が施される。

次いで突帯をみてみると、Ⅰ類には突帯を付すものは見られず、Ⅱ類についてもわずかである。更に刻みを施すものは、63の1個体のみであり、これは胎土・色調が他の個体と異なっている。壺形土器はこれと異なり、突帯を付すものが多く、ハケ目原体による刻みが施される。

壺形土器

甕形土器に次いで出土量が多かった。口縁部形態から2類に分類した。口縁部が外反して立ち上がり、長く、口縁端部を平坦におさめるものをⅠ類とし（第27・28図92～102）、口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるものをⅡ類とした（第29図103～105）。数量的にはⅠ類の方が多い。また二重口縁壺・小形壺がそれぞれ1点ずつ出土したが特に分類はおこなわなかった。また出土した口縁部数量よりも底部の数量の方が多い。



第26図 壺形土器分類概念図

壺形土器Ⅰ類（第27・28図 92～102）

92は口径13.7cm、胴部径22.8cmを測る。完全な形を復元できた。丸底で胴部中心で最大径となる。外面はハケ目調整が施され、口縁部は縦位の上方向のハケ目が施される。内面は胴部が縦位のハケ目、頸部が横位・縦位のハケナデ口縁部が横位のハケ目とナデが施される。

93は口縁部である。強く外反し、口唇部をやや肥厚させ口唇端部をくぼませている。調整はナデ調整である。

94は口縁部から肩部である。口径14.3cmを測る。外面は口縁部が口唇直下を斜位のハケ目、頸部から口縁部中位までを縦位のハケ目肩部を縦位のハケ目を施す。内面は口縁部が斜位のハケ目、肩部には指頭の痕跡が残る。

95・96は口縁部である。口縁部が縦位のハケ目、内面を横位斜位のハケ目を施している。

97は完全な形を復元できた。口径14.5cm、胴部径25.2cm、器高38.8cmを測る。径の小さい平底である。胴部中位よりやや上で最大径となり、長胴である。外面は縦位のハケ目、内面が縦位・横位のハケ目とナデ調整が施される。底は指頭圧により調整されている。

98は胴部中位より上半である。口径14.0cmを測り、胴部で最大径となるところに1条の刻目突帯を巡らしている。外面は口縁部が縦位のハケ目、頸部から胴部が横位のハケ目である。内面は斜位のハケ目とナデ・指頭圧により調整される。

99は完全な形に復元できた。胴部中位よりやや上位で最大径となりそこに1条の刻目突帯を巡らす。口径11.1cm、胴部径23.2cmを測る。外面は口縁部が縦位のハケ目、胴部下半にケズリ、底部付近にハケ目を施している。内面は口縁部が横のハケ目胴部が斜位・横位のハケ目を施し、底に指頭圧である。

100は口縁部である。口径14.9cmを測り、外面が縦位のハケ目、内面がナデ・指頭圧により調整される。

101は口縁部から頸部である。口径17.7cmを測る。外面は口縁部が縦位、頸部が斜位のハケ目を施す。内面は横位のハケ目を施し、指頭圧がみられる。

102は口縁部から胴部である。口径12.8cm、胴部径23.4cmを測る。外面を縦位のハケ目、内面の口縁部が横位のハケ目を施す。

壺形土器Ⅱ類（第29図 103～105）

103は口縁部から胴部である。口径12.7cm、胴部径28.2cmを測る。調整は内外面共に丁寧なナデである。

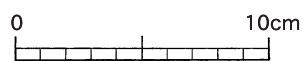
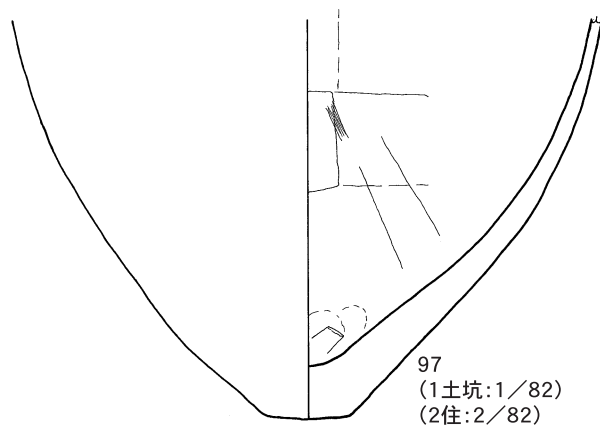
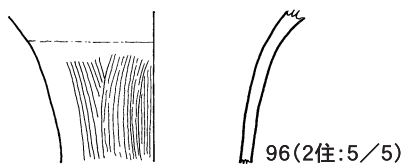
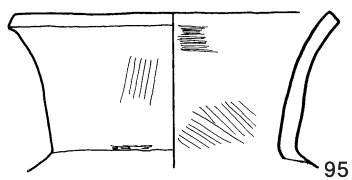
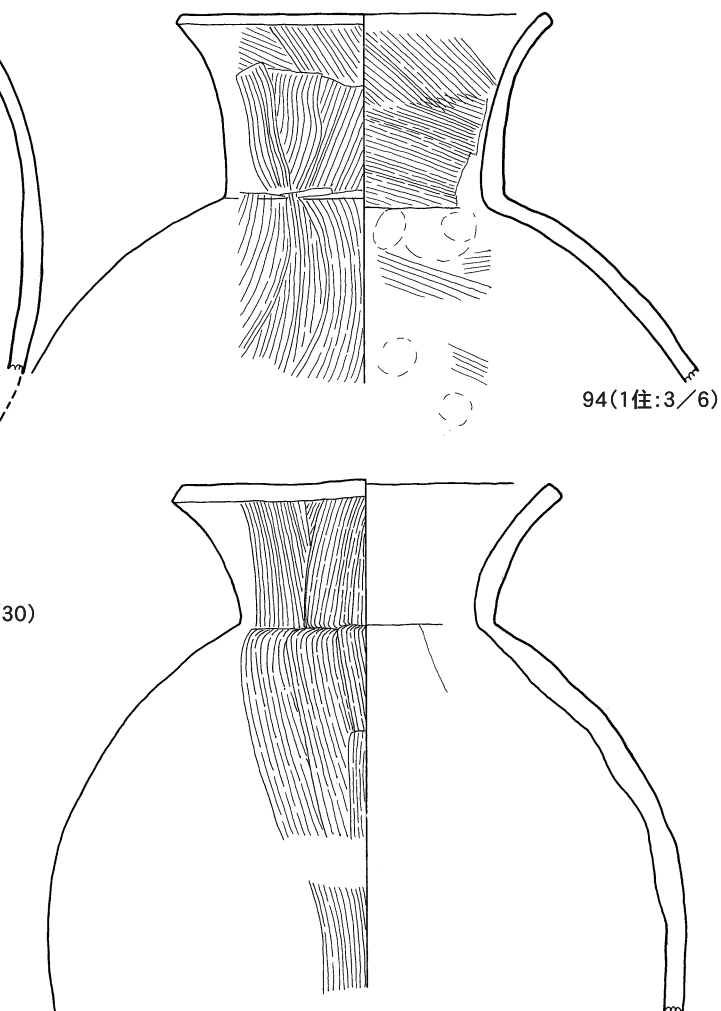
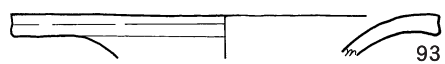
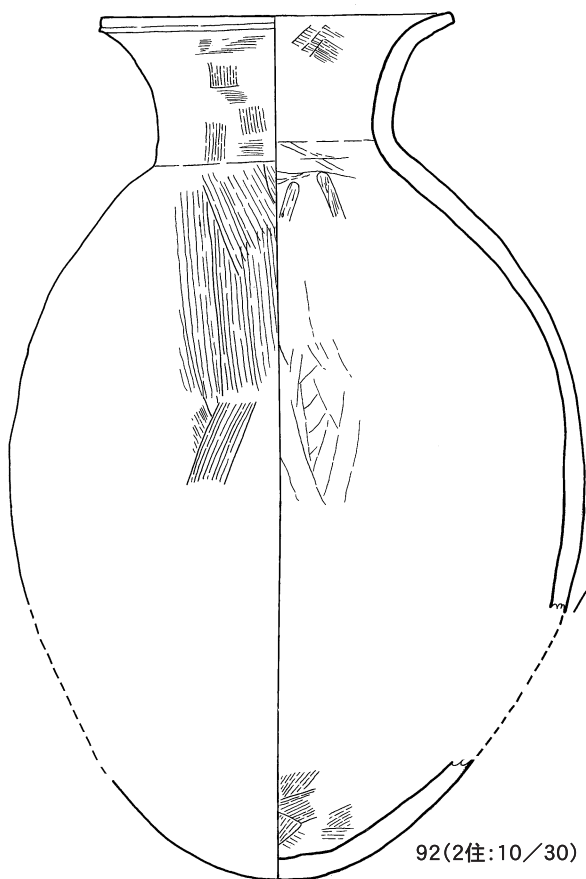
104も口縁部から胴部である。口径10.8cm、胴部径24.0cmを測る。胴部最大径となる位置に1条の刻目突帯を施す。胴部外面にはケズリがみられる。内面は口縁部がナデ調整、頸部が指頭による調整、胴部が横位のハケ目調整が施される。

105も口縁部から胴部である。口径11.1cmを測る。他の土器と胎土焼成が明らかに異なっている。器面は剥落が激しく調整の跡は内面にハケ・ナデの痕跡が一部に残るのみである。

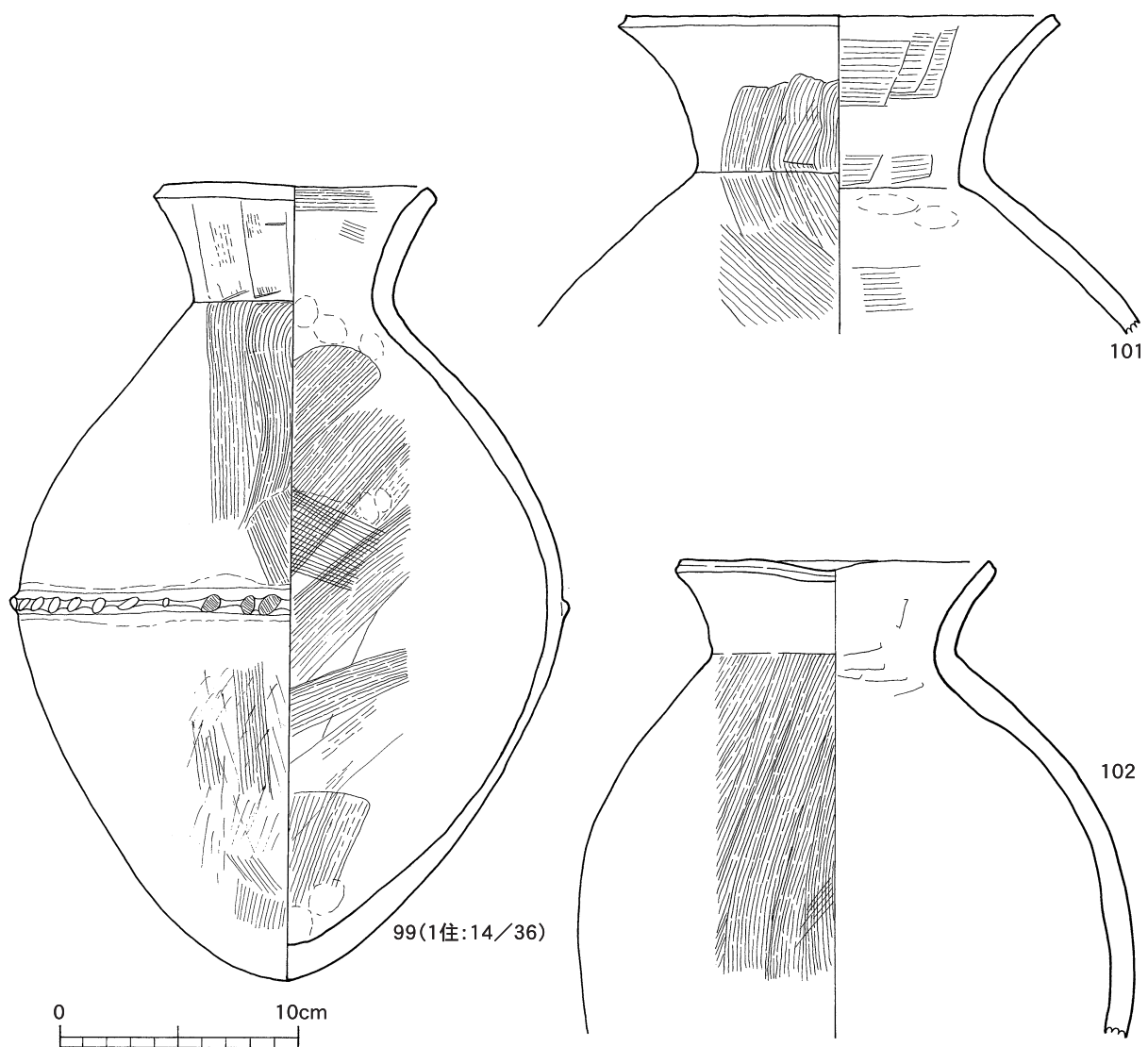
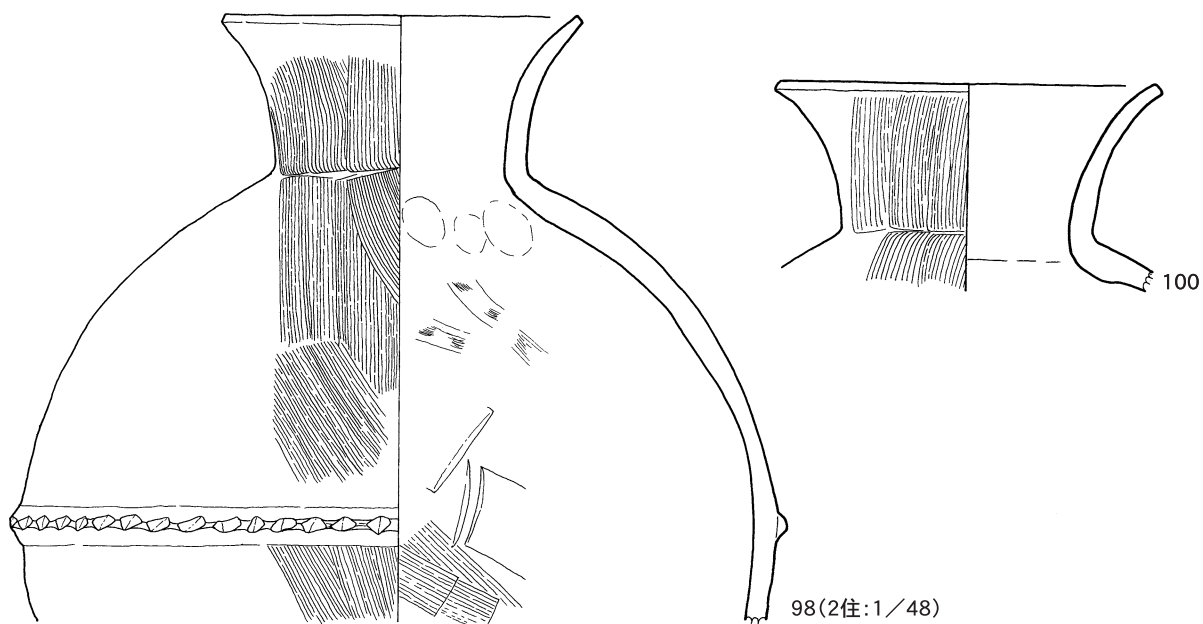
その他の壺形土器（第29図 106・107）

106は二重口縁壺である。口径14.5cmを測る。口縁部から頸部は短く、頸部に1条の刻目突帯が施される。内外面共に丁寧にナデ上げられ内面の一部に指頭圧がみられる。刻目突帯のつく位置が他の壺形土器と異なっている。

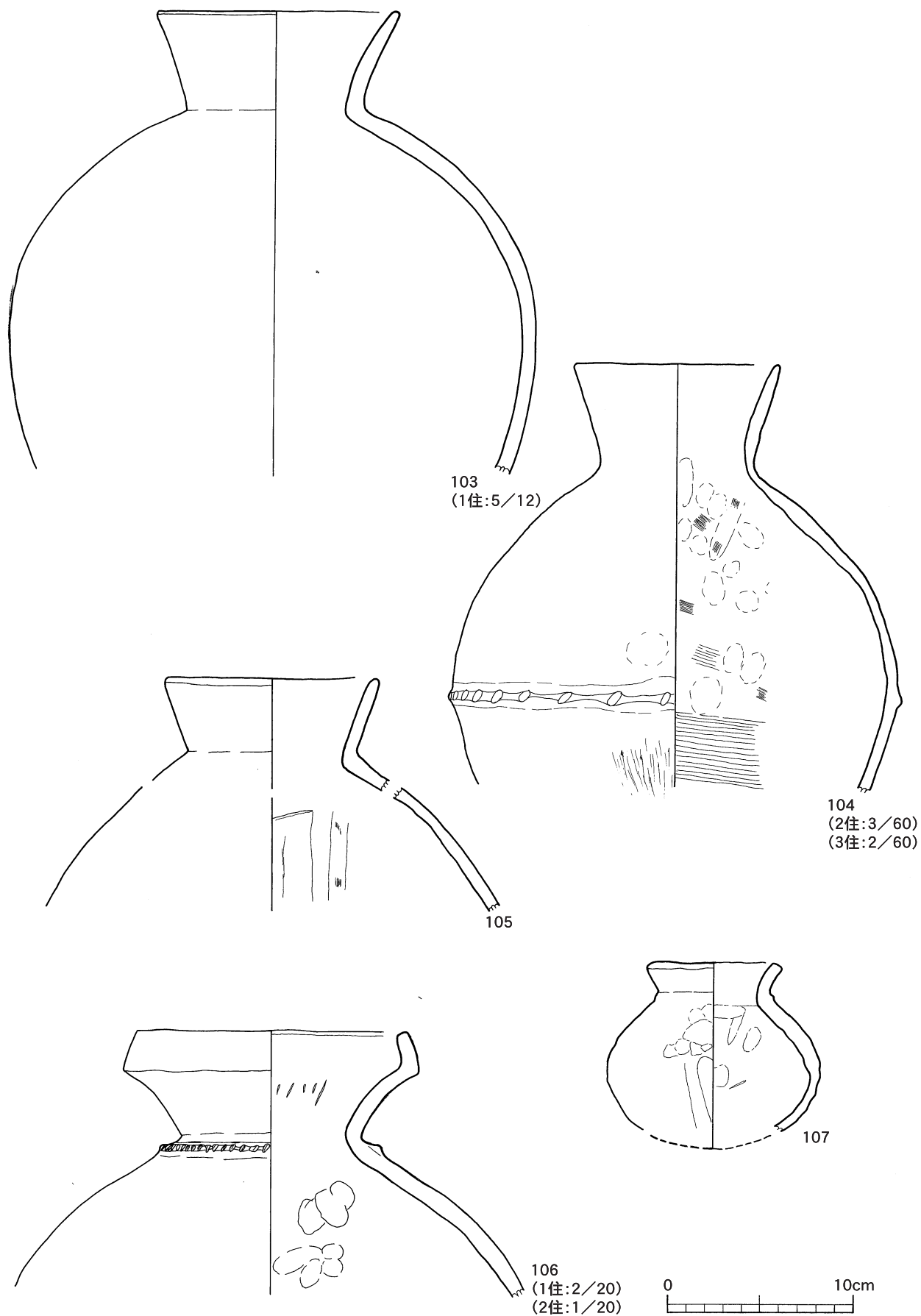
107は小型の壺形土器である。口径6.5cmを測り、短い頸部が外反し器面全体を粗いナデ調整で調整されている。底部は欠損しているが、丸底が推測される。



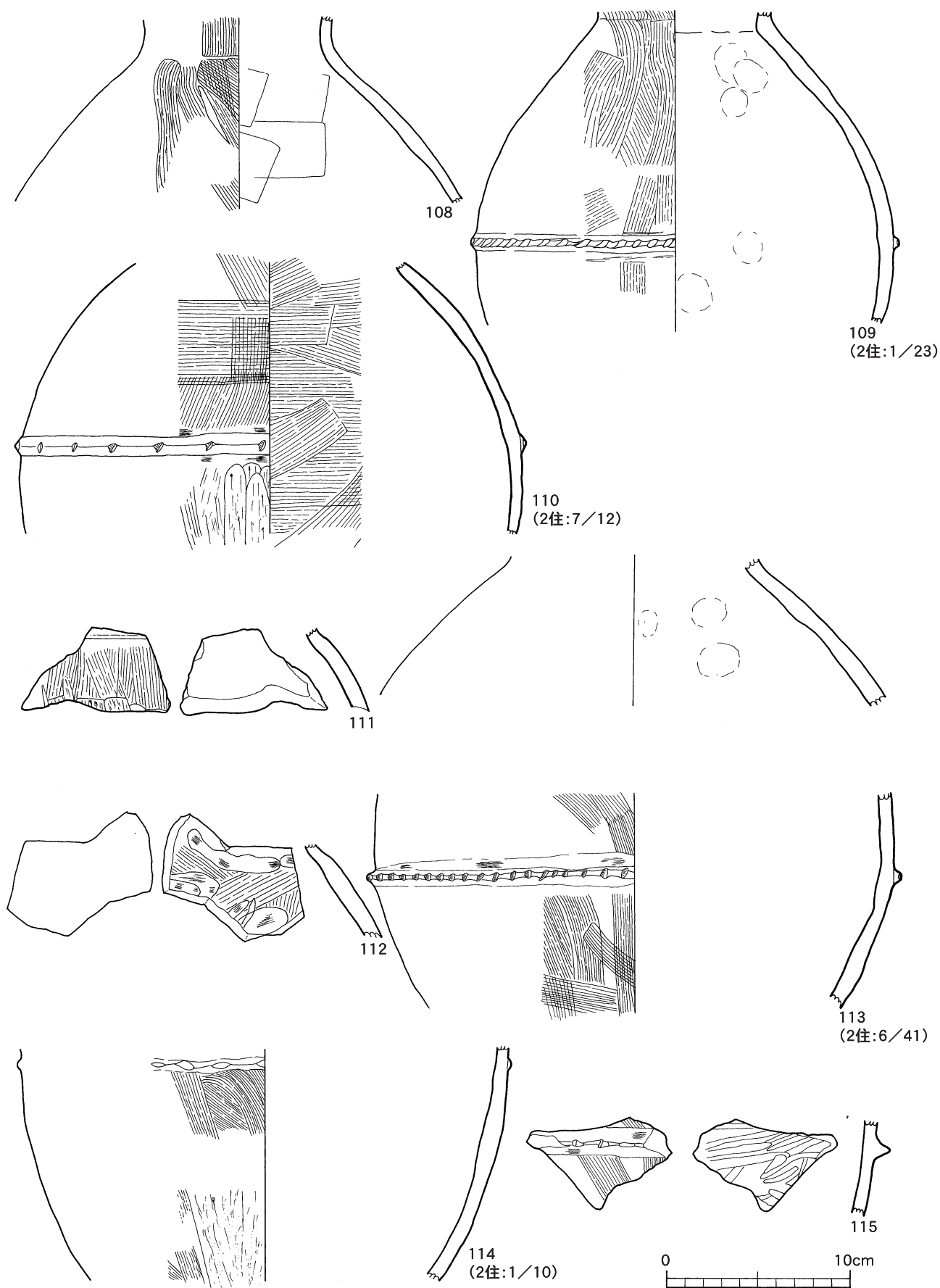
第27図 壺形土器Ⅰ類



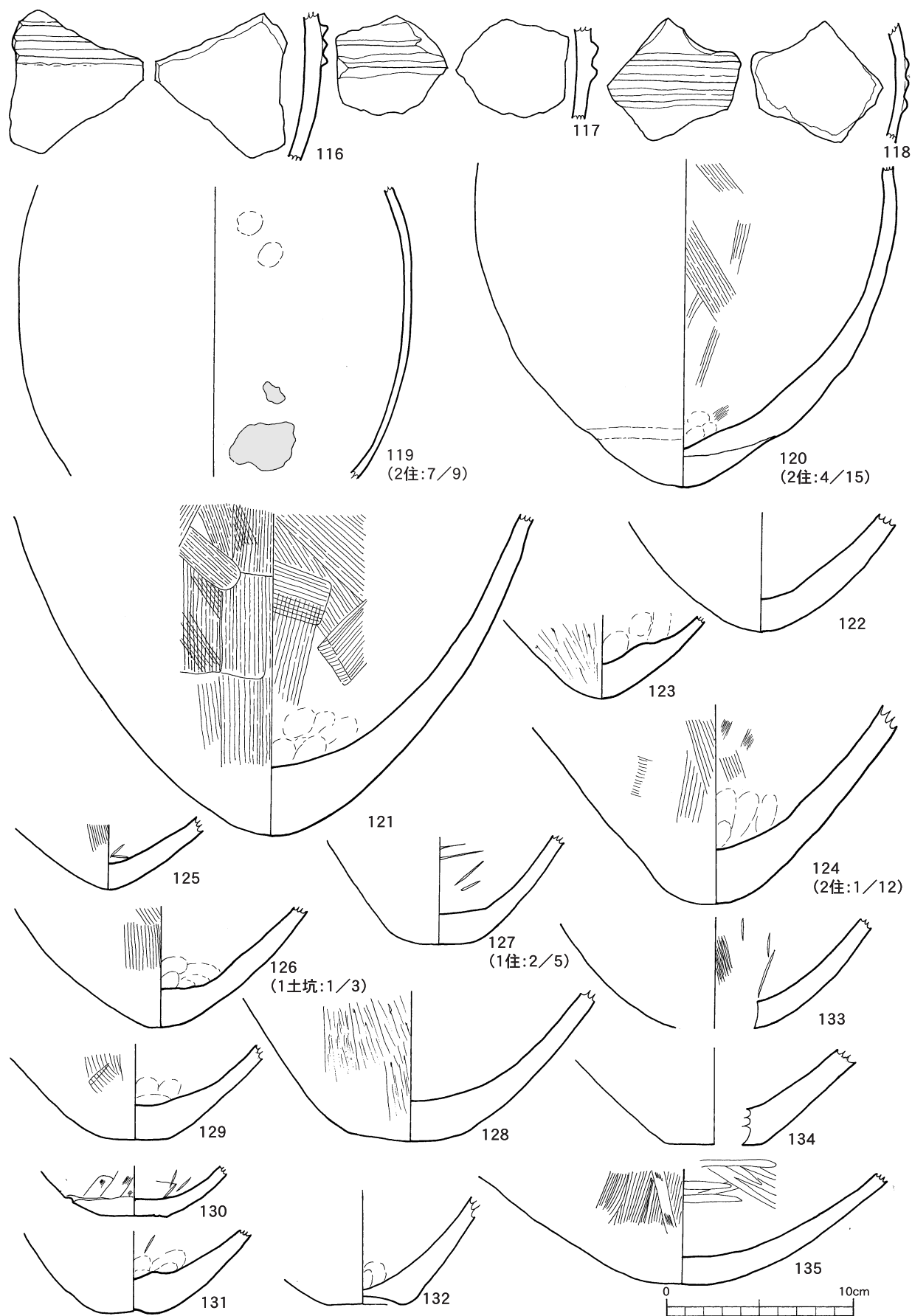
第28図 壺形土器Ⅰ類



第29図 壺形土器Ⅱ類・その他の壺形土器



第30図 壺形土器 肩部・胴部



第31图 壺形土器 胴部・底部

壺形土器胴部・底部（第31図 116～135）

108～121は胴部である。突帯の付くものは胴部最大径となる位置に刻目突帯が1条巡らされる。胴部下半までを縦位のハケ目を施し、内面は横・斜位のハケ目とナデ調整が施される。110・114は甕形土器同様胴部下半にケズリがみられる。116・117・118は3条の断面三角突帯が巡らされている。各々が密に施され、ナデ調整されている。

122～135は底部である。122～126までが尖底気味の丸底、127～130までが平底、131・132は底部が窪みを持つ平底であり、135は丸底である。123・128はケズリがみられる。他は外面を縦位のハケ目調整が施され、内面にハケ目・ナデの調整が施される。

120・133・134などは粘土の継ぎ目が観察でき、このことから小さな円盤を作りそこから胴部を積み上げていったことが推測できる。

また、外面の調整も99・104・110・114・123・128には胴部下半にケズリがみられ、これは甕形土器と同じである。おそらく、壺形土器の底部から胴部の調整手順も甕形土器と変わらなかったものと思われる。

絵画土器（第32図 136）

136は線刻により絵画が描かれた壺形土器である。丸平底を呈し、大きく開くが高さ8cmまでしか残っていない。内外面とも1cmあたり10本の単位をもつハケ目により器面調整され、他の壺形土器と比べ特別丁寧なつくりをしているということはない。胎土も3mm大の岩片や火山ガラスを含み、薩摩半島でみられる土器と大差はない。接合資料の半数以上が2号竪穴住居跡から出土したことから、他の遺物と同じ弥生時代後期後半～終末の時期のものと考えられる。

底部付近に10数本の線刻がなされ、一部が交わっていることから何かを表現しようとしていることがうかがえる。底部中央には幅3mmの直線的な沈線が施され、残存しているものから「+」字形に施されたものである可能性が推測できるが、この底部中央の沈線は線刻図案とは関係のないものと考えられる。線刻は線のつながり具合から、少なくとも3つの素材が描かれている。底面から延びた2本の線は、左に弯曲しながら上部で交わり1本となる。右上の線刻は、下部で交わり左側の線は左に弯曲するが、右側の線は欠損し不明である。左側にある素材が最も多くの線で描かれており、これも一方が交わって片方が開くような描き方をしている。これらを考えると写実的な表現ではないが、これまで南九州で出土している事例から、「龍」を描いたのではないかと考えられる。

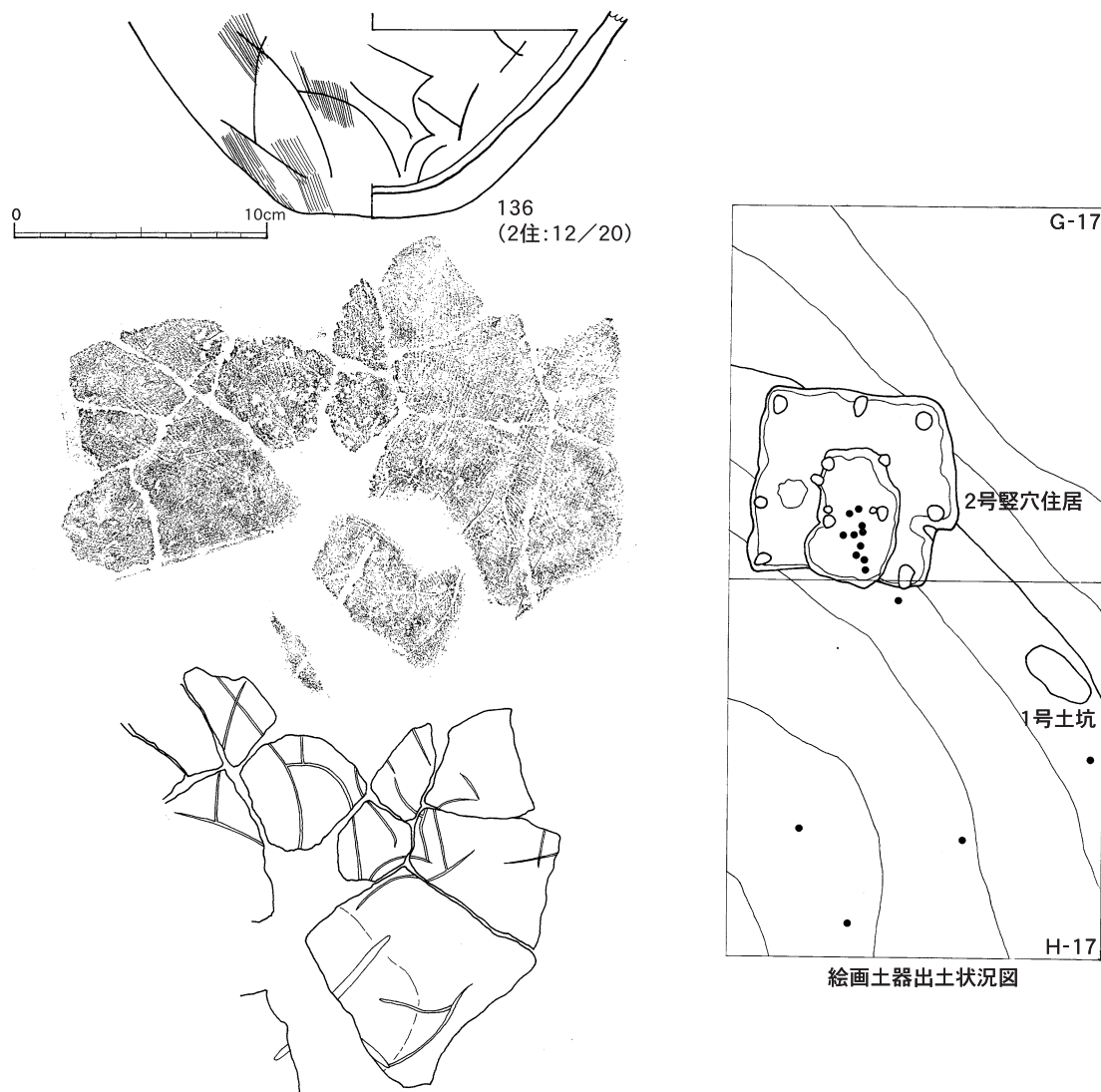
国立歴史博物館の春成秀爾氏によると、佐賀県唐津市桜馬場遺跡出土の方格規矩四神鏡に描かれた龍はS字状の体に4本の足、長い尾、顔の部分が写実的に描かれているが、春成氏は、一部の足が鰭状になっていることを見いだして、大阪府池上遺跡例が中国鏡の絵画から転写した初期のものであると推察している。まもなく龍は本来の姿から大きく崩れて、大阪府恩知遺跡のようにS字形の体に鰭状の突起を付けただけの図像になったと指摘した。さらに、これまで「飛鳥」として定着していた宮崎県下那珂遺跡出土の絵画も龍であると言及している。原始絵画を直感的に見るのではなく、多くの絵画土器を実見し系統を追求し続けた末の結論であり、説得力がある。更に、龍の図像が記号化したものが鰭状や巴形、あるいは弦を下にした弧線であると導き出している。春成氏の研究を基に鹿児島県下の出土例をみると、金峰町諏訪前遺跡

出土の「龍」がある程度具象的な部分を残しているのに対し、金峰町松木園遺跡、鹿児島大学構内遺跡、松元町山下堀頭遺跡の例は鰭状の線刻を一部に取り込んでいるものであるといえる。

全国の弥生時代における原始絵画を見てみると、畿内地域から北部九州にかけて弥生土器に描かれる原始絵画は、「鹿」・「建物」・「鳥」などを題材としたものが多く、盛行する時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。春成氏によると、後期のⅤ期になるとそれらの題材は記号化されるようになり、「龍」だけが新たに具象化して加わるという。一方、熊本・宮崎・鹿児島の南九州における絵画土器は宮崎県を主体に約40遺跡180例ほどあるが、Ⅳ期の出土例が全くなく、「鹿」や「建物」等を題材にしたものも見られない。南九州で絵画土器が見られるようになるのはⅤ期になってからであり、弥生時代後期後半～終末にかけて最も盛行する。しかも、題材としてはっきりと分かっているのは「龍」のみである。このことから、山下堀頭遺跡出土例もその中の一つであると考える。

《参考文献》

春成秀爾 「絵画から記号へ―弥生時代における農耕儀礼の盛衰―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991



絵画土器出土状況図

第32図 絵画土器

鉢形土器（第33図）

137～144は鉢形土器である。形態的には3種認められるが、それぞれ1個体ずつの出土であるため特に分類は行わない。

137は完全品である。充実した底部から少し内弯して立ち上がり、口唇端部がくぼみを持つ。口径は14.0cmを測り、底径は4.0cmを測る。器高は9.3cmである。外面内面共に丁寧なナデ調整が施される。2号住居跡からの出土である。

138は甕形土器Ⅱ類とあまり形が変わらないものと推測される。外面が縦位・斜位のハケ目調整が施され、内面が斜位のハケ目とヘラミガキが施される。胴部径は19.2cmである。また、144が138の底部である可能性がある。

139は碗形の形状をしているが脚がつくものと思われる。胎土・色調・焼成の似た脚部は140であり住居跡から出土している。141・142も同様な形状の鉢形土器の口縁部である。143は142と形状の似た脚部である。

蓋形土器（第33図）

145のみである。高坏形土器の坏部と大差がないようであるが外面のケズリが甕形土器の作りと同じであり、高坏形土器が外面内面共に丁寧にハケ目・ナデ調整を施すことから蓋形土器とした。

ジョッキ形土器（第33図）

146のみである。口径など復元できなかったが、器面全体が丁寧にナデ上げられ、胎土も色調も他の土器と異なっている。また、器厚は非常に薄く2mm程度しかない。南九州でジョッキ形土器の出土は少なく、その上薩摩半島西側に集中している。これも二重口縁壺・絵画土器と共に山下堀頭遺跡の中で特異な土器である。

埴形土器（第33図）

147は埴形土器である。胎土がよく精製され、また他の土器と異なっている。赤色顔料を塗布しヘラミガキがなされている。走査型電子顕微鏡で顔料の分析を行ったがベンガラにみられるような鉄（Fe）のピークはみられなかった。これも他の土器とは異質であり二重口縁壺・絵画土器・ジョッキ形土器と共に山下堀頭遺跡の中で特異な土器である。

高坏形土器（第33図）

149～157は高坏形土器である。149は、口縁部が強く屈曲して立ち上がる。口径23.2cmを測る。150はその同一個体と思われる。内面外面共に丁寧なハケ目調整が施される。

151は口径29.0cmを測る。149よりも外に開くようにして口縁部が立ち上がる。内面はヘラナデが施される。

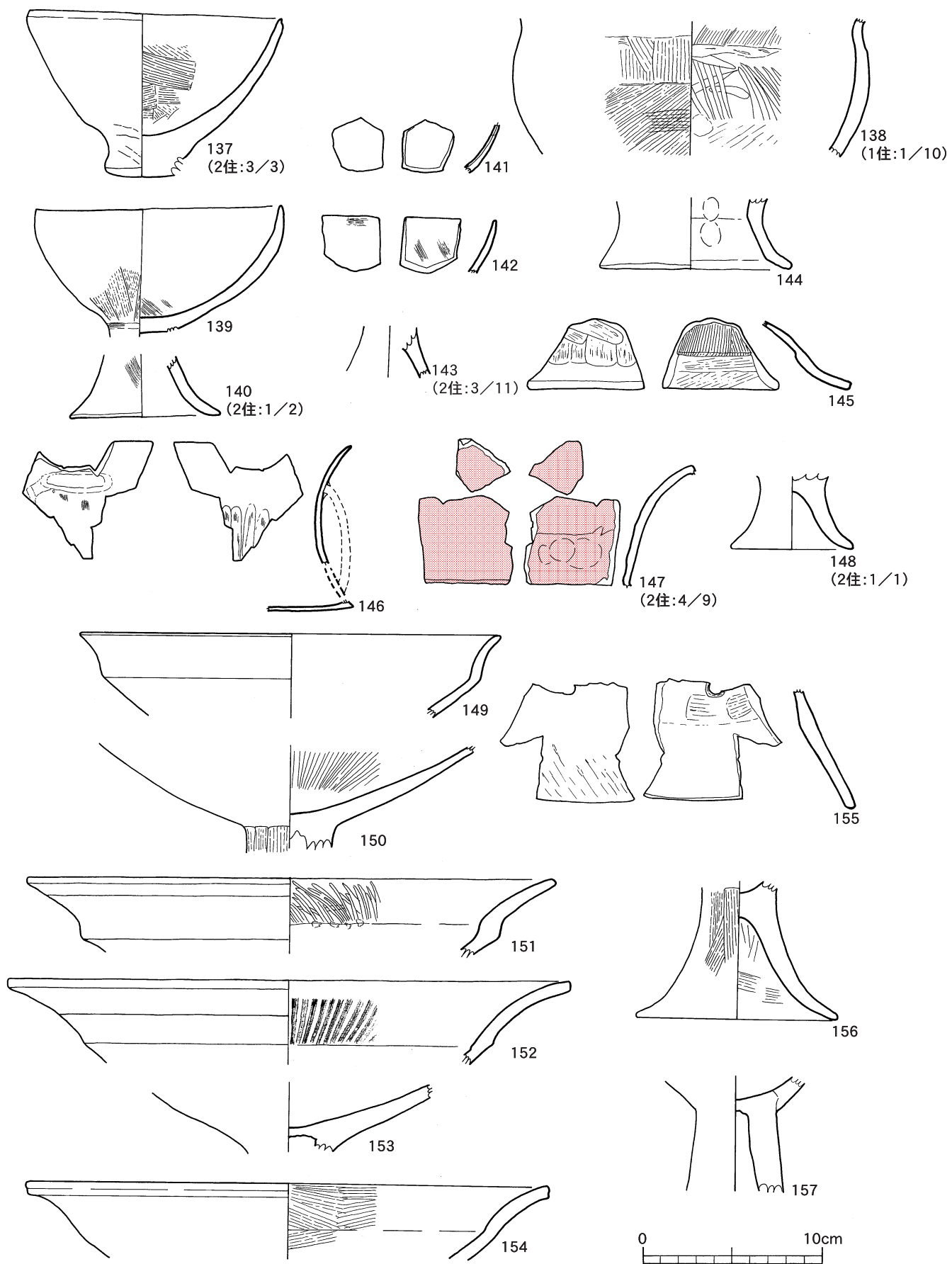
152は口径30.7cmを測る。153が同一個体と思われる。坏部下半の作りが甕形土器同様の作りをしている。おそらくは脚の成形時もしくは成形後に粘土塊をはめたものと思われる。外面は丁寧にナデられ、内面には黒色の暗文が施される。

154は口径29.0cmを測る。外面は丁寧にナデられ、内面はハケ目調整が施される。

155・156・157は脚部である。3点それぞれに形状が異なる。

その他（第33図）

148は、器種不明である。胎土は精製されたものに近く、色調も淡黄褐色を呈し、異質である。



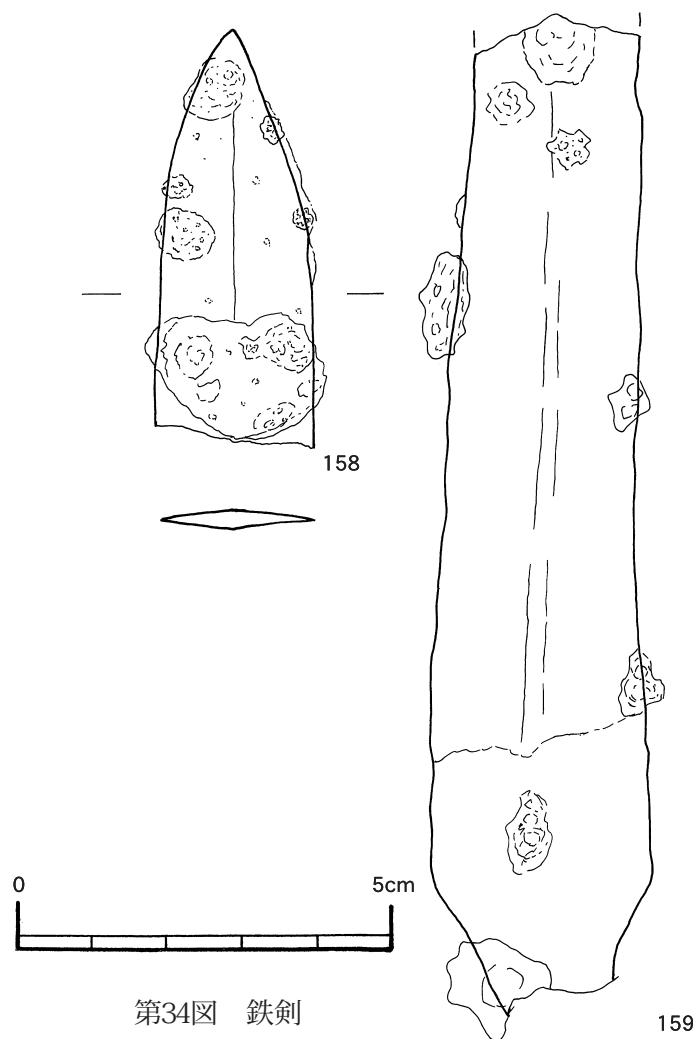
第33図 その他の土器

(2) 鉄器

鉄剣

包含層中よりいくつかの鉄片が検出されたが、明らかに製品と分かるものは鉄剣2点だけであった。158は剣先である。長さ4.5cm、幅2.1cm、厚さ4mmを測る。159は長さ12.5cm、幅2.9cm、厚さ5mmを測る。剣身である。腐食が進んでいるが全体の形状は維持している。いずれも包含層中の出土遺物であるため帰属時期の確証はないが、出土地点・層や弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物が出土遺物の大半を占めることから古墳時代前期のものと考えられる。

鹿児島県内では、弥生時代の鉄製品の出土は10例にみたく、古墳時代の例も墳墓を中心に武器類が出土しているが他県と比べるとかなり少ない。そのような状況のなかで、現在あまり古墳時代の集落の発見されていない松元町から鉄剣の発見されたことは重要である。



第34図 鉄剣

159

第5表 弥生時代・古墳時代土器観察表

番号	層	破片点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石英	長石	輝石	角閃石	赤色粒	石粒							
31	Ⅲ	23	甕	I	口縁部から胴部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	丁寧なナデ	口径28.0cm 胴部径26.4cm	
	1住	1																
	2住	16																
32	Ⅲ	11	甕	I	口縁部から胴部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径26.9cm 胴部径28.0cm	
	2住	1																
33	Ⅲ	6	甕	I	口縁部から胴部	○	○	○				灰褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
34	Ⅲ	1	甕	I	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
35	Ⅲ	7	甕	I	口縁部	○	○	○		○		赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ		スス
36	Ⅲ	1	甕	I	口縁部	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ		

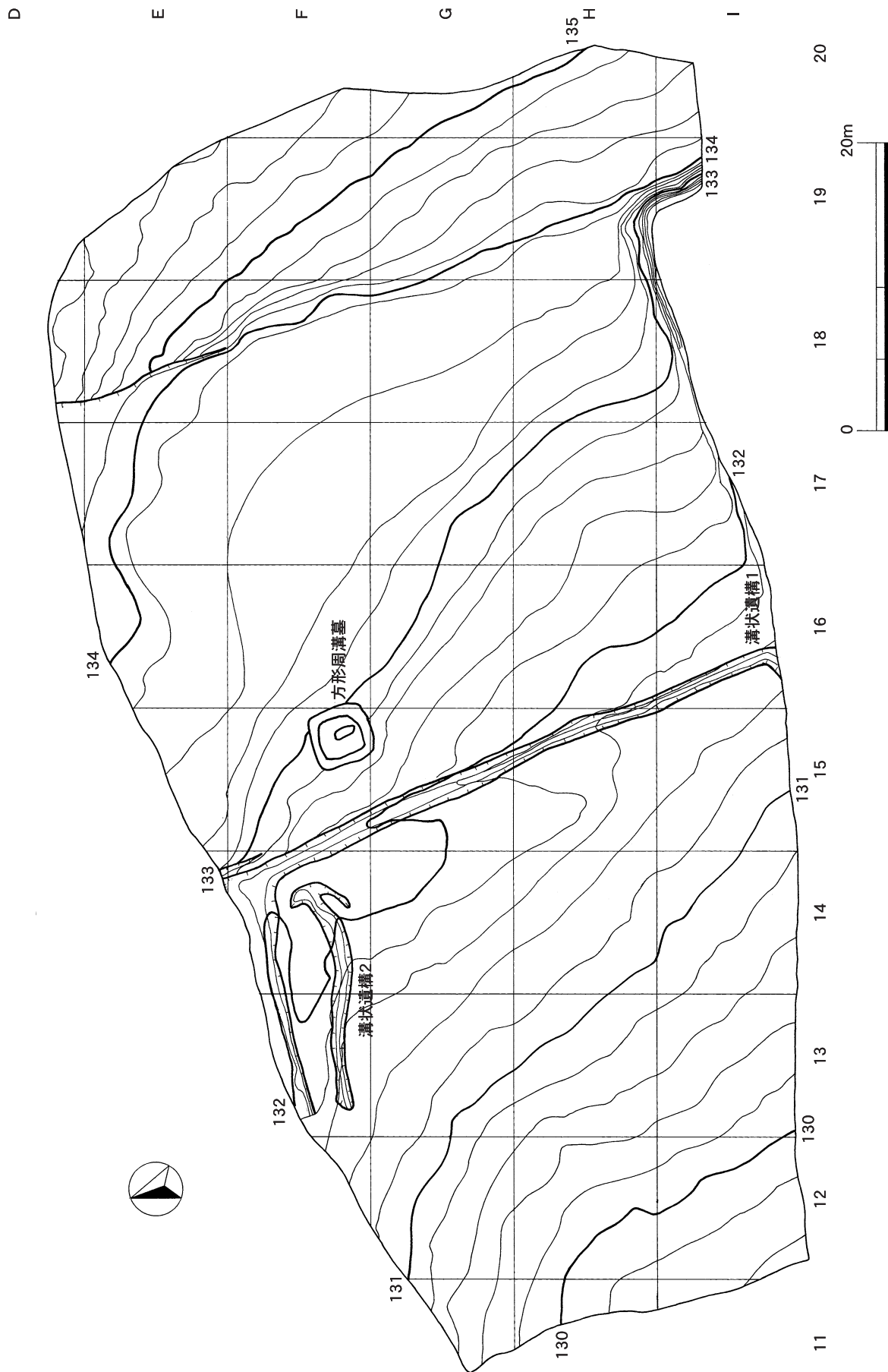
番号	層	破片 点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石 英	長 石	輝 石	角 閃 石	赤 色 粒	石 粒							
37	Ⅲ	3	甕	I	口縁部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
38	Ⅲ	2	甕	I	口縁部から 胴部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ	口径23.1cm 胴部径24.5cm	
	2住	16																
39	Ⅲ	27	甕	I	口縁部	○	○	○		○	○	灰褐色	明赤褐色	良好	ケズリ・ナデ	ナデ		
	2住	1																
40	Ⅲ	2	甕	I	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径21.9cm	
41	Ⅲ	24	甕	I	口縁部	○	○	○	○	○		赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ	口径21.4cm 胴部径25.5cm	
42	1住	2	甕	II	口縁部	○	○	○	○			赤褐色	赤褐色	良好	ハケ	ハケ・ナデ	胴部径23.6cm	
43	Ⅲ	2	甕	I	口縁部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
44	Ⅲ	17	甕	II	完形復元	○	○	○		○	○	黄褐色	黄褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径20.4cm 胴部径21.2cm 底径10.4cm	
45	Ⅲ	19	甕	II	口縁部	○	○	○		○	○	明茶褐色	明茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
46	Ⅲ	5	甕	II	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
47	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径28.3cm 胴部径27.4cm	
	1住	3																
48	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○		○	○	黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
49	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○		○		暗赤褐色	暗赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ナデ・指頭		
50	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ		
51	Ⅲ	12	甕	II	完形復元	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ナデ・ハケ・指頭	口径28.9cm 胴部径27.9cm 底径10.6cm	
	2住	12																
52	Ⅲ	5	甕	II	口縁部	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
	2住	1																
53	Ⅲ	24	甕	II	口縁部	○	○	○		○		暗赤褐色	赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径24.0cm 胴部径22.8cm	釉
54	Ⅲ	2	甕	II	口縁部	○	○	○		○		赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
	2住	2																
55	Ⅲ	2	甕	II	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
56	Ⅲ	2	甕	II	口縁部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ		
57	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○	○			黄褐色	赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		スス
58	Ⅲ	6	甕	II	口縁部から 胴部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径24.9cm 胴部径24.0cm	スス
59	Ⅲ	16	甕	II	口縁部から 胴部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径35.1cm 胴部径34.8cm	
	2住	1																
60	Ⅲ	1	甕	II	口縁部	○	○	○				暗褐色	明褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
61	Ⅲ	3	甕	II	口縁部	○	○	○		○		黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ・指頭	口径26.2cm 胴部径26.0cm	
	1住	1																

番号	層	破片 点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石 英	長 石	輝 石	角 閃 石	赤 色 粒	石 粒							
62	Ⅲ	3	甕	Ⅱ	口縁部から 胴部	○	○	○			○	黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
63	Ⅲ	20	甕	Ⅱ	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ後丁寧なナデ	口径23.9cm 胴部径24.8cm	スス
64	2住	2	甕	Ⅱ	口縁部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		スス
65	Ⅲ	35	甕	Ⅱ	口縁部から 胴部	○	○	○			○	黒褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径30.3cm	
	2住	4																
66	Ⅲ	24	甕		胴部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ	ハケ・ナデ		
67	Ⅲ	4	甕		胴部	○	○	○		○		明赤褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
68	Ⅲ	2	甕		胴部	○	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
69	Ⅲ	2	甕		胴部	○	○	○		○		黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
70	Ⅲ	2	甕		胴部	○	○	○			○	黄褐色	灰褐色	良好	ケズリ後ハケ	ハケ		
	1住	4																
71	Ⅲ	3	甕		胴部	○	○	○			○	暗黄褐色	暗赤褐色	良好	ナデ	ナデ・指頭		
72	Ⅲ	4	甕		胴部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ・指頭		
	2住	4																
73	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○			○	黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ・指頭	ハケ・ナデ・指頭		
74	Ⅲ	3	甕		底部	○	○	○			○	黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
75	Ⅲ	3	甕		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
76	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○	○			黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ		
77	Ⅲ	3	甕		底部	○	○	○	○		○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
78	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○				明赤褐色	灰褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
79	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○	○			黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
80	Ⅲ	2	甕		底部	○	○	○			○	黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
81	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ナデ	ナデ・指頭	底径10.4cm	
	2住	6																
82	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○		○	○	明黄褐色	明黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	底径12.0cm	
	3住	2																
83	Ⅲ	2	甕		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	底径8.5cm	
84	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		スス
85	2住	1	甕		底部	○	○	○			○	明赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ・ケズリ 指頭	ハケ・ナデ	底径9.7cm	
86	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○	○		○	明黄褐色	明黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		

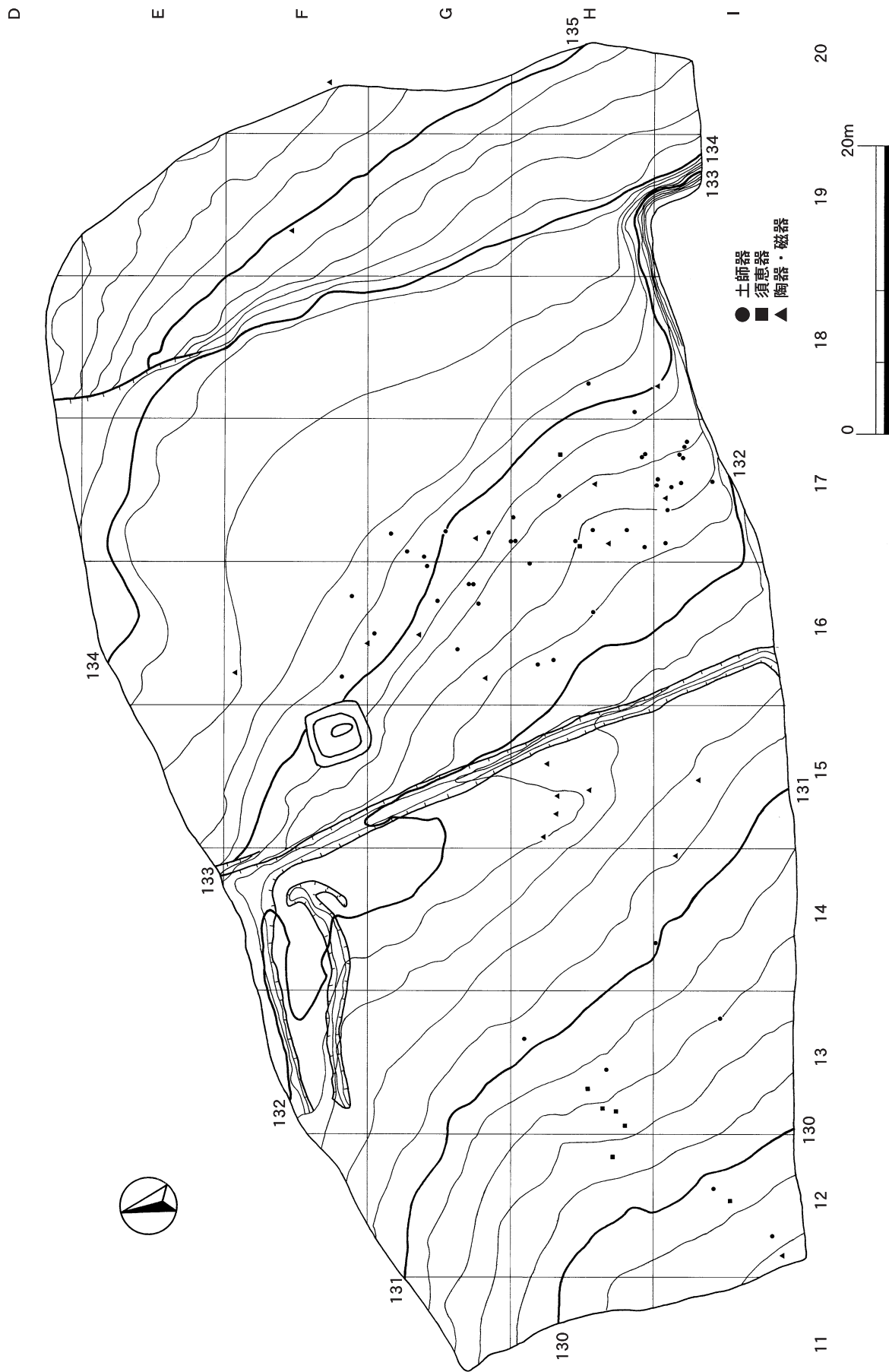
番号	層	破片 点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石 英	長 石	輝 石	角 閃 石	赤 色 粒	石 粒							
87	2 住	1	甕		底部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
88	Ⅲ	4	甕		底部	○	○	○				明灰黄褐色	明灰黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ・指頭		
89	Ⅲ	3	甕		底部	○	○	○	○	○	○	明赤褐色	明黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	底径7.9cm	
90	Ⅲ	1	甕		底部	○	○	○	○	○	○	明黄褐色	明黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
91	Ⅲ	3	甕		底部	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
92	Ⅲ	20	壺	I	完全 復元品	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径13.7cm 胴部径22.8cm 器高35.5cm	
	2 住	10																
93	Ⅲ	2	壺	I	口縁部	○	○	○		○		明燈色	明燈色	良好	ナデ	ナデ	口径16.9cm	
94	Ⅲ	3	壺	I	口縁部 ・頸部	○	○	○	○	○		赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	口径14.3cm	
	1 住	3																
95	Ⅲ	3	壺	I	口縁部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径12.4cm	
96	2 住	5	壺	I	口縁部	○	○	○		○	○	明黒褐色	明黒褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
97	Ⅲ	79	壺	I	口縁部	○	○	○				明褐色	明褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径14.5cm 胴部径25.2cm 器高38.8cm	
	2 住	2																
	1 土 坑	1																
98	Ⅲ	47	壺	I	口縁部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径14.0cm 胴部径29.8cm	
	2 住	1																
99	Ⅲ	22	壺	I	口縁部	○	○	○				赤褐色	灰褐色	良好	ハケ・ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ	口径11.1cm 胴部径23.2cm 器高35.7cm	
	1 住	14																
100	Ⅲ	2	壺	I	口縁部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径14.9cm	
101	Ⅲ	13	壺	I	口縁部	○	○	○	○	○	○	明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	口径17.7cm	
102	Ⅲ	11	壺	I	口縁部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径12.8cm 胴部径23.4cm	
103	Ⅲ	7	壺	Ⅱ	口縁部 ・胴部	○	○	○				明茶褐色	明茶褐色	良好	ナデ	ナデ	口径12.7cm 胴部径28.2cm	
	1 住	5																
104	Ⅲ	55	壺	Ⅱ	口縁部 ・胴部	○	○	○	○	○	○	明赤褐色	明灰褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	口径10.8cm 胴部径24.0cm	
	2 住	3																
	3 住	2																
105	Ⅲ	28	壺	Ⅱ	口縁部 ・胴部	○	○	○			○	茶褐色	茶褐色	良好	不明・剥落激しい	ハケ・ナデ・指頭	口径11.1cm	
106	Ⅲ	17	壺		口縁部	○	○	○		○	◎	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径14.5cm 胴部径16.0cm	
	1 住	2																
	2 住	1																
107	Ⅲ	6	壺		完全 復元品	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ・指頭	口径6.5cm 胴部径11.4cm 器高10cm (推定)	

番号	層	破片 点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石 英	長 石	輝 石	角 閃 石	赤 色 粒	石 粒							
108	Ⅲ	8	壺		肩部	○	○	○		○	○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
109	Ⅲ	22	壺		肩部・ 胴部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ナデ・指頭	胴部径22.8cm	
	2住	1																
110	Ⅲ	5	壺		肩部・ 胴部	○	○	○	○	○	○	黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	胴部径27.4cm	
	2住	7																
111	Ⅲ	1	壺		肩部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
112	Ⅲ	2	壺		肩部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
113	Ⅲ	35	壺		肩部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	胴部径28.2cm	
	2住	6																
114	Ⅲ	9	壺		胴部	○	○	○				明赤褐色	明赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	胴部径26.4cm	
	2住	1																
115	Ⅲ	2	壺		胴部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
116	Ⅲ	1	壺		胴部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
117	Ⅲ	1	壺		胴部	○	○	○		○		赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
118	Ⅲ	1	壺		胴部	○	○	○				暗灰褐色	暗灰褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
119	Ⅲ	2	壺		胴部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ・指頭	胴部径21.0cm	スス
	2住	7																
120	Ⅲ	11	壺		胴部から 底部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	胴部径22.5cm	
	2住	4																
121	Ⅲ	18	壺		胴部から 底部	○	○	○			○	赤褐色	灰褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
122	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
123	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
124	Ⅲ	11	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
	2住	1																
125	Ⅲ	3	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
126	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
	1土 坑	1																
127	Ⅲ	3	壺		底部	○	○	○		○		明黄褐色	明黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
	1住	2																
128	Ⅲ	6	壺		底部	○	○	○				赤褐色	暗赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
129	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
130	Ⅲ	1	壺		底部	○	○	○			○	黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		

番号	層	破片 点数	器種	類	部位	胎土						外面色調	内面色調	焼成	外面調整	内面調整	法量	備考
						石 英	長 石	輝 石	角 閃 石	赤 色 粒	石 粒							
131	Ⅲ	1	壺		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
132	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭	底径4.2cm	
133	Ⅲ	5	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭		
134	Ⅲ	2	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
135	Ⅲ	9	壺		底部	○	○	○				赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ヘラナデ・ナデ		
136	Ⅲ	8	壺		底部	○	○	○			○	赤褐色	赤褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		絵画 土器
	2住	12																
137	2住	3	鉢		完全品	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径14.0cm 底径4.0cm 器高9.3cm	
138	Ⅲ	9	鉢		胴部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ヘラナデ・ナデ	胴部径19.2cm	
	1住	1																
139	Ⅲ	12	鉢		口縁部から胴部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	口径13.6cm	
140	Ⅲ	1	鉢		底部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	底径8.2cm	
	2住	1																
141	Ⅲ	1	鉢		口縁部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
142	Ⅲ	1	鉢		口縁部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
143	Ⅲ	8	鉢		底部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
	2住																	
144	Ⅲ	1	鉢		底部	○	○	○				明茶褐色	明茶褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	底径10.5cm	
145	Ⅲ	2	蓋		口縁部	○	○	○			○	明赤褐色	明赤褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
146	Ⅲ	13	ジョッキ		口縁部から底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
147	Ⅲ	5	埴		口縁部	○	○	○		○		赤色顔料	赤色顔料	良好	ヘラミガキ・ナデ	ナデ・指頭		
	2住	4																
148	2住	1			底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ	底径6.5cm	
149	Ⅲ	10	高坏		坏部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ナデ	口径23.2cm	
150	Ⅲ	5	高坏		坏部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ		
151	Ⅲ	3	高坏		坏部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ・ミガキ	口径29.0cm	
152	Ⅲ	5	高坏		坏部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ・ミガキ	口径30.7cm	暗文
153	Ⅲ	4	高坏		坏部	○	○	○				茶褐色	茶褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ・ミガキ		
154	Ⅲ	4	高坏		坏部	○	○	○				明茶褐色	明茶褐色	良好	ナデ	ハケ・ナデ	口径29.0cm	
155	Ⅲ	4	高坏		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ケズリ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
156	Ⅲ	6	高坏		底部	○	○	○				燈色	燈色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	底径11.0cm	
157	Ⅲ	1	高坏		底部	○	○	○				黄褐色	黄褐色	良好	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		



第35図 古代以降の遺構 (1/ 400)



第36図 古代以降の遺物出土状況（1／400）

第5節 古代以降の調査

古代以降の調査では、方形周溝墓1基が少量の遺物と共に検出された。また、方形周溝墓の周溝埋土からは、軽石製石製品が出土した。

1 遺構

(1) 方形周溝墓

方形周溝墓（第37図）

F-15区より検出した。周溝の幅は約0.6m～0.8mで、検出面よりの深さは約0.2mであった。

周溝は外側にやや膨らみを持った方形を呈し、外周が約4m×4.2m、内周が約2.8m×3m程度である。周溝の内側には長軸約1.4m×短軸約0.8mの長楕円形の土坑が設けられているが、周溝内側の中心より南側に少しずれている。周溝からの出土遺物は古墳時代のものが多く、周溝埋土がⅢ層に類似するが、周溝と周溝内側の土坑埋土の上部がⅡ層に近く、これまでの検出例など考慮し中世に位置づける。

また、周溝の埋土からは、軽石製の石塔片が出土した。

方形周溝墓出土遺物（第37図 160）

方形周溝墓からの出土遺物は、主に周溝から出土した。先述したように古墳時代のものが多かったが、小片であり図化できるものがなかった。また、周溝の埋土からは、軽石製の石塔片が1片出土した。

軽石製石製品（第37図 160）

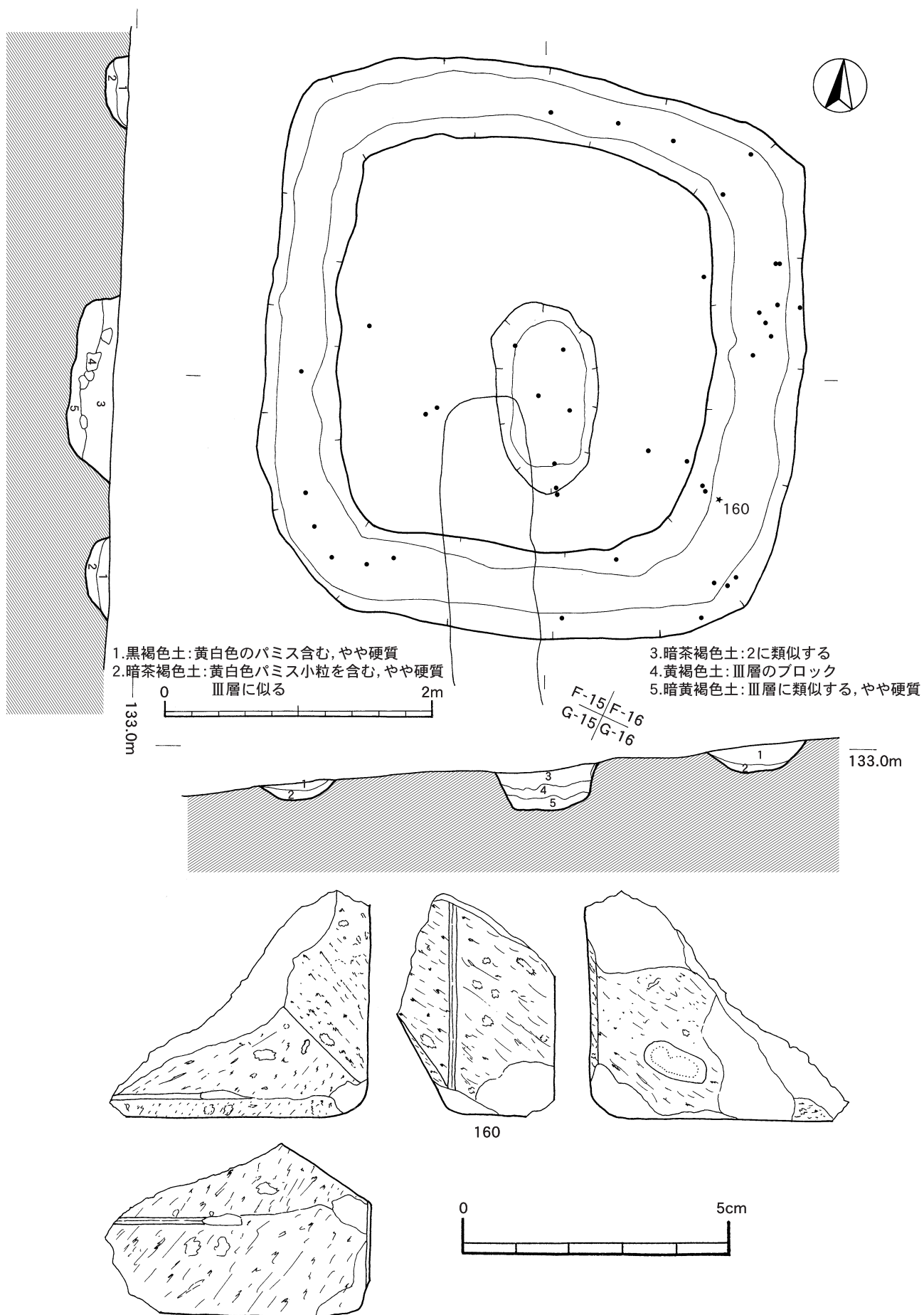
周溝埋土中より出土した。縦4.2cm×横4.9cm×高さ2.5cmが残存している。明瞭な稜線を持つ5面を観察でき、よく擦られている。底面にはノミの痕跡と思われる窪みが一か所ある。幅0.5cm×長さ1.2cmを測り、1mm程掘り込まれている。側面には反りとの稜線の箇所には細い沈線が見られる。制作時に反りと側面の稜線が不揃いになることを避けるために入れた目印（設計図）であろう。これらから①ノミを使い粗加工をする（角柱状か？）。②側面を整え印を付屋根の反りを整える。③全体の形を整える。という製作工程がうかがえる。

溝状遺構1

調査区中央にL字形に検出された。現在の土地の区画に沿うようであり土地の境界を示すものと思われる。茶栽培や低木などが畑の周囲を巡っていたためこれらの根が侵入してくるのを防ぐために掘られたのであろう。

溝状遺構2

幅1.2m×長さ16m×深さ0.2mを測る。時期は不詳である。溝状遺構1に平行しそれに伴うものであるように見えるが、山下堀頭遺跡・近接のフミカキ遺跡周辺には古道が走っておりこれとの関連や、方形周溝墓へと向かっていることなどからこれらと関連する古道の一部の可能性も考える必要がある。



第37図 方形周溝墓・出土遺物

2 遺物

H-17区を中心に土師器・須恵器などの遺物が少量出土した。土師器は、甕形土器を中心に埴、赤色土器が出土し、須恵器は甕と思われる破片が数点出土したのみである。赤色土器は2、3点の出土である。その他青磁・染付・近世陶器などが出土した。

(1) 土師器

甕形土器（第38図161～165）

161・162は、口縁部下の胴部が直立し、口縁部が緩やかに外反する器形である。内面は、口縁部が外反するところで斜位のヘラケズリが施され、明瞭な稜線を持つ。口縁部が横ナデ、胴部外面がハケ目調整によって調整される。163も胴部が直立し、口縁部が緩やかに外反する器形であるが、胴部の内面・外面共にヘラケズリによって調整されている点が161・162と異なる。内面は、口縁部が外反するところで斜位のヘラケズリが施され、明瞭な稜線を持つ。外面は、口縁部下から縦位に上から下方向にヘラケズリが施されている。164は、底部から胴部が緩やかに立ち上がり、口縁部が胴部と変わらない厚さで、「く」の字状を呈する器形である。内面は屈曲部のやや下から縦位のヘラケズリが施されている。その他の部位の器面調整はナデ調整である。165は、若干胴部が膨らむ器形が推測される。最大径は口縁部である。口縁部は強く外反し、内面は屈曲部でヘラケズリが施されている。その他の器面調整は、ナデ調整である。

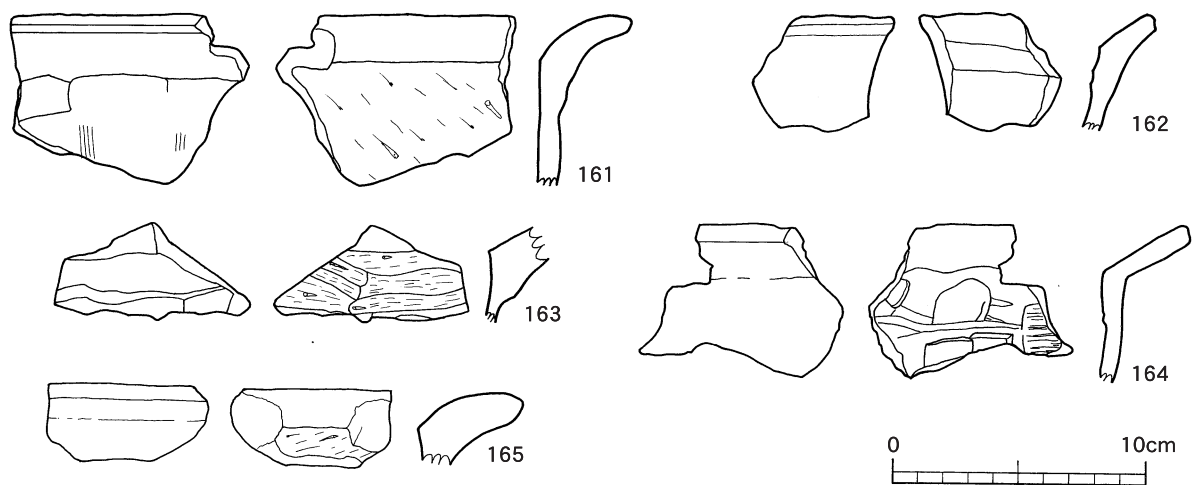
埴形土器（第39図166～176）

166・167は、底部から直口する器形である。166は、復元口径15.2cmを測る。内外面共にロクロ成形がなされている。胎土もきめ細かい。167は、内外面共にロクロ成形がなされている。胎土もきめ細かい。168は底部から若干外反しながら口縁部へ至る器形である。166・167が器厚が整えられているのに対し、168は対し、169・170は、埴形土器の底部・底部付近である。内面が他と異なり赤色を呈する。赤色の成分は電子顕微鏡の観察では特に顔料の塗布の可能性を示す値は得られなかった（第40図参照）。しかし、顔料以外の化粧土の塗布も考えられる。近接するフミカキ遺跡でもごく少数であるが鉄分由来の顔料の塗られた埴形土器が出土しており、山下堀頭遺跡の所在する松元町の数遺跡からも同様の埴形土器や内面が黒色の埴形土器の出土が知られており、注意を要する。171は高台を有する埴形土器の底部である。172～176は、埴形もしくは皿形土器の底部である。172は、底部に若干の張り出しを持ち内湾して立ち上がる器形である。底径7.2cmを測り、底部外面はヘラ状の工具で調整されている。175・176が糸切り底、173・174がヘラ調整の底である。

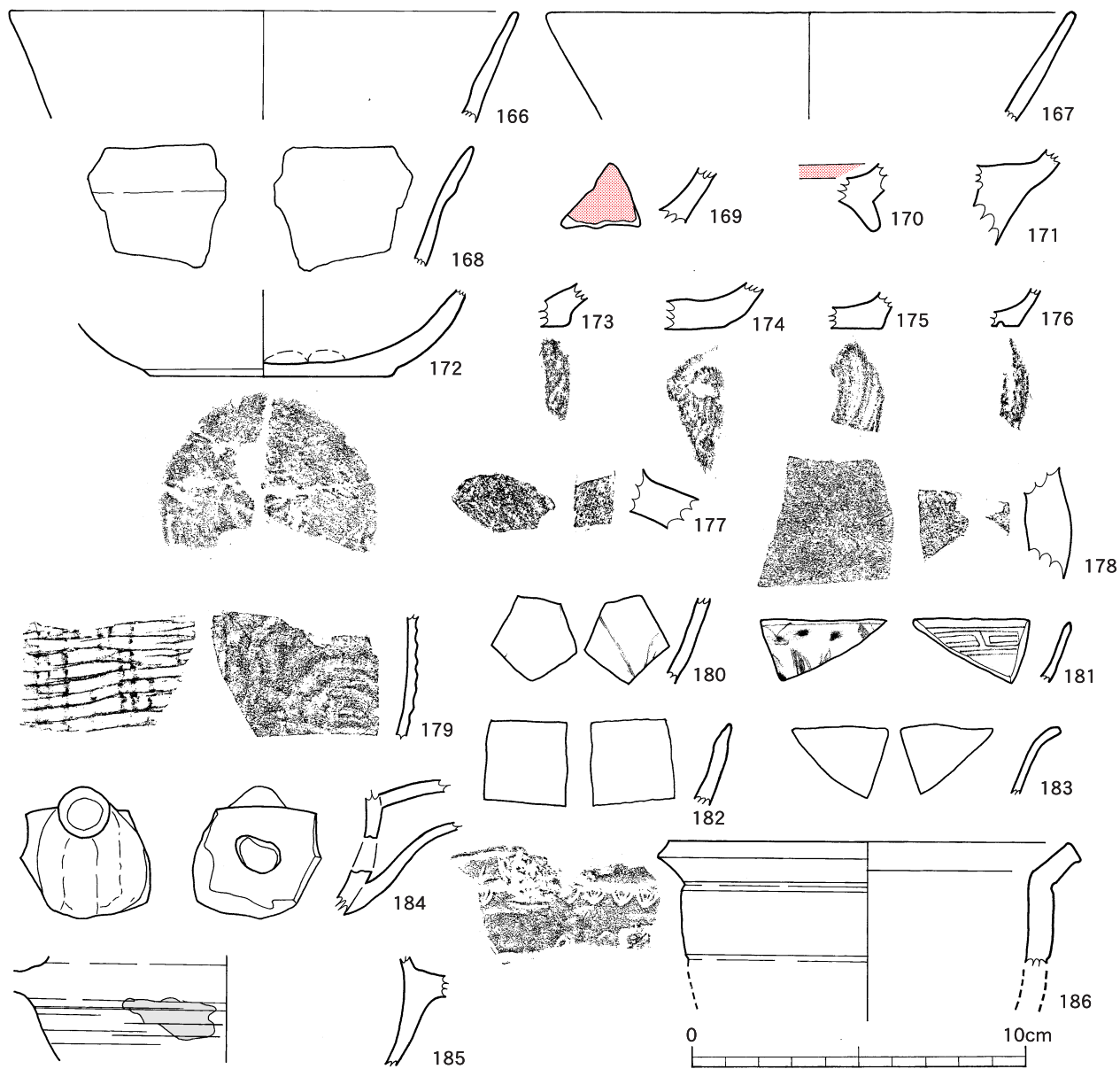
(2) 須恵器

須恵器は、約10点の出土である。器種や部位の分かるものは少なく4点を掲載する。

177・178・179は、甕形土器であると思われる。177は肩部付近と思われるが、他は部位等分らない。178には布の圧痕のようなものが見られ、焼成時に焼けぶくれが生じている。179は、部位は分からないが外面に格子状の叩き目が施され、内面は青海波文が施されている。また器厚が2～5mmと薄い。



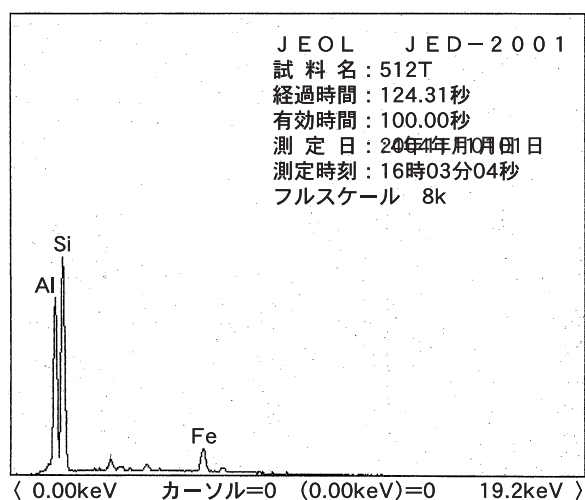
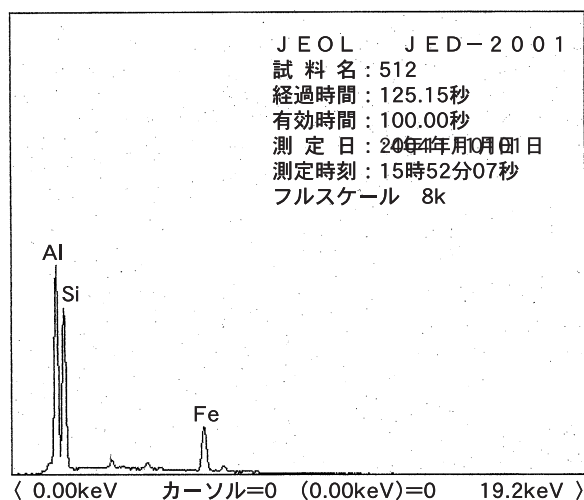
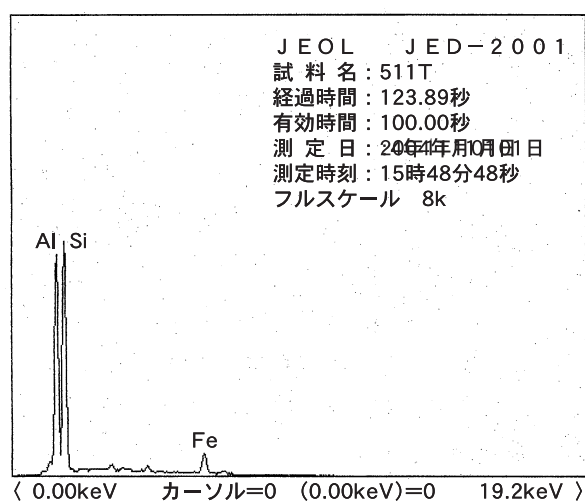
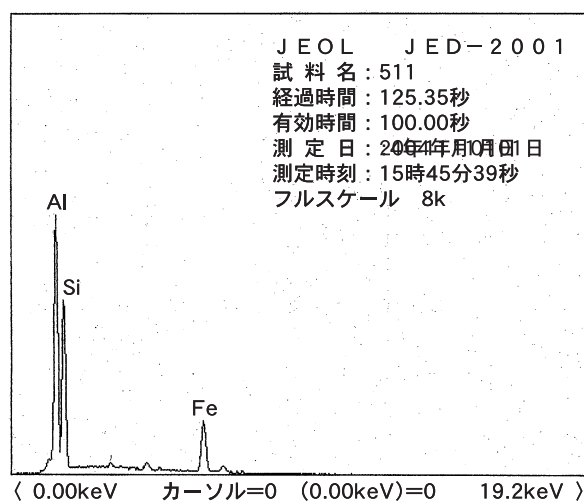
第38図 甕形土器



第39図 古代以降の遺物

(3) 陶磁器

その他の遺物は少量の出土があったのみであり、180が青磁、181が染付、182が陶器、183が白磁端反り、184・185が薩摩焼の急須である。186は火燭と思われる。復元口径11.8cmを測り、緩やかに内弯する胴部で口縁部が「く」の字状を呈する。口唇端部は平坦におさめられる。屈曲部とやや下に1条ずつ沈線を巡らし、その2沈線の間に向きと上向きのスタンプを押している。また菊花状のスタンプも押されている。口縁部外面に刻みがあり、そのまわりに不定形に刻みが施されることからここに何か付していたものが剥がれたものと思われる。



※試料名: ○○○は赤色部分, 試料名: ○○○Tは胎土部分

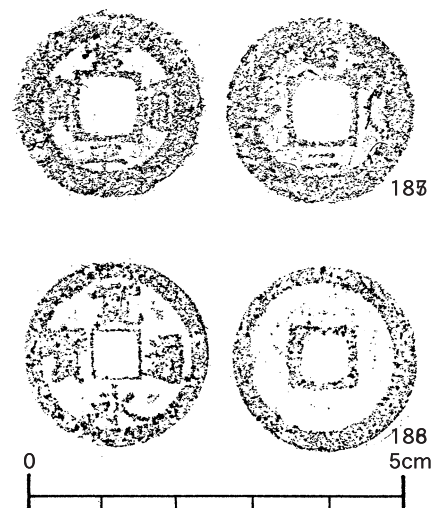
第40図 土師器壺赤色顔料スペクトル

(4) 古銭

187と188の2点が検出された。187は常平通宝，188は寛永通宝である。187は背面に「〇二」と書かれている。

(5) 軽石製品

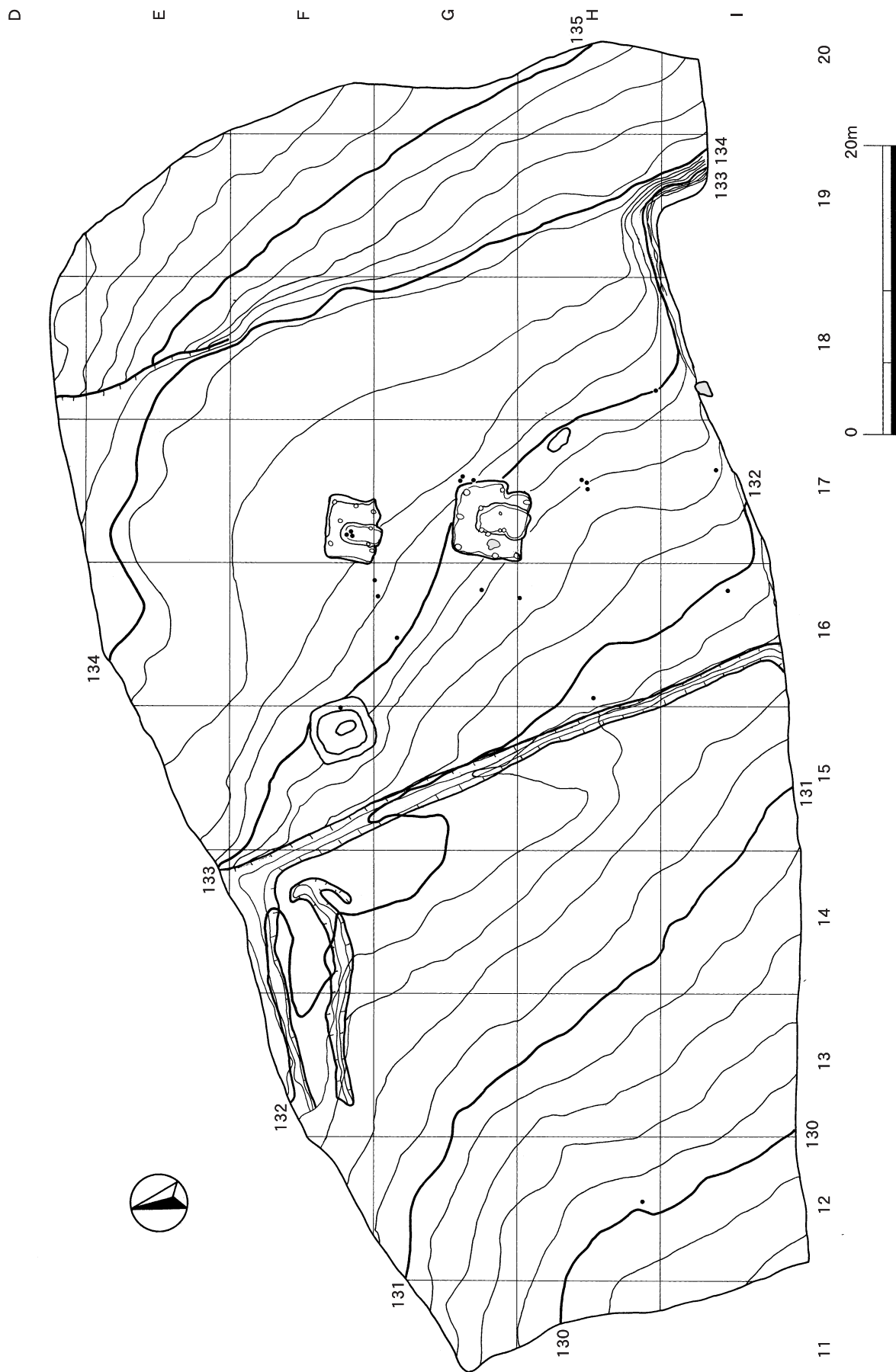
包含層中より多くの軽石が検出されたが，どれも加工をした痕跡はみられなかったため，出土位置図と写真を掲載する。



第41図 古銭

第6表 古代以降の遺物観察表

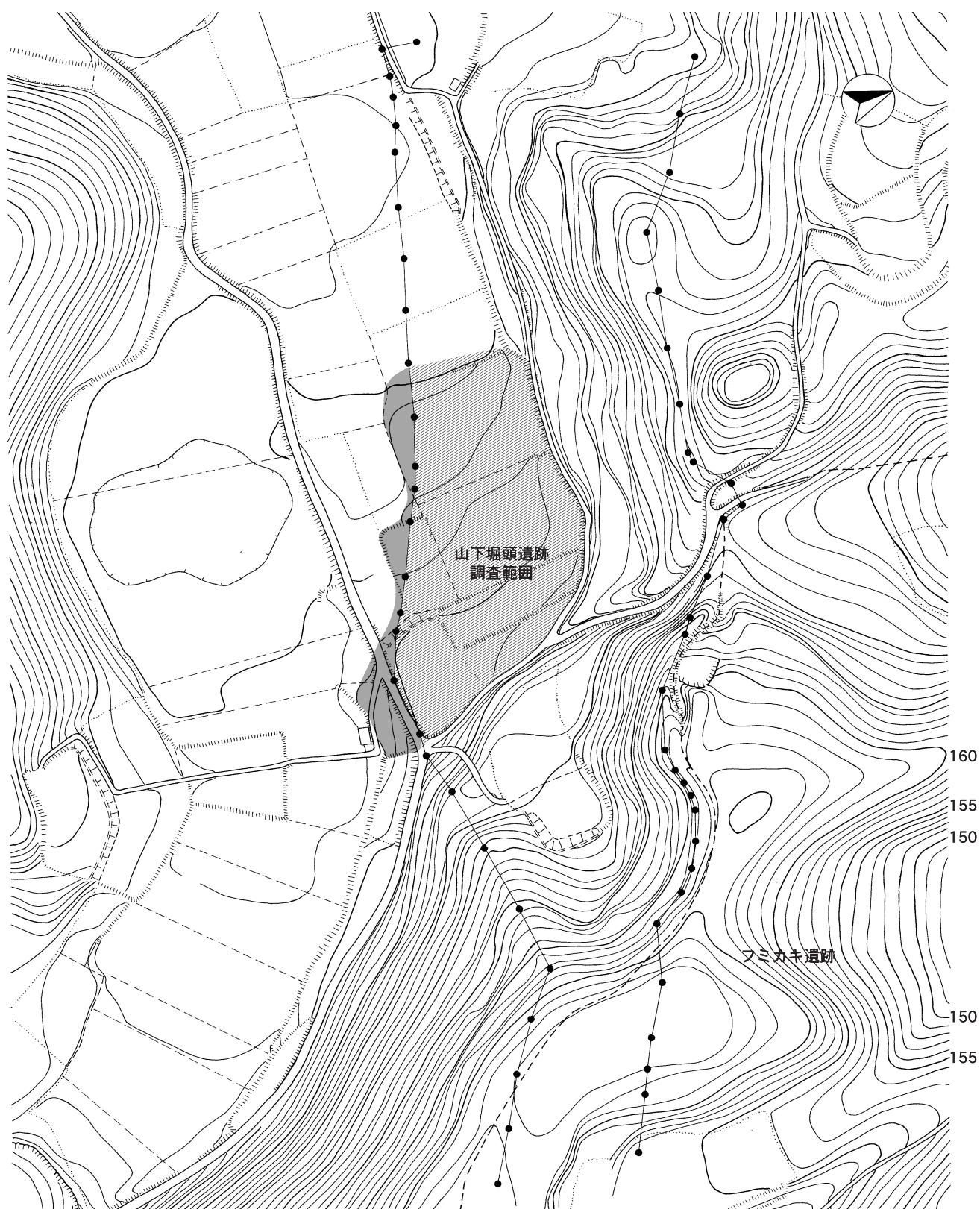
番号	層	器種	部位	焼成	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	文様	備考
161	I	土師器甕	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
162	II	土師器甕	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
163	II	土師器甕	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
164	II	土師器甕	胴部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
165	II	土師器甕	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
166	II	土師器碗	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
167	II	土師器碗	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
168	II	土師器碗	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
169	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	赤色	黄褐色	ナデ	ナデ		
170	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	赤色	黄褐色	ナデ	ナデ		
171	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
172	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
173	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
174	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
175	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
176	II	土師器碗	底部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
177	II	須恵器	—	堅緻	石英，長石，輝石，赤色石粒	灰褐色	灰褐色	タタキ	タタキ		自然釉
178	II	須恵器	—	堅緻	石英，長石，輝石，赤色石粒	灰褐色	灰褐色	タタキ	タタキ		自然釉
179	II	須恵器	—	堅緻	石英，長石，輝石，赤色石粒	灰褐色	灰褐色	タタキ	タタキ		自然釉
180	I	染付	口縁部	堅緻	—			—	—		
181	I	青磁	口縁部	堅緻	—			—	—		
182	I	白磁	口縁部	堅緻	—			—	—		
183	I	白磁	口縁部	堅緻	—			—	—		
184	I	薩摩焼	注口	堅緻	石英，長石，輝石，赤色石粒	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ		
185	I	薩摩焼	胴部	堅緻	石英，長石，輝石，赤色石粒	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	スス	
186	I	無釉陶器	口縁部	良好	石英，長石，輝石，赤色石粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	スタンプ沈線	



第42図 軽石出土状況図 (1/ 400)

第6節 山下堀頭遺跡の残存範囲

今回の発掘調査で山下堀頭遺跡の遺物包含層の残存する範囲のほとんどを調査したが、調査区の北側・南側に若干の遺物包含層が残存している。



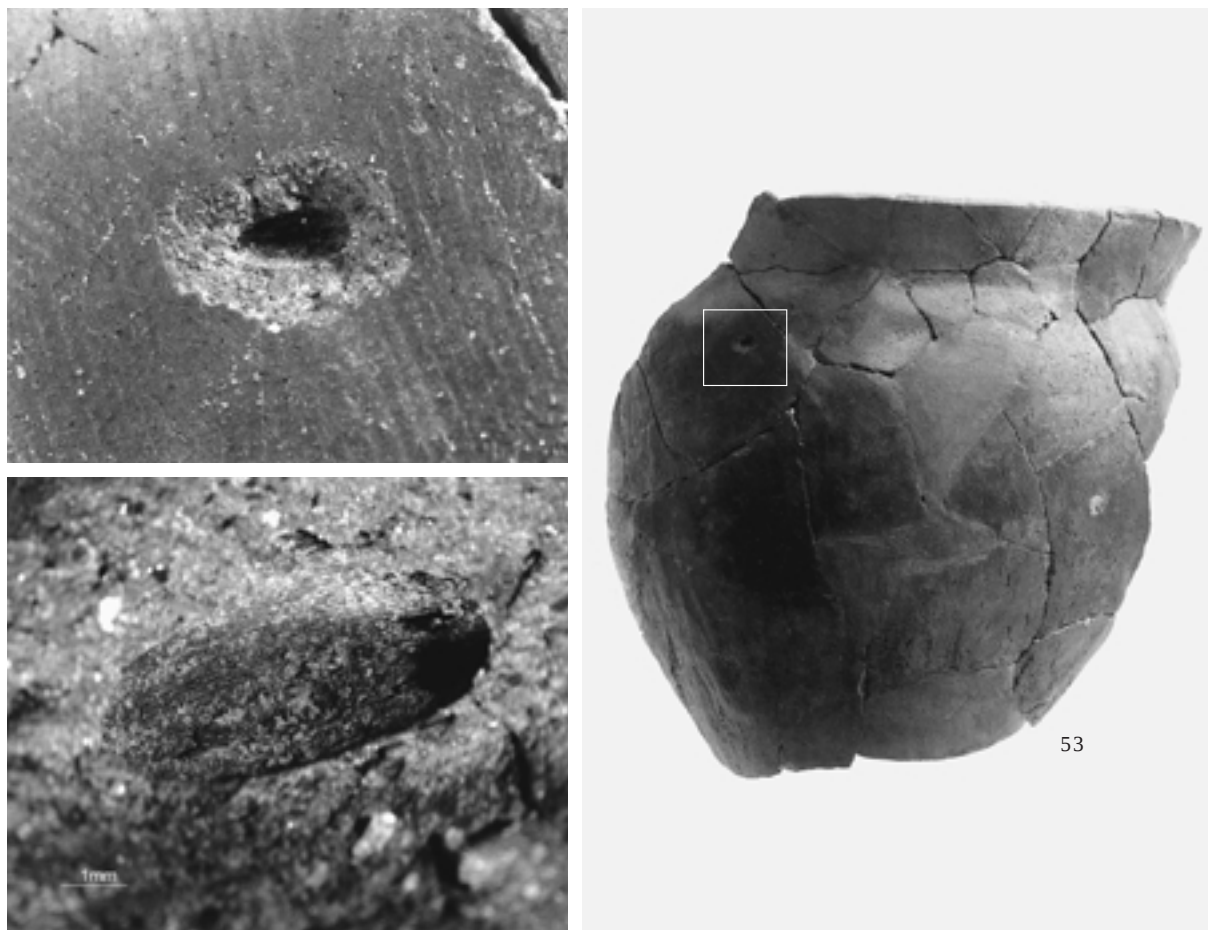
第43図 山下堀頭遺跡残存範囲（1／2,000）

第V章 科学分析

植物圧痕

第IV章で記述したが、53の成川式土器の口縁部下外面にイネの籾圧痕が観察された。南九州において弥生時代・古墳時代の籾圧痕の着いた土器の発見はさほど多くない。山下堀頭遺跡例が直にイネ耕作と結びつくわけではなく、住居跡の埋土の水洗作業による炭化種子の発見例の蓄積やさらなる籾圧痕土器の発見の増加を待たなければイネ耕作については論じられないと考える。その他雑穀についても同様である。今後は住居跡の埋土の水洗作業を怠らないこと、土器表面に気を配ることが更に要求される。

更に、今回山下堀頭遺跡で発見された籾圧痕は、土器胎土内にイネ籾があり、何らかの理由により土器表面が割れて姿を現したものである。当センター所蔵の籾圧痕土器の中には同様なものも少なくなく顕在化していないものを探すための手だてもイネ耕作を論じる際には必要となるであろう。



第44図 籾圧痕

第Ⅵ章 発掘調査のまとめ

《縄文時代》

縄文時代の調査では散在的に少量の遺物が出土したのみであった。近接するフミカキ遺跡と対比してみると、フミカキ遺跡では縄文時代早期の遺構・遺物が出土したが、山下堀頭遺跡では皆無であった。アカホヤ火山灰降灰以降では、フミカキ遺跡が曾畑式土器、轟式土器、縄文時代晩期の精製浅鉢・組織痕土器、刻目突帯文土器が出土し、山下堀頭遺跡では曾畑式土器、出水式土器、西平式土器等が出土している。2遺跡共に石器の出土は、石鏃が数点と剥片が少量出土したのみで土坑や石器製作跡などの遺構は検出されなかった。

出土した遺物が少量である原因として、アカホヤ火山灰降灰後フミカキ遺跡・山下堀頭遺跡での生活期間が短くキャンプ的で少しの作業しか行っていないこと、遺物が調査区外へ流出したこと、更に山下堀頭遺跡については縄文時代の出土遺物のほとんどがすぐ隣に位置するフミカキ遺跡からの流入であることなどいくつかの可能性が考えられる。

《弥生時代・古墳時代》

弥生時代・古墳時代の調査では竪穴住居3軒・土坑1基と共に多くの遺物が発見された。

その中で、甕形土器では底部の状況から土器製作の技法を見て取ることができた。突帯に目を向けるとⅠ類には突帯を付すものは見られず、Ⅱ類についてもわずかである。更に刻みを施すものは、63の1個体のみであり、これは胎土色調が他の個体と異なっている。ススの付いたものは少なかったが、これまでいわれてきたものと同じく胴部下半・脚部に着くものは少ない。ススの着く（着くことが予想される）箇所を薄く仕上げ、ススの着かない（着くことがなかったであろう）箇所は様に器壁が厚い傾向にある。これらは甕形土器の使い方・火のかけ方を反映するものと思われる。住居内の焼土には穴を掘った痕跡がみられず、竈の痕跡もない。おそらく住居の床面に直に甕形土器を置き、脚の周りで火を焚き土器の内容物を加熱したのだろう。

また、壺形土器の底部から胴部の成形技法も甕形土器と通ずるものであったものと思われる。しかし、壺形土器はⅠ類・Ⅱ類共に刻目突帯がみられ、甕形土器とは異なっている。

甕形土器Ⅰ類・Ⅱ類、壺形土器Ⅰ類・Ⅱ類共に1号・2号住居から出土しており、山下堀頭遺跡の出土状況としてはⅠ類とⅡ類の間に明確な差が認められなかったが、甕形土器Ⅰ類とⅡ類の44～54、58・59が不動寺タイプと呼ばれる一群を含む中津野式土器で弥生時代後期後半から終末頃のもの、Ⅱ類の55～57、60～64が東原式土器で古墳時代初頭頃、65が辻堂原式土器と考えられる。また、32、39～41、65の甕形土器には口縁部下のくびれ部をハケ目が消える程強く指頭押圧もしくは横ナデするという他の甕形土器にみられない特徴が共通する。59もこれに近いものがある。32・39・65は2号竪穴住居跡から接合資料の一部が発見されており、弥生時代・古墳時代の遺物の出土が住居跡周辺に集中していることなどから、32、39～41、65、(59)には形態（型式）差と型式を超えた強いつながりの両方が感じられ、その他の土器を含め土器型式が順次移り変わるなか2型式の同時存在性を知る傍証となるものである。

その他、南九州で発見例の少ない鉄剣2点・絵画土器のほかに二重口縁壺・ジョッキ形土器・靱圧痕のついた土器も発見された。これらが現在あまり古墳時代の集落の発見されていない松元町から発見されたことは重要である。また靱圧痕のついた土器は、土器表面に気を配ること、顕在化していないものを探すための手だてを探ることを要求している。

近接するフミカキ遺跡との関連についてみると、フミカキ遺跡での弥生時代から古墳時代の遺物の出土が山下堀頭遺跡を見下ろす位置に集中し、更に円形の貼付文を施す壺形土器片が出土していることから、山下堀頭遺跡出土の二重口縁壺や絵画土器と関連があるのか興味深い。

先述したが1号住居跡と2号住居跡、2号住居跡と3号住居跡で遺物の接合があった。第45図にこれら住居間接合遺物の出土状況を提示した。第12図も合わせみると住居跡から東側は近現代の耕作により包含層が削られ出土遺物は少ないが、住居跡周辺に遺物が集中して出土していることは変わらないと考える。また調査区西側へゆっくりと下っており、H-11・12、I-12・13区が一番低い部分でここへ向かって遺物の集中してあるところから流れているようである。そのような出土状況のなか住居間接合遺物は1号住居跡と3号住居跡での接合はなく、遺物の出土は住居跡から南西（傾斜の上から下）へ流れ出たような状況が見られるものもある。特に絵画土器・31は特徴的である。104は住居跡からの出土遺物とH-11・12、I-12・13区からの出土遺物が接合している。

2号住居跡の埋土をみると、埋土の中央に泥質土があり住居跡が埋まりきらないうちに大量の水がそこを流れたこと、一度埋まりきったものが流れ出し窪みができたことが想起される。ここで絵画土器・31に特筆される住居跡からの出土遺物の接合関係の状況と137が2号住居跡からのみ出土し完全品に接合していることなどから考えると後者である可能性が強い。

ただし、住居跡から東側の出土状況が不明であるため住居跡東側から流れてきたものの偶然性であるものが含まれる可能性を完全に否定できない。

埴形土器は、2号住居跡から出土があったが、ジョッキ形土器・高坏形土器は住居跡からの出土はなかった。これらの出土地点は、2号住居跡周辺にまとまっている。

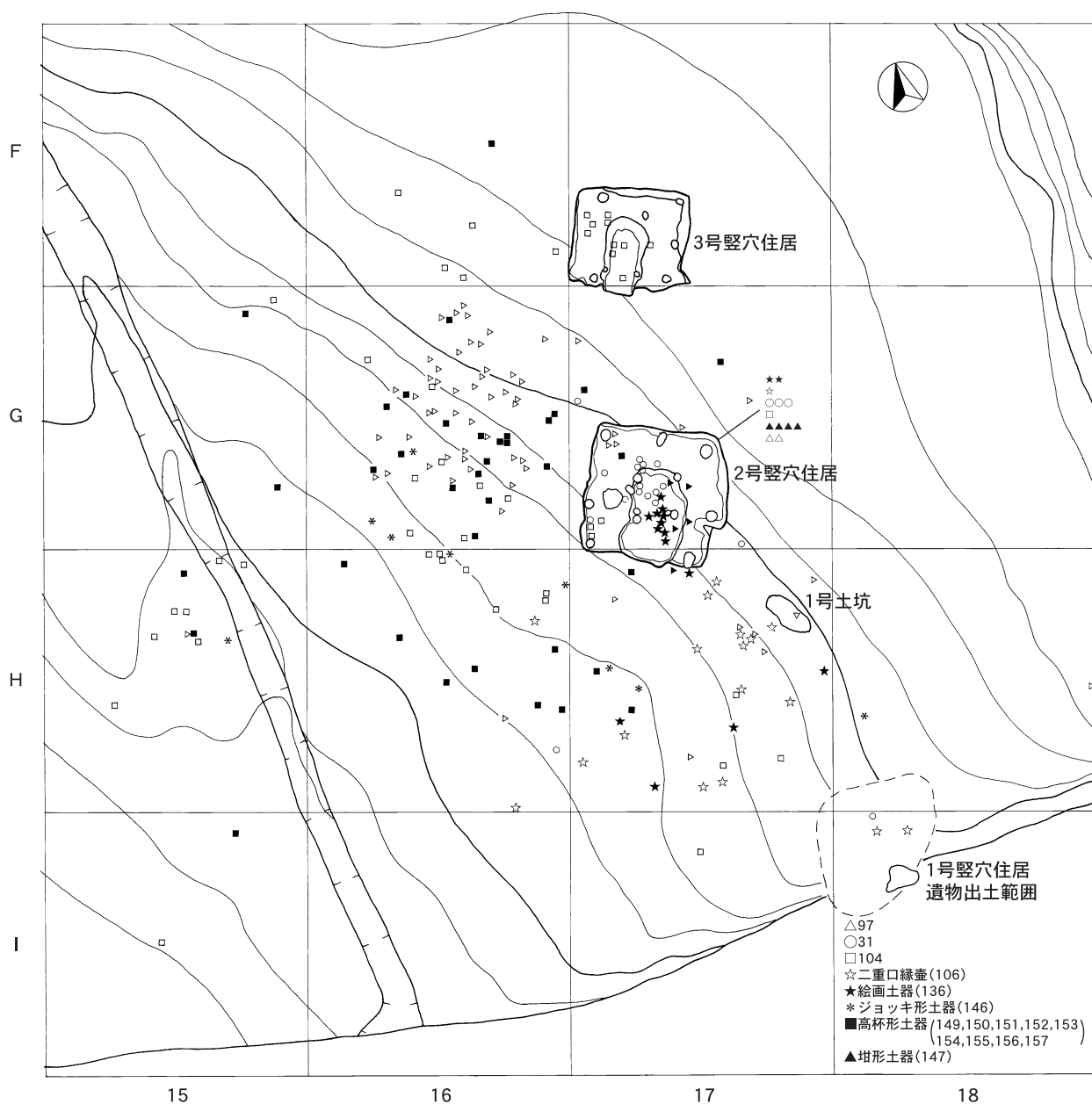
《古代》

古代の調査では、遺物の出土は少量であったが、その中に赤色土器数点があった。近接するフミカキ遺跡でも同様である。第三章遺跡の位置及び環境でも述べたが、赤色土器や墨書土器の出土について古代の主要道である伝路や官衙・郡衙・郡院・郡倉などの要地との関連を見る意見が出されており（石丸良輔『下永迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（72））、それによるとフミカキ遺跡・山下堀頭遺跡は薩摩半島の横断道が推定されている付近に位置する。

次いで、方形周溝墓についてみてみると周溝は幅60～80cm、約4m×約4.2mの隅丸方形状を呈する。主体部は縦約1.4m×横0.8m×深さ0.3mを測る楕円形状で、長軸がほぼ南北を向く。主体部埋土内にはアカホヤ火山灰の二次堆積土（Ⅲ層）のブロックがみられ、人為的に埋められたものと思われる。一方周溝は、レンズ状堆積をしており自然に埋まったものと思われる。主体部の位置は南側にずれており、円形周溝墓ではあるが福岡県干潟遺跡のものと似る。また、軽石製石製品が周溝埋土より出土した。古代・中世の周溝墓より五輪塔の出土が熊本県尾窪遺跡をはじめに西日本で数例知られており、形状などから本遺跡出土のものも五輪塔の火塔である可能性が高い。五輪塔

の火塔であるとする宗教との関連も考えられ、太田三喜氏が「中世の周溝墓」『堅田直先生古希記念論文集』の中でまとめられたものを参考に性格など考えねばならないが、県内での検出例が少なく不明である。ただ方形周溝墓の主体部の長軸の延長線上には円筒状に約10m盛り上がる箇所があり（第4・5図、第36図参照）、示唆的である。

いずれにせよ鹿児島県内で周溝墓・集石墓（火葬墓）の検出例は少なく、山がちな位置にある本遺跡でこれらが出土したことは、最近報告された小倉畑遺跡などこれまでの調査結果にない成果を上げている遺跡を含め南九州の古代・中世社会を考える上で貴重である。



第45図 遺構間接合遺物・絵画土器・ジョッキ形土器・高杯形土器・埴形土器出土位置図
(1/ 200)

写 真 图 版



上：フミカキ遺跡から見る
下：フミカキ遺跡を見る



上：1号竪穴住居遺物出土状況
下：2号竪穴住居完掘状況



2号竪穴住居跡断面



2号竪穴住居跡
遺物出土状況



2号竪穴住居跡
遺物出土状況



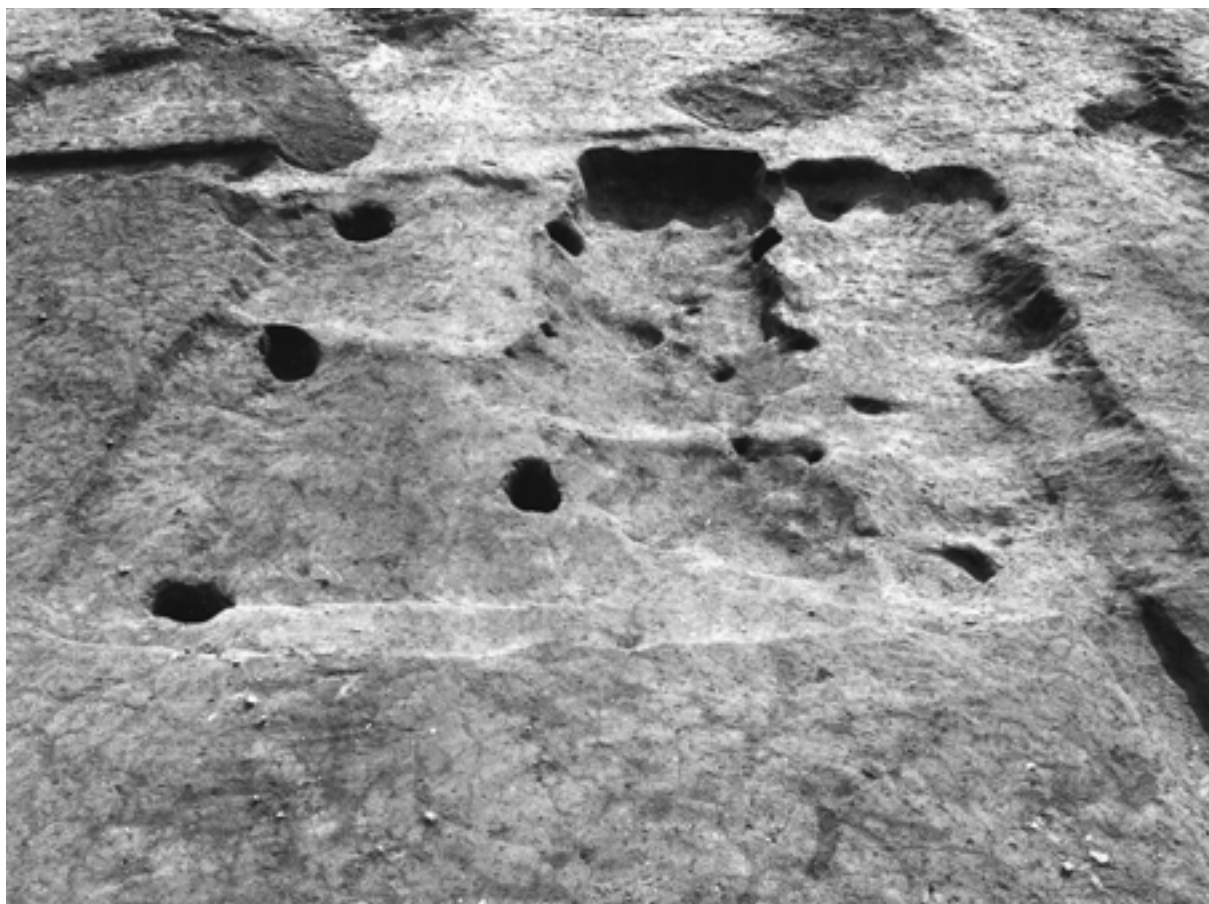
3号竪穴住居跡掘り込み
遺物出土状況



3号竪穴住居跡掘り込み
遺物出土状況



3号竪穴住居跡断面



3号竪穴住居跡完掘状況

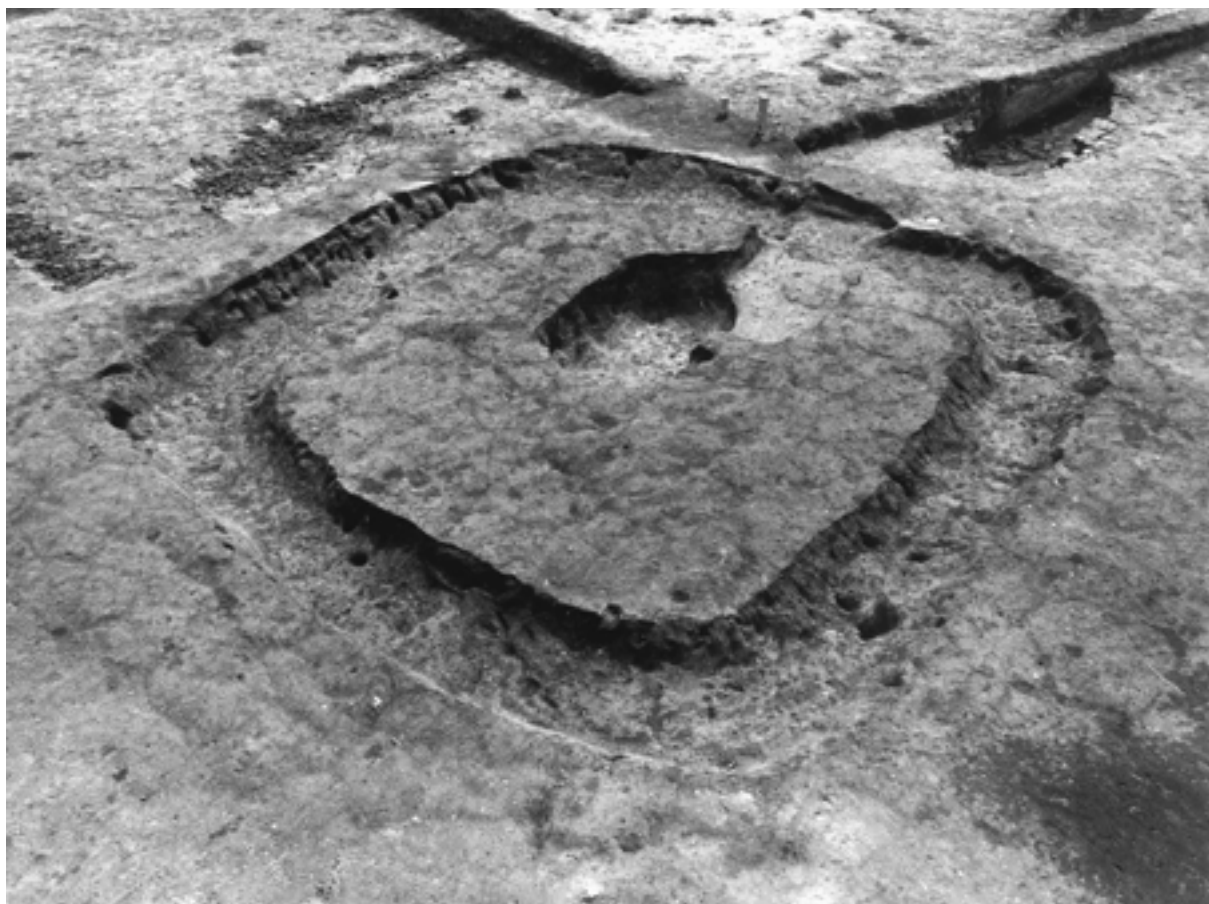


1号土坑完掘状況



作業風景

図版 6
方形周溝墓



上：完掘状況
左下：主体部断面
右下：周溝断面
右下：石製品出土状況

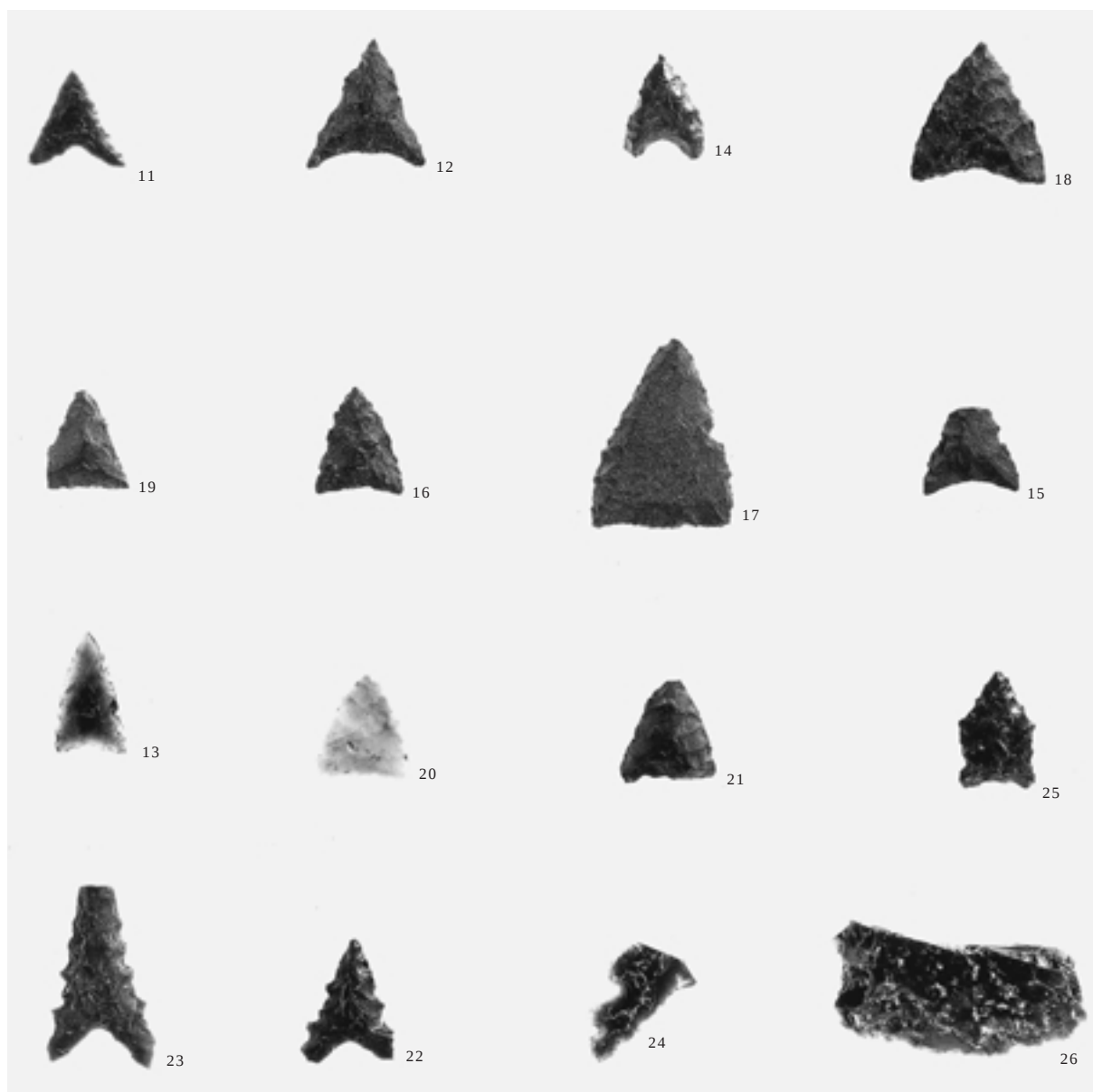


表

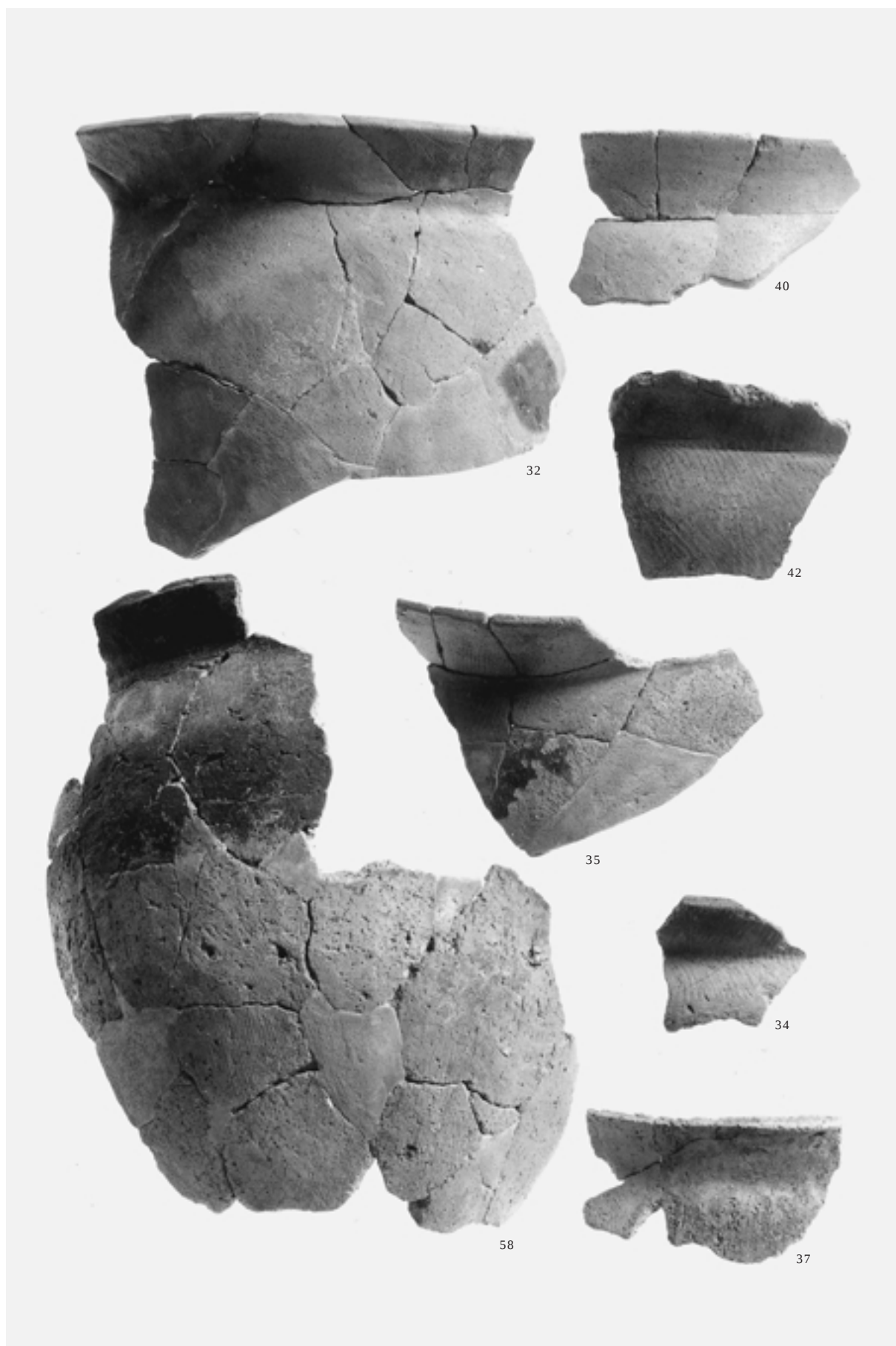


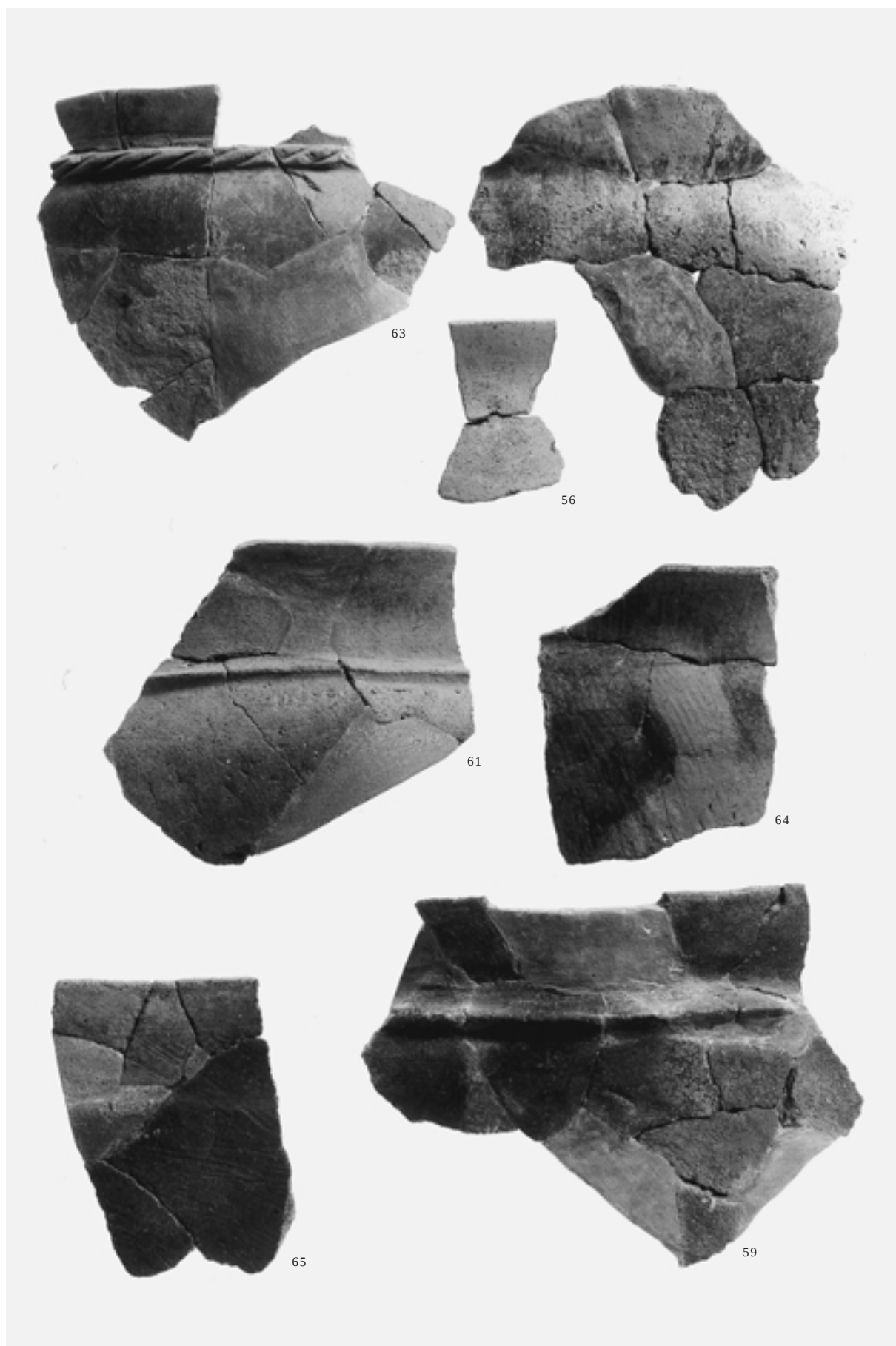
裏

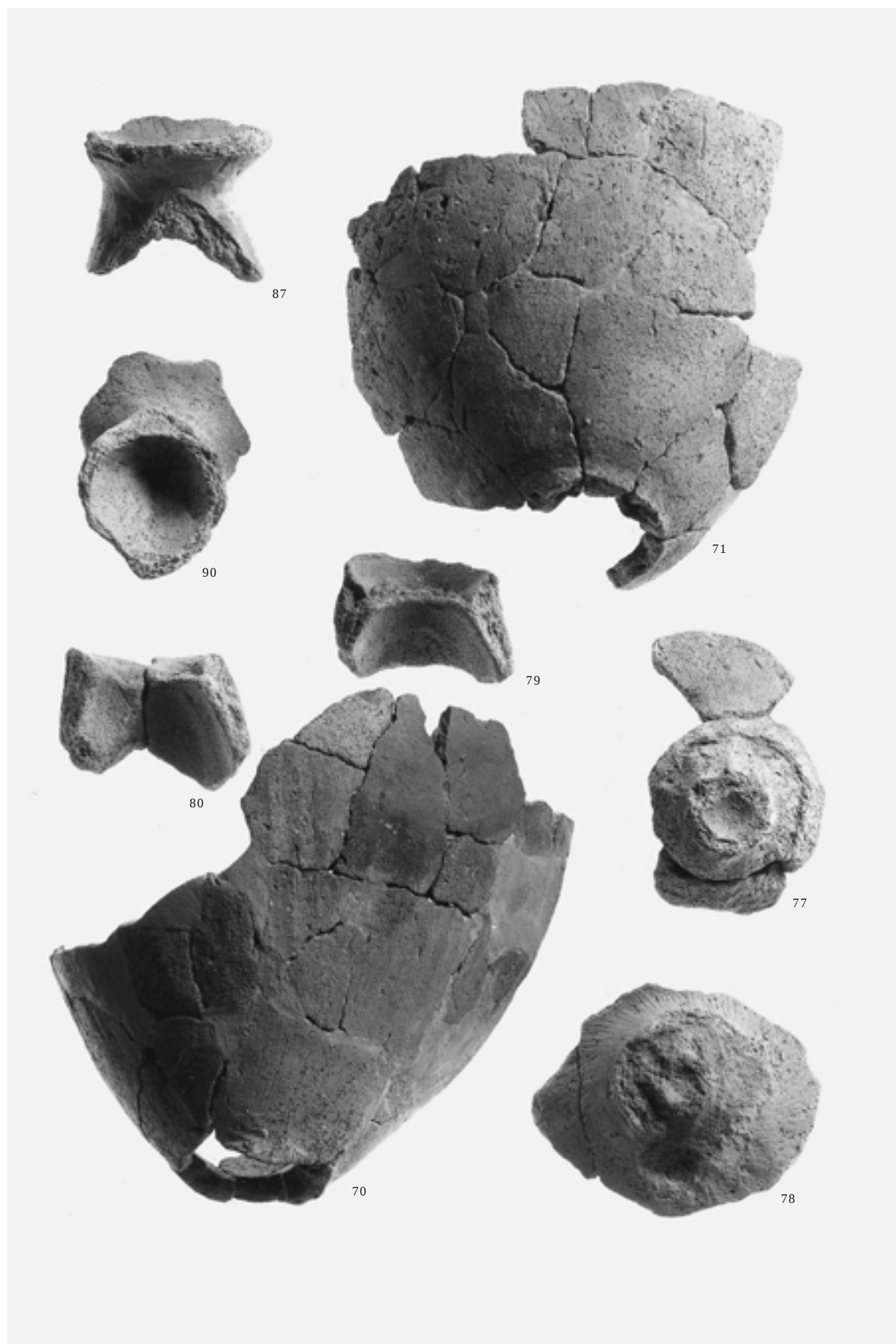
図版 8 縄文時代の石器





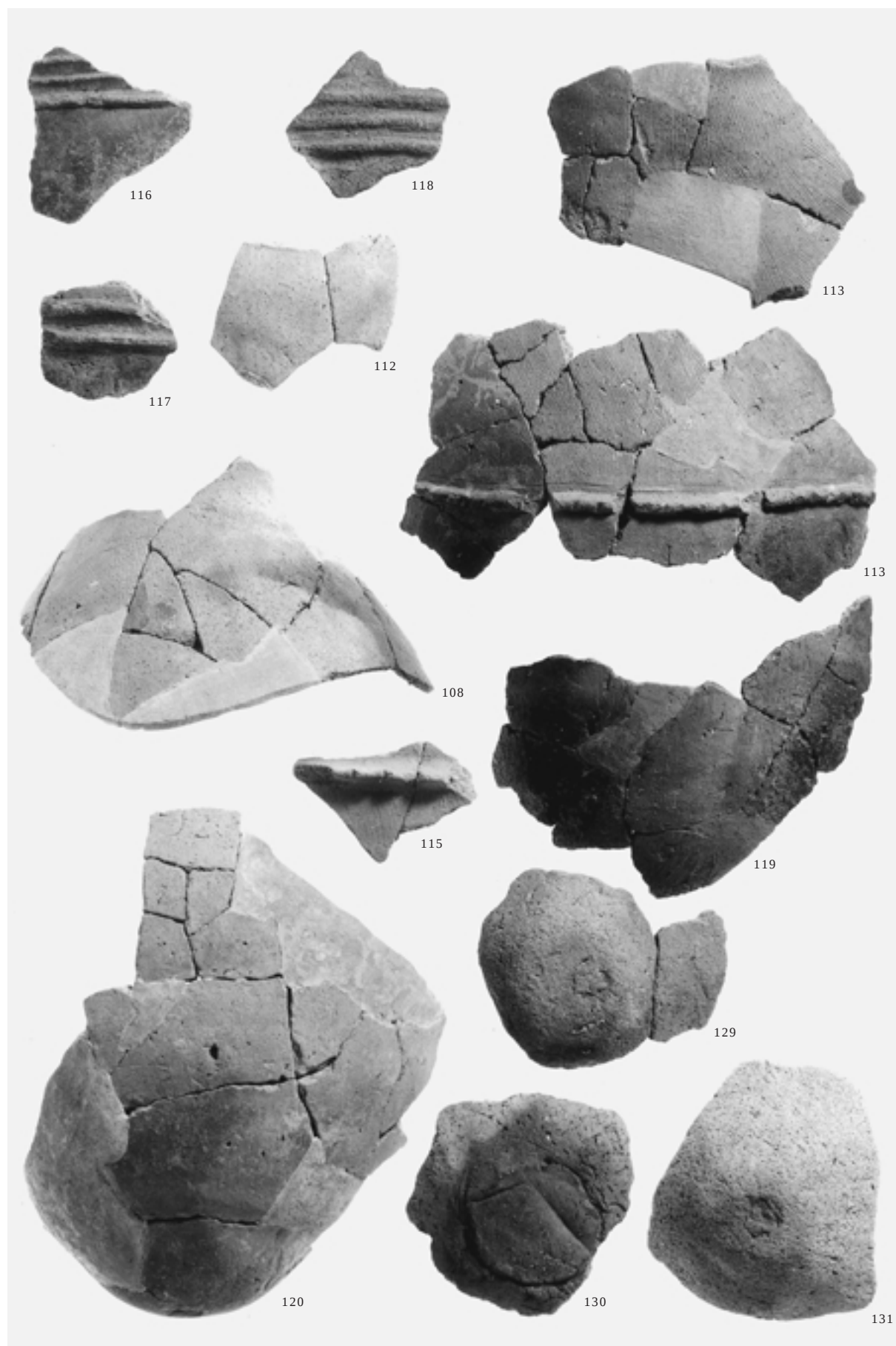


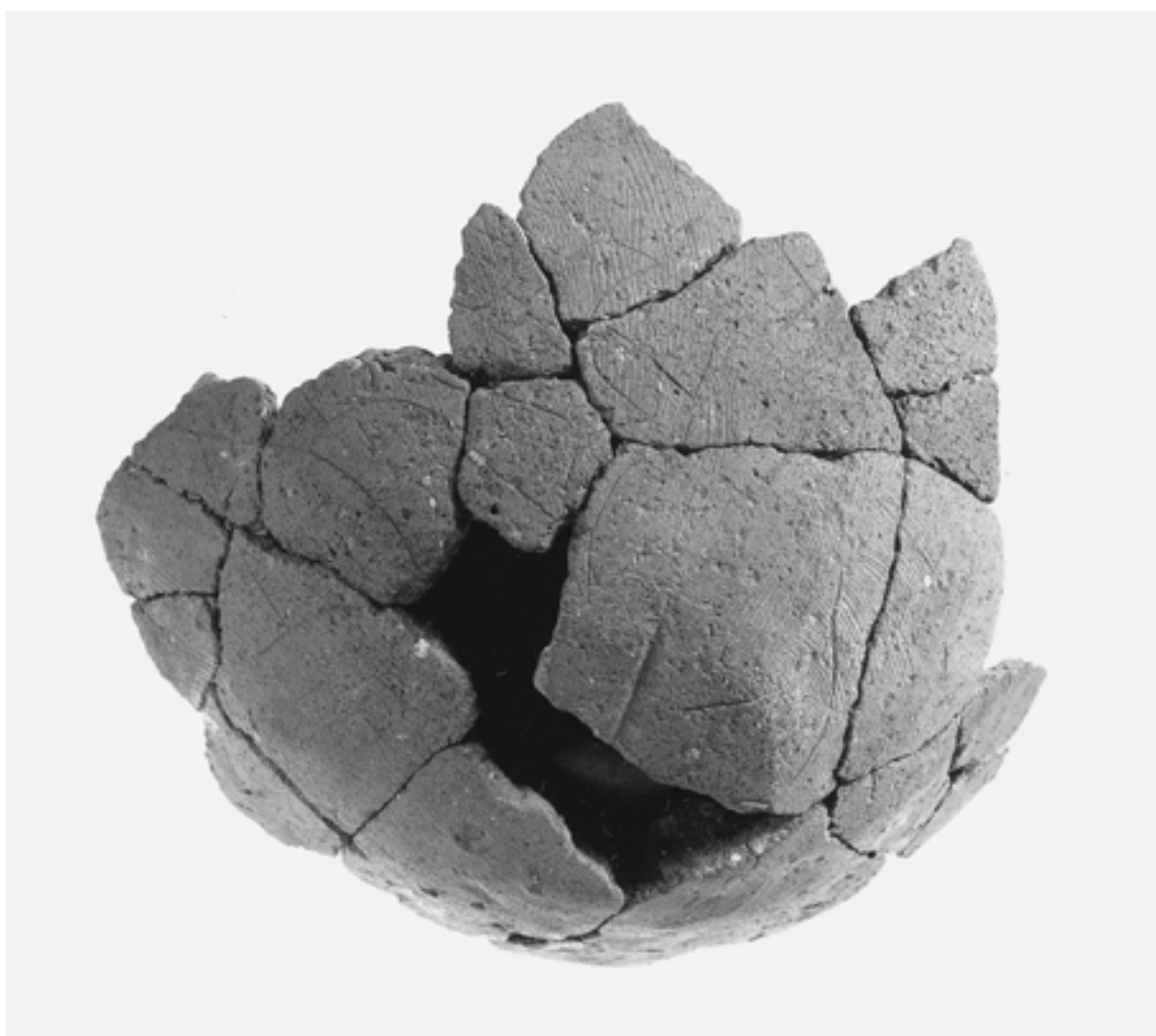


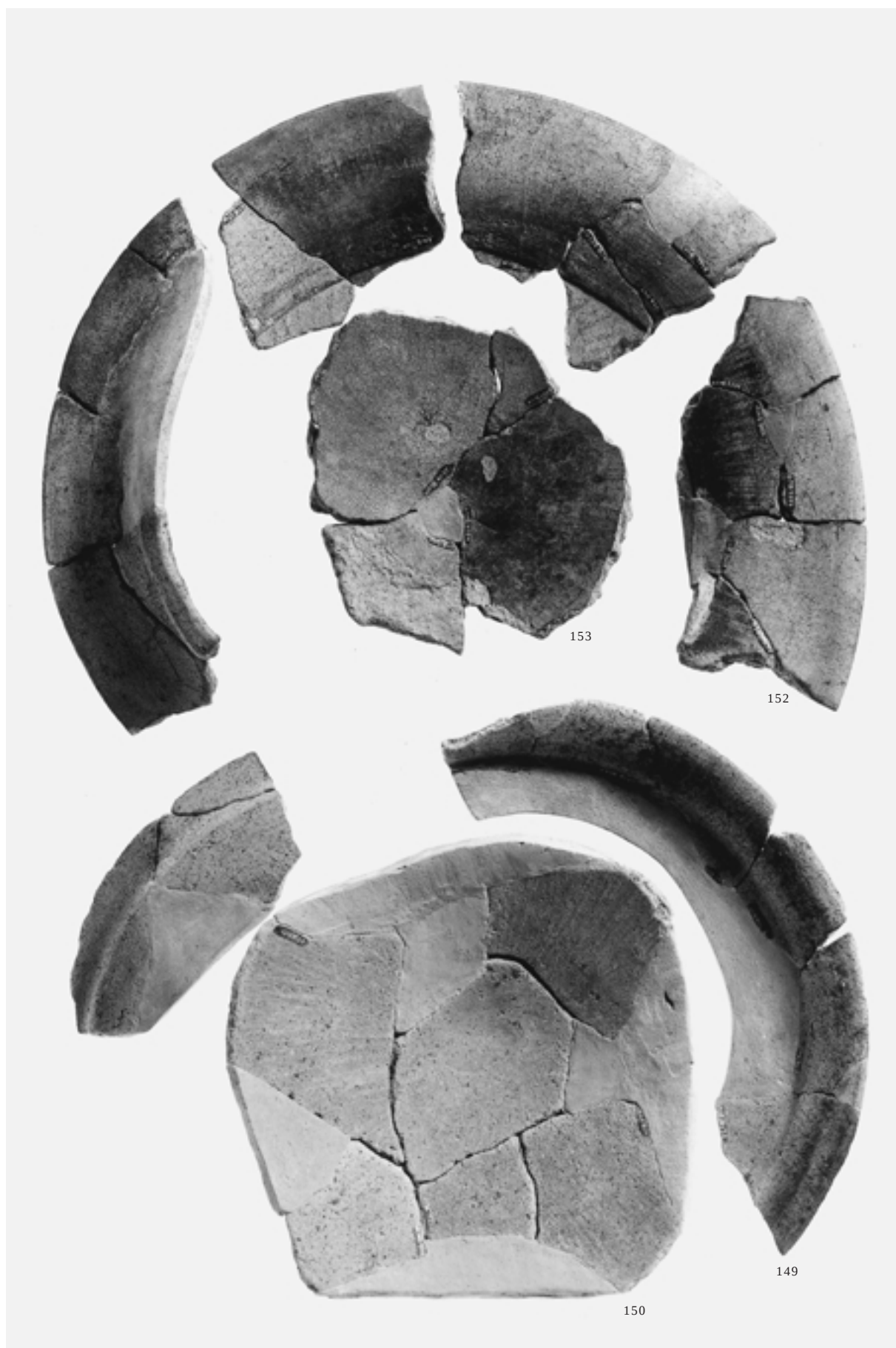


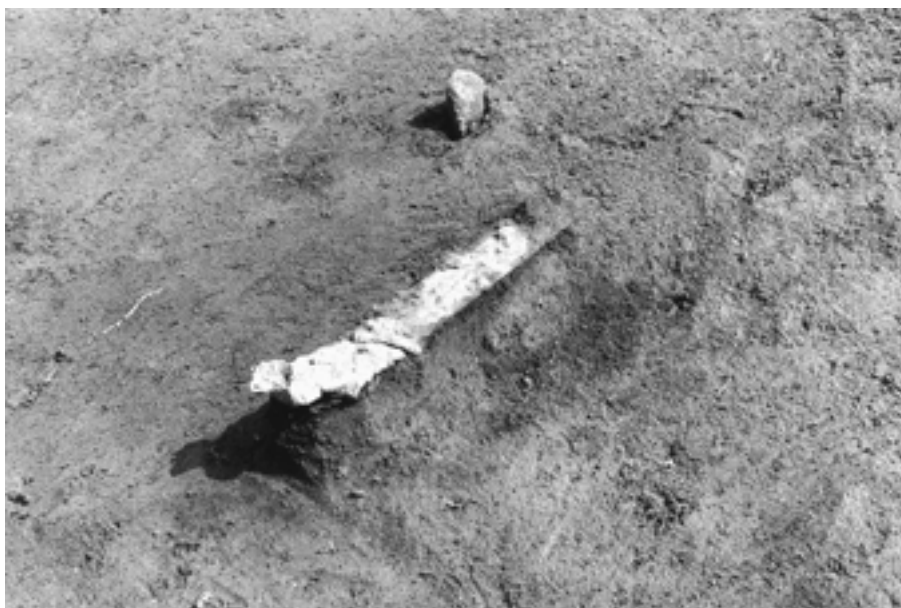




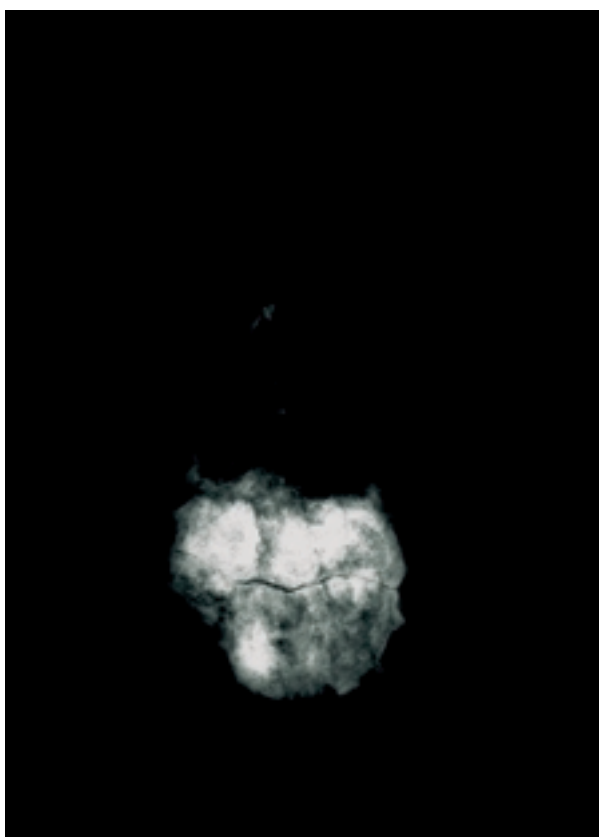


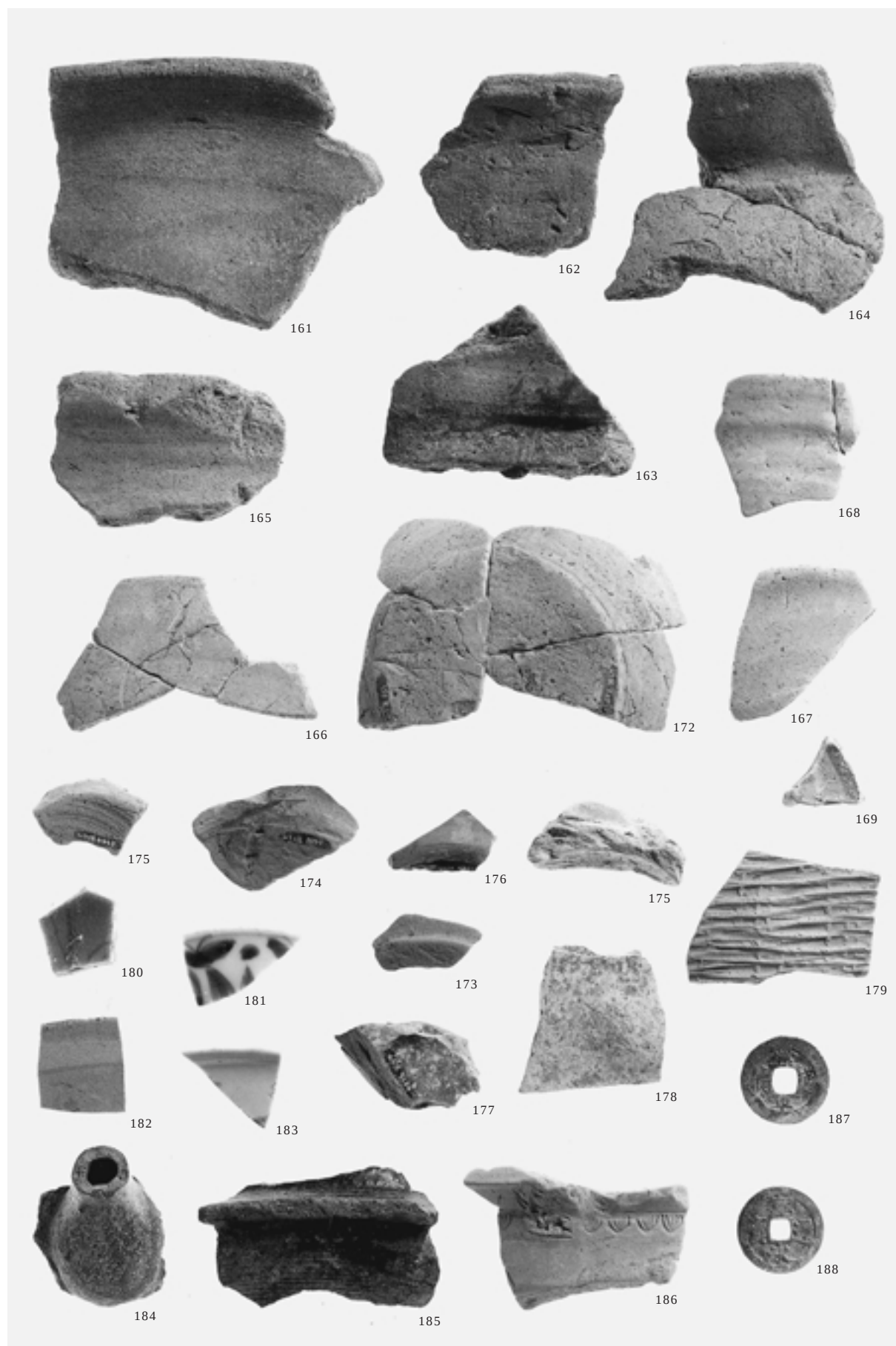


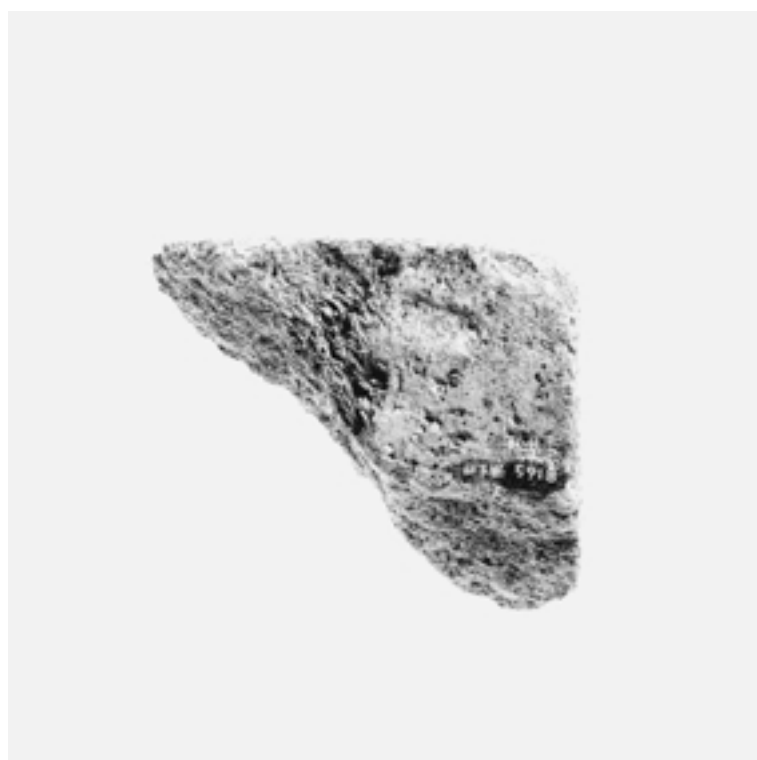




159 出土状況









あ と が き

発掘調査後しばらくを経過しての報告書刊行となってしまった。この間に上野原縄文の森開園に伴い埋蔵文化財センターは移転し、南九州西回り自動車道建設に伴う市来ICまでの発掘調査を終え、本年度九州新幹線及び国分IC～末吉ICまでの東九州自動車道建設に伴う本発掘調査・報告書の刊行を終える予定である。歳月の重さを感じる。本来ならば発掘調査終了後期間を開けずに報告書の刊行を急がねばならないところ本年度の刊行となったことをお詫び致します。

筆者の力量不足で学術に資するものとしては不十分な点も多いこととは思うが地域の歴史や考古学の研究に少しでも役立てば幸いです。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（92）

山下堀頭遺跡

発行日	2005年3月
発 行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 T E L （0995）48-5811
印刷所	株式会社あすなろ印刷 〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36 T E L （099）250-7033